香紅花

八月號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

番紅花第一卷第六號

目次

蟬（詩）……………………………………………………………與謝野晶子……（一）
月に住む人（戯曲）……………………………………………………長谷川時雨……（五）
或る夫人に…………………………………………………………伊達虫子……（三）
俳優の青い鳥（詩）…………………………………………………尾竹一枝……（四五）
浮世（小説）…………………………………………………………小林歌津……（五三）
フェルディの歌劇（上）……………………………………………原信子……（六六）
盲樂師（コロレエンコ）……………………………………………青山菊榮……（七七）
海外消息………………………………………………………………O、P、Q……（二二）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

リラの香（詩）……八木さわ……（一一六）
免職の日迄（長篇小説）……菅原初……（一三一）
C夫人の或る朝（小説）……八木麗……（一七七）
私生兒の母（小説）……神近市譯……（一九二）
果物うりの若者のうたと白い鳩の死……淺井みつい……（二〇八）
編輯室より……同人……（二二八）
新刊紹介……（二二九）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

蟬

與謝野晶子

蟬が啼く、
燻るよに、じじと一つ、
わたしの家の桐の木に。

その音につれて、そこ、かしこ、
蟬、蟬、蟬、蟬、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いろんな蟬が啼き出した。

わたしの家の桐の木の蟬の音は
最初の口火。
いま山の手の番町の
どの庭、どの木、どの屋根も
七月の眞赤な吐息の火に焦げる。

枝にも、葉にも、瓦にも、
軒にも、戸にも、簾にも
流れるやうな朱を注した
光のなかで蟬が啼く。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

無駄と知らずに、根氣よく、
砂を握んでずらす蟬、

鍋の油を煮たぎらし、
呪ひごとする惡の蟬、

重い苦患に身悶えて、
鐵の鎖をゆする蟬、

悟りめかして、しゆ、しゆ、しゆ、しゆ、しゆと
水晶の珠數を鳴らす蟬、

思ひ出しては一しきり

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

泣きじやくりする戀の蟬。
蟬、蟬、蟬、蟬、
熱い眞夏の日もすがら、
蟬の音は
啼き止みて、また啼き次ぐ。

さて誰が知ろ、
啼かず、叫ばず、ただひとり
陰にかくれて、微かにも
羽ばたきをする啞蟬を。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

月に住む人（一幕二場）

時雨

一嫦娥
一翠（その夫）
一隣人某
一旅の少年
一侍女七人

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

唐の古へにも、我國の上代にも、いづれにも似たる極めて古代なる風俗。家造り庭園も自然に、廣々さして華麗ならぬうちに、心地よき感ある光景。月の光りは夢の國を思はせる如く、暗きよりにて明るく隅なく照らす。家造りは上手より斜に三段の階ありて露臺に似たる大理石の巾廣の縁がある。奥の方はけばけばしからぬほどの古みのある錦の帳が引いてある。舞臺は暫く空いてゐる。

婦娘　ありがたうございます。もうお手をおとりなさつて下さいまし。

少年　またお倒れなさるといけませぬから、もすこし此儘まゐりませう。

少年は婦娘の體をささへながら來る。

婦娘　もうよいのでございます。離れてゐて下さりませ。

少年　それでも今宵がはじめてではなし、お一人では危ないやうで案じられます。

婦娘　貴下は妾が病ひのために、あゝやつてゐたのだとお思ひになりましたか。

少年　お體が惡いのに違いないとぞんじます。丁度七日前の夜にもかうやつてお送りいたしました。その三日前の曉方(あけがた)にも…………

婦娘　さうもうせば、貴下は何處やらへお立ちになつてお出の筈ではございませぬか。

少年　さあ――出立するつもりではございましたが、あてもない旅のことゆゑ。それに、すこしばか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り氣になる事がありますので。——それは貴女の御病氣のことでございます。

婦娘　ほほ、妾は病氣ではありませぬ。

少年　なんと仰しやつても、私は心配でなりませぬ。此前の時は、あの桂の樹へ寄りかゝつて、凝となさつたまゝで、二時も三時もおすごしなされました。

婦娘　それを貴下は見てお出でなされましたか。

少年　（恥かしさうに）　なんの心もなく、お隣の美しい夫人を見上げることが出來たと思つて、ついお顔を眺めてをりますと、あなたのお目が段々に空虚(うつそ)のようになりましたので、あとでは無禮なことに氣がつきましたが、ついあの時は御體にさはつてしまひました。

婦娘　あの前の時には。

少年　あの時こそ、ほんの偶然で、叢(くさむら)の露があんまり美しいので、いたづらに拂ひおとしましたら、草のかげに仰向いて寢てお出になつた、あなたのお顔へ、玉のような雫をみんな轉ばしてしまひました。あの時こそ、あの時こそ、私は——。

婦娘　………。

少年　私はどんな罪にあつてもよいと思ひました。私は貴女を仙女だと思ひました。仙女でおありな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さつた方が、貴女の爲にはお宜しかつたことでせう。それからは、もしや御病氣が起りはしないかと心配しながら心待にしてゐるやうな心をもつやうになりました。私は今でも、どんな罪にあつてもよいと思つてをります。

婦人　それで今宵も、おめつけなされたのでしたか。

少年　（大膽に）月のよい夜は、凝として枕についてゐることが出來なくなりました。貴女が庭へお出になるのは、月のよい夜頃ばかりだと氣がつくやうに、愚な心が悧悧うなりました。旅へゆくのもやめにいたしました。私の旅は、何日また此處へ歸つてくるやら、そんな行先の知れた旅ではないのでございます。此處の土から、一たん足を踏出したらば、もう永久歸つてくることの出來ない運命があるような氣がするのでございます。私はもう、自分の心の中に影やまぼろしを寫すのだけでは、物足りなくなつたのでございます。私は及ばぬことを思つて居ります。

婦人　妾も、及ばぬ望みを思ふてをります。

少年　どうぞもうすこし聞いて下さりませ。一昨日あたりから私は戀しさが興じて、狂ひ死をするやうな心持ちになりました。それもさうでございませう、もう七日から、お聲もきかなければ、お姿も見ることが出來ませんのでしたもの。晝は一日閉ぢこもつて、やれ嬉しや夜になつたと思へば、月

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

のない、曇つた空つづき、心が亂れないでゐられませぬ、狂はしうならいではゐられませぬ。どうした事か一昨日から、明後夜は死ぬといふことが、どうしても拭い消せないやうに思はれてまゐりました。それで私は心が強くなりました。どうでも今日はお目にかからなければ、自分の命が危いし、ほんの卯の毛のさきほどでも、仙女のような貴いお方に、及ばぬことを思つてゐたことを知つて頂きたいと……。

嫦娥　それでは、今宵は晴れたので、貴下のお命もあつた譯。妾も久しぶりな光りに逢ふて、懐しうてなりませぬ。

少年　平日ならば、お側にかうやつて居りますのを、誰にか咎められはしまいかと怯へて、とても此處までは參られはいたしませぬ。

嫦娥　さあ、もうお歸りなされませ。今宵は晴れたゆゑ、貴下のむすばれた御心もはれたでございませう。

少年　あれだけ申上げても、もう歸らなくてはいけませぬか。では、――これは私の心ゆかしに過ぎませんから、窺(うかゞ)つては惡いかも知れませぬが、貴女のお望みとかを聞かせて頂きたうございます。もう其上のお願ひは、乾度いたしませぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嫦娥　他人樣に云ふたとて、誰も誠と思つては下さりませぬ。

少年　他人は知らず、私は貴女の仰しやることを、決して疑ひはいたしませぬ。

嫦娥　（思ひ上りし姿にて天に指さす）妾の還る國は、御空に澄む月の世界。妾は月の國の女王に生れなければならなかつたのを、此樣な身に墮て、人妻なぞになりさがつてゐなくてはならないのが、口惜しくてなりませぬ。妾は當然生れてゐなくてはならない、月の懐が戀しくてなりませぬ。

少年　御病氣がまた起りましたか。おいたはしいとは思ひますが——私は今、自分の心に感じたり思つたりしてゐる心持ちを、どういふやうに申上げたらよいでせう。此儘、かうやつて、今宵中お身體をささへてゐることをおゆるし下さいましたなら、明日になつて私の魂は私に返らないものになつても怨みはいたしませぬ。

嫦娥　（少年の手をかろく拂つて）疑はないと仰しやつた貴下は、疑がはないかはりに病のせいになさりますか。

少年　でも、貴女のそのお瞳が。

嫦娥　誠と信じて下さいまし。妾は仙女でございます。妾は仙女でございます。人間の戀は受けることはできませぬ。

少年　さう仰しやるのは、思ひきらせるためなのでござりませう。

嫦娥　もう仰しやりますな。妾もやがて願ひがかなひ、あの國へ還るのも遠くはないやうに思はれます。貴下も明日は御出立なされませ。丁度此國へお出でなされた時のやうに、なんの蟠まりもないお心をもつて、月のまへを通り過ぎる白雲のやうなお心で、妾のほとりを通りすぎて下さりませ。

少年　それは私に死ねと仰しやるやうなものでござります。私とて、なんで的のない旅をいたしませう。私が目に見えないものを探し歩いてゐたといふのは、貴女といふ方を見出すためであつたといふことが、やつと今分つてまゐりました。其貴女を捨てゝ迷ひ出たら、今度は幾萬年、何處をどううろついて歩いたとて、私の求めるものがあらう筈はないと思ひます。

嫦娥　月の光りは温かくはありませぬ。仙女に戀はありませぬ。妾が此世で好むものは舞踊ばかり今宵もあんまり踊りすぎて、倒れてゐたのを貴下に助けられました。妾は自分で自分の踊るを見たより外に、ついぞ他人に見せたことのない踊りを、優しい、いとしらしい貴下の旅立のお餞けに、お目にかけませう。

少年　忝けなうござります。死の國へゆく旅立には、過分なお餞別でござります。

嫦娥　（舞の姿勢にて）月の光りを一ぱいに浴びて、今宵は出來るだけ華やかに舞ひませう。が、御覧な

されませ、妾の手から、肩から、いいえ髮の毛から流れおちる色の冷たさ。どうして胸に赤い華が咲きませう。貴下は戀の芽のめぐむ、温かい處女の胸をたづねてお出なさらなければなりません。（舞ふ）さあ、もうお別れの時になりました。

孀娥は舞ひながら幔の奧へ入つてしまふ。少年は後を追ひかけて、階段に足をかけながらたゆたつて、以前の場處にかへり、土に座して思ひにふけつてゐる。

隣家の主人忍びやかに來る。

隣人　おお、此處に御座られたのか。や、も、ゑらく探しましたわい。どうなされたのぢや、顏色もようないし、何やら思案にあまつたやうにも見える。さ、さ、御座りませ。夜露に長う濡てゐると體をしまひますわ。それに御頭はどうやらお加減もようないによつて、大切にしなくてはなりません。見ず知らずの國で病らうたら、難儀なものでござりますわ。いや、私が性根は、いかに旅の客人ぢやからとて、病ふた人を、粗末に取りあつかふやうなものぢやないが、こなた樣の心柄から、物淋しう思はしやるのが氣の毒に思はれるのでござる。さ、私が手をとつてあげます、そろ〳〵と歸つて、心をやすめたがようござりませう。――よう、此處は隣家の、しかも主人の居間の前のやうな、長年隣りに住まうてゐる私さへ、今初めて來たところぢやに、こなた樣どうしてお出たのぢや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

少年　（力なく、連れられて歩みながら）私は一人では來ませぬ。

隣人　さうでござりませうとも。だが誰がお連れ申したか。や、も、此家の主人は噂の高い嫉妬の强い人でなあ。

少年　え。

隣人　美しい夫人を見られるのが嫉ぢやといふのでな、晝は一寸も外へ出しませぬわい。

少年　それは誠のことでござるか。

隣人　噂といふものは、えて間違ひを傳へるものでござるがな。これは正當なこと、決して餘分な作りごとではありませぬ。それが證據には、私は此樣に頭が拔けて上つてしまふ年まで、隣家にながらへてをりますがな、ついぞ夫人の姿を見かけたこともありませぬ。美しいといふのも、大方見たこともないものの、當推量かと思つてをつたほどでござります。

少年　それは違ひます、まつたく美しいお人です。美しいといつては勿體ないやうな位です。此世の人とは思はれないほどなお方です。

隣人　さうでござります。さうでござります。それに違ひございません。いや、私もそれほどではなからうと一人極めをしてをりましたがな、ところが、嫉妬深いといふ此處の主人の口から、つい先頃の

ことゝ、女房が美しいので心配でならないといふ愚痴を聞きましたので、こりや本物だわいと存じました。

少年 （興奮して）どうしても、も一度逢はなくつちやならない。私はどうしてもあの女から離れることは出來ない宿命になつてゐるのだ。

隣人 だが、あなた様はどうして夫人の美しいことを御承知になりました。

少年 今宵がはじめてではありません。もう逢つてから二度になります。そして其度に、あのお方の病ひの介抱をさせて貰ひました。

隣人 へへえ。

少年 私は長い間、諸國を流浪して、あのお方をたづねてゐました。

隣人 ああ、それでよく分りました。以前からのお知己でござりましたか。もし、それならば御願ひがござります。なんと叶へて下さりませうかな。

少年 私にも願ひがあります。

隣人 私のは、あなた様のお手引で、何處の物蔭からでも苦しうござりませぬゆゑ、一目拜ませてお貰ひ申たうござりますが、どんなものでござりませう。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

少年　それならば私の願ひとよく合ひます。私もも一目逢ふて行きたいと、それで此所に今迄ゐました。

詩人　それによい事がござりますわ。萬一主人に目つけられましたらばな、あなた樣が旅のお客人ゆゑ、つい庭うちをうろついてゐられましたから、私がお迎ひに出ましたと、よい言拔けが出來ますでなあ。さあ、さ、其處らへ忍びませう、お出なされませ。

舞臺また暫くのうち空虚となる。やがて嫦娥は輕らかなる衣服と着代へて、侍女をしたがへて出で來る。侍女は七人とも同じ樣なる衣服にて、同じ年頃の若き顏の美くしき女。其一人は嫦娥のまとふ薄き衣を持つてゐる。

侍女一　今宵も露臺で御寢遊ばしますか。

侍女二　御枕を持つて參りませうか。

侍女三　お床もなければ、お體におよろしくござりますまい。

嫦娥　いいえ此儘がよい。私にはどうしても寢られはしないのだから。

侍女四　殿樣は、どうしてもあちらへお連れまをせと仰せられます。

侍女五　月の光りが、お眠りをさまたげるのだと仰せられました。

侍女六　おの厚い帳のかげの、お寢間へお連れまをせと仰せられました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

侍女七　そしてあの、私共がお二方様のお仲を裂くのだとの御意でござります。

侍女一　私共がお附添ひ申してをりますので、あなた樣が殿樣につれなく遊ばしますと、御意さなれます。

嫦娥　殿樣には、どのやうに申上げても、私の心持ちがお分りにならないのだから仕方がない。そして私の厭がることばかりお撰みになつて、私を慰めて下さらうとなさるから、つい厭はしいと思ふやうにもなる。このやうな折には、投つておいて下されて、遠くの方から眺めてお出遊せばよいものをあゝからういらくなさるので、猶更私の心を遠くへやつておしまいなさる。さうは思はないか。

侍女一　さもあなた樣に、思ふお方があるように仰せられまして、猥なやうに御意遊ばしますのが、くちをしうござります。

侍女七　私共が番兵のように御守護をして、殿樣を近づけぬことや、他のお方をお寢間へお呼びまをす役目のように、口汚なう仰せられます。

嫦娥　さう思召すお心ゆゑ、妾の戀を人間界のことゝよりお考へがつきかねるのであらう。

侍女二　御安心遊ばしませ、夫人が焦れてお出遊ばしますのは、あの月の御國なのでござりますと、いかほど申上げてもお聞入れがござりませぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嫦娥　お聞入れはあるまい。妾があるだけの言葉をならべ、人の口で云へるだけは云ひつくしてみても妾の思ふてゐることが酌取れぬと仰しやるもの、そなたが云ふたとてお聞入れは遊ばすまい。

侍女六　此頃殿様は、不思議なお藥りをお手にお入れ遊ばしました。

嫦娥　さういふことは妾も聞いてゐる。なんの藥なのか知つてゐやるか。

侍女五　私には靈藥だと仰せられました。

侍女三　西王母様といふ仙女から、おさづかりになつた、不死の藥だとのことでござります。

侍女四　あなた様にもそれを差上げ、殿様も召上つて、不老不死の御契を、おかため遊ばすのだといふことでござります。

侍女一　それは珠玉の小さい壺に入れてござります。私はあなた様のお爲に、その靈藥を盗らうといたしましたが、どうしても手に入れることがかなひませんで、悲しうござります。

侍女七　あの靈藥がお手に入れば、あなた様のお望みは、屹度かなふような心持ちがいたします。

侍女一　私共は、みんな然う信じてをります。

侍女七　あの靈藥を、お手に入れる御工夫をなされて下さりませ。

嫦娥　妾の影のようなお前達。妾の心の影のようなお前達。嬉しう思ひます。どうぞ妾の心に智惠と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勇氣とをつけておくれ。

侍女二　さ、今宵も御氣分のよくなるやうに、私共は舞ひませう。

侍女三　お心がちらぬやうに、凝と月を御見詰め遊ばすやうになるまで舞ひませう。

侍女四　それでは今宵を、御機嫌ようおすぐし遊ばしませ。

侍女五　朝になりましたら、御機嫌をうかがひます。

侍女六　一日もはやく、御空にお還りなさることの出來るのを、お祈りいたします。

侍女等は嫦娥を中にして、はじめは小さな輪となり、次第に大きな舞の輪になつて、各自に思ひ〳〵のところへ消去る

嫦娥は圓き鏡を取出して、面影を見入る。

嫦娥　不死の靈藥がなんで人間の世界に入用があらう。月に住むものこそ不死の身でなくてはかなうまい。妾はかうして、幾夜、幾年此儘にしてゐるのであらう。人間の身には限りがある。ああ、戀しいは御空の國。今宵も影をさへぎる叢雲のやうな邪魔もない、思ふままに眺めあかさう

嫦娥は階段に寄かゝりて、薄き衣をまとひ横になる。

嫦娥の夫の羿、帳のかげより忍びやかに出來り。妻の傍に寄る。

羿　嫦娥、お前は今宵も此處で、私を離れて明かすのか。それもさうであらう、奥にゐては、何かと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

便りがわるからうからの。

嫦娥　何も仰しやつて下さりますな、どうぞ離れてゐて下りませ。

羿　さうはなるまい。さうしたらばお前の勝手はよからうが、私の身分がさうはさせておかれない夫といふ名がさういふ我儘を許しておく事が出來ない。

嫦娥　貴夫は熱に病む人を御覽になつたことがござりますか。病むものは冷るのが惡いといはれても、熱いのは苦しいのでござります。御親切はうれしう思ひますが、妾は錦の床よりも、御空を眺めて石の枕が好みなのでござります。

羿　それは聞きあきたほど古いお前の言種だ。一夜さ二夜さなら知らず、それも寢あきた秋の長夜のすさみなら、與もあらうと許しもしやうが、汝のは毎夜のようではないか、偶々奥に寢るときには一夜さ泣きあかしてゐる。そんな晩は乾度暗夜の時ばかりだ。私がそれを知らぬと思ふのか。月の夜には誰が忍んで來るのだ。

嫦娥　そのやうなことを聞くのは、もう幾させになりませう。妾は聞きあきました。

羿　私は言ひあかぬ。汝といふものの心が知れなければ、幾年同じところに住んでゐたからとて、女夫といふ心が許された仲とはいへない。私はそれが悲しいのだ。がそれが知りたいのだ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嫦娥　妾は女夫といふものになつたのを悲しみます。妾の爲にはたつた一つそれが障礙になつてをります。清い童貞で此身があつたなら、妾の願ひはとうに届いてゐる筈ぢやと思へば、怨めしうてなりませぬ。

翠　さういふ事を云ふのも、二人の仲に何か解けぬところがあるからなのぢや。人間の睦みに、女夫ほど緣の深いものはない。其二人の仲に解けぬ謎はない譯ではないか。汝にさういふ心をもたせるのも夫の私に半分の責はある。私はどのやうに手を盡しても、頑な汝の心をといて見せる。

嫦娥　それは無益でござります。千年萬年經ても、貴夫にこの思ひやりは出ませぬ。悲しいことでも、妾の心は貴夫の御手には歸りませぬ。

翠　千年でも萬年でもよい。私は其爲に出來るだけのことを盡して見やう。汝は知るまいが、私は不老不死の靈藥を手に入れることが出來た。汝が今思ふてゐる男に死なれて、また新らしいものが出來やうとも、いつまでも私は待つてゐる。私は私の手に汝を取かへさないではおかない決心をした。

嫦娥　其樣な深い執着が附きまとふゆゑ、妾の望みはとげられぬのでござります。（泣く）　妾はもう此儘やがて遠くはないうちに墓石となりませう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

羿　何故そのやうな聞きわけないことをいふ。汝が愛しうてならぬゆゑかうも思ふのではないか。汝を死なしてよいものか。此世にありとある快樂は二人で受けるのぢや。我儘をいふまい。此樣な寢床にゐては、誰しも惡い熱になる。それとも、强て此處に居たいといふのなら、今宵から私も此處を寢床にする。妻の傍に夫のゐるを拒むわけはあるまい。

嫦娥　いえ、いえ、退いてゐて下さりませ、退いてゐて下さりませ。どうでも退いて下さりませぬならば、妾は裏の沼へいて、水底の冷たい床に眠りませう。沼の底ならば誰も妾の魂を搖り起すものもなく、貴夫も御心安うなりませう。妾も望みを諦めてしまへば、一番よい寢床だと思はれます。岸の桂の木の梢から、月が夜もすがら水底をさし覗いて、あわれな女を勞つてくれませう。

羿　よいほどにせぬか。汝をそのやうな身にしやうとて私は苦しみはせぬ。汝がなくてなんで不死の靈藥が尊からう。それでは私は退いてゐる。あの帳のかげまで退いてゐやう。（行きかけて、立歸りながら）妻よ、私が妻よ。——嫦娥、私は見せておくのを忘れてゐた。これが靈藥の入れてある壺なのぢや。私は此壺を、汝の寢床にあててある珊瑚の枕の上においておく。いつでもほしうなつたら取りに來るがよい。が、ようおぼえておくがよい。密夫なぞはやがて厭るものぢや、靈藥なぞくれて悔まぬやうにしたがよい。どうぢや、私は汝を此やうにまで寬大にしておく。汝もよい時分に我慢を捨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て丶來た方がよいやうだな。

　　羿は小さき壺を見せて、見返りがちに去る。

嫦娥　――不死の靈藥がほしい。靈藥の功德ならば、人界に汚れを去つて思ふ國へも行かれるであらう。――胸が騷いでならぬ。盜みといふことは、どのやうに貴い事の爲でもすることではない。此樣に思ひみだれたことは、ついぞ今までにないが、吉い祥か、不祥な知らせか。ああ、どうぞしてあの靈藥がほしい。妾が寢間とさだめられてゐる、あの寢床の、珊瑚の枕の上には靈藥の壺がおいてある。取りにゆくのは盜みにゆくのではない、――盜まずに取るには――傍に人が居る、障礙がある。靈藥を取るために、今日まで身を淸くしたのを破りたうもない。――迷ふまい、迷ふまい。天から許されて月の國へ登ることが出來るをりには、自然にゆける道があらうもの、焦慮つたり苦しんだりして、强て求めたのではそれだけの價額がない。

　　第七の侍女、いづくともなく現はれ出て、嫦娥の裾の方に居る。

侍女七　御自分からおつくりになつたものこそ、貴女樣の貴い御命がこもつてをるのではございますまいか。

嫦娥　妾は思ひきつた、諦めた。此儘かうやつて、凝と御空を見詰めてゐやう。其まゝで終るのが定命

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ならば是非がない。

侍女七　それは御卑怯でござります。諦めたと仰せられましても、丁度雨雲が被ひかゝつたやうなもので、通過ぎますと、また以前のまゝの御心になるでございませう。以前よりはもつと愁く、やるせなう思召しますでせう。

嫦娥　夜露に濡れて、この冷たい石の床の上で、月に守られながら永久の眠りにつきたい。夜の間に白い雲が降りてきて、妾の魂を夢のまま乗せていつてくれたなら、妾はそれで満足する。明日は冷たい形體ばかりが殘つてゐたなら、つれなく引止めた人も、心安うなつて滿足するであらう。

第一の侍女、帳を奥よりかかげて上半身を出す。

侍女一　お夢のうちにお迎ひは近よつてまゐりました。お出かけの御用意をなされたがお宜しうござります。

第一の侍女は一度は姿を帳の奥に消して、すぐに靈薬の壺を持つて出てくる。
第七の侍女は、嫦娥の上衣を脱がせる。嫦娥は意識なく夢の中のやうに立上る。

侍女一　貴女樣のお枕の上にあつたものを、あなた樣がお取りになるのは、盗みでもなんでもござりませぬ、御安心遊ばしておよろしいかとぞんじます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

侍女七　さ、御用意は調ひました。今宵の今夜を、兼々どのやうに待久しく思召しましたことでござりませう。私共はお察し申上げてをります、

侍女一　何事にも御心をお殘し遊ばしますな。潔よい、すがすがしいお心地でなくては、これから月に曇りが出來ませうかとぞんじられます。

侍女七　殿樣のお目がさめぬやうに、あなた樣のお側へお近より遊ばすことの出來ませぬやうに、私共は舞の輪をはじめますでござりませう。其うちに早うお姿をおかくし遊ばしませ。

嫦娥は靈藥の壺をさつて行きかける。他の五人の侍女も、いづくともなく影を現はして大きく舞の輪をつくる。嫦娥の去るこ同時に舞臺は薄暗くなつて、舞の輪も小さくなる。舞臺廻る

一面に薄のまじりたる芦洲、下手より奥へ深く沼になつてゐる。

月は折々明るく暗くなる。

嫦娥は宙を行く人のやうに、氣高き面もちにて、緩やかに出來り、沼の上を奥の方へとゆきかける。白き雲煙のやうに細き腰のあたりに流れかかつてゐる。

少　年　待つて下さりませ、待つて下さりませ。

嫦娥は心もち佇んでゐる。

少年　私は惡いと知りながら、貴女方お二人のおはなしを聞きました。貴女のお心はすこし知ることが出來ました。どうしてもあなたが、此土の上に住んでゐることがお厭ならば、私は決して無理なお願ひはいたしません。どうぞ其代りには、私の影も貴女のお出のところへお連れになつて下さりませ。――ああ、お待ちなさつてゐて下さりますか、忝けなうござります。私が貴女に差上げるものとては何にもありはいたしません。此命をと申上げたうござりますが、貴女には私の命なぞが、何の足しにもならないといふことは、愚な私にもよく分つてをります。私はもう貴女のお手に縋らうともいたしますまい。貴女のお體に手を觸れやうなぞと、だいそれた事も願ひはいたしません。どうか私といふものの信實を哀れんで下さりませ。それでもう私の望みは足りるのでござります。此沼に私といふ貴女に許された、しがない旅のものが、滿足して永住してゐるといふことだけ、どうぞお忘れなさらずにゐて下さいまし。私は丁度先刻貴女のお口から、貴女が仰しやつたやうに、此沼の水底を永久の眠の庇にいたしませう。それがどんなに滿足だといふことは、どうぞあの桂の木の梢から御覧になつて下さいまし。私の寢顔は、不斷微笑んでゐるに違ひございません。お止めましをしましたのは、これだけを聞いて頂きたいと思つたからでございます。も一度、はつきりとお顔

が拜みたいやうな氣もいたしますが、折惡しく曇りました。もしや、これは私の思ひ上りかも知れませんが、貴女は泣いて下さつてゐるのではございますまいか。さうならばそれはお心得違ひだと思ひます。どうか私の爲にも、貴女の爲にも、御心を曇らさずにお出なさつて下さいまし。月の面が曇りましては、水沼から見上げるのにどんなに淋しいか知れはいたしません。長いお別れのやうでゐて、却て今迄よりもお親しくすることの出來るのを、私は嬉しいと存じて居ります。人の世の掟なんぞといふものは、もう私には今日からなくなるのでございますもの。そして每晚お姿を仰ぐことが出來るのでございますもの、樂しくなくつてどういたしませう。

月影暗くなるさ、嫦娥は顏を被ひながら、さめ〴〵さして、やがてたゆたひながら沼の奧の方へさ行去る。月影はまた以前のやうに明るくなる。少年は嫦娥の行衛を見定めるやうに眺めてゐる。

少年　私は嫦娥さまが、思ひにふけつてお出なさる時を見出しては、あの方の尊い時間の邪魔をしてゐた。それだのにあの方は少しも私を憎んではゐらつしやらない。私はどうしても、此心地を失つてはならない。戀しいの、お側へゆきたいのと、汚れた考へをすこしでも交へてはならない。嫦娥さまが空から見下して下さる時に、私は地の底から見上げてゐやう。こんなことを思つては惡いかも知れないが、私は唯一人、土に生てゐたものゝ中で、嫦娥さまが許して下さつた誇りをもつてゐる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

身なのだ。

少年は獨言きながら、段々と沼の深みへ入つていつて、やがて姿を沒してしまふ。月暗くなる。

隣人先にたつて翠が來る。

隣人　お庭中をさまよふてをりましたのは、全く私奴の罪でござります。そのかはりには、貴君樣の御心配の種になつておつた和郎の、在家をお知らせまをしますお約束は、決して拒みはいたしませぬ。

翠　妻が出奔した對手の男は、こなたが聞かせて下さつた男にしては、ちと少年すぎるかと思はれるが。

隣人　仰しやりますな、夜な夜な逢ふてゐたといふことを、私はちやんと心得てをりまする。それに、夫人には御病氣があるとか申しましては、お手をとつたり抱へまをして、御介抱をいたしたやうにも聞きました。

翠　いや、嫦娥には病氣はすこしもない筈だ。私に逢ふのが嫌な時だけ、病氣だといふ我儘があつた。

隣人　で、ござりませう。つまり御病氣と仰しやつて、介抱をおさせになつたものと見えます。や、た

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しかに此邊へ來たやうに、後姿が見えましたが、此處はもう古沼でござります。これから先は人の歩く道がござりませぬ。

翠　噓りを云ふて、私を此處まで連れて來た暇に、二人を遠く逃がさうといふ手筈であつたな。

隣人　めつそうもないこと。考へても御覽なされませ。旅人を宿らせるが渡世とはまをせ、あの少年は、何處から來て何處へ行くのやら、氏も知らぬものでござります。それも黃金でも多く貯へてでもゐたことか、あまり財袋の重い方ではござりませぬ。それを年頃のお知己に代へてよいものでござりませう。夫人ぢやとて、黃金はお持ちだしなさりはしますまい。

翠　それもさうぢや。嫦娥が盜んでいつたのは、靈藥ばかりだ。

隣人　それ御覽じませ。だが、私はたしかに此道へ現のようになつてゆく男の姿を見かけました。あれほどに深う思ふてゐたのゆゑ、其一足さきには夫人のお姿が、てつきりある筈でござります。

翠　さういへばさうも思はれる。なんといたされた。

隣人　不思議なことがござります。あの男はどうしたものか、身うちから譬やうのない好い薫りを匂はせてをりました。それがどうやら、沼の中から薰つてくるやうでござりますわい。

翠　沼の中からではあるまい。我々が來たのを知つて、其處らに隱れてゐるのであらう。近間の蘆

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のかげを探したら二人とも居やうぞ。

隣人　なるほど左樣なことでござりませう。――や。

翠　目附け出されたか。

隣人　いや、かいくれ姿は見えませぬが、水ぎはに此樣に光りのある、白露の精のやうな、月の涙のような珠が一顆落ちてをりました。

翠はその玉を受取つて透かして見る。

隣人　何か不思議は見えませぬか。

翠　何も不思議は見えない。ただ、光る月の中に、暗い影が出來てゐる。

隣人　ほら。私にお見せなされて下さいまし。やれやれ。やあ、やあ、やあ、不思議が見えぬだんではござりませぬぞ。あれあれ、月の中に七人の乙女が舞ふてをりますわい。そして眞中の桂の木の下にこなた樣の夫人が座つて面白さうにそれを眺めてお出でなされますわ。

翠　何をいはれるのだ。そのやうなことはない。私にも一度見せたがよいわ。

隣人　さあさ御覽じませ。あなたの夫人と云はうより、月の神樣といふたはうが似合うてをりまする。

翠　私にはなんにも見えない。矢つ張りもとの通り、月に曇つた影が見へるばかりぢや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隣人　ごれ〱。いいや其樣なことはござりませぬわい。舞ふてをります、舞ふてをります。や、夫人が立つて桂の木の梢へお登りなされた。――や、沼の底に、あの少年の面影が見えた。

月暗く闇夜のやうになる

隣人　あれ、をしいところで月が曇つてしまつた。私は明けるまで此處を離れますまい。

翠は立去りがてらにつぶやく聲のみする。

翠　不死の靈藥を盜んだ女だ、沼へはいつて死ぬやうな馬鹿なまねはしまい。道をかへて探したら追附け歸つてくるだらう。

音もなく靜かに幕

（大年三年七月廿三日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或る夫人に

伊達虫子

あなたは此頃大變强い神經衰弱に犯されて入らつしやるさうでございますね。私もすつかり調子が狂つてしまひまして、する事なす事が、みんな世間の法則の反對へ反對へと出るらしいのでございます。自分では決して間違つた事をしてないつもりでもありますし、間違つてると思ふ處は自ら謝罪(あやま)りたいと思つてすべてを正直に正直にと思つてるのでございますけれど、それが又みんな間違つてると云はれるのでございます。それでもう、近頃ではとんと何をどうしたら好いのか分らなく

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なつてをります。

一と頃あなたと私と大變に仲を好くした事がございましたつけねえ。その時、あなたと私との間には何のさはりもなかつたのに、世の中のあるさまたげからとう〳〵私どもは御近處に居ても口も利けず、遠くへ離れてからも手紙も上げられなくなつてしまひました。それから久しくたつて昨年の夏、あなたが尋ねて下さいました時には、私はほんとに思ひがけなかつたので、取次の者からお名前は聞きましても、よもあなたと云ふ事は信じられませんでした。

それで、私は疑ひ疑ひ玄關に行つて見ますと、其處にまがひもないあなたが立つて入らつしやるぢやありませんか。私は思ひがけぬ夢よりもつと驚かされました。あなたがその時私の手をひしと握つて下すつた力はいまだに私の指に殘つてをります。私はそののちも幾度その時の嬉しさをたれかに向つて言ひたかつたか分りませんでした。けれ共、又、つまらない嫉妬の爲めにあなたと私との秘かに繫がれてゐる糸を切られるのが惜しくて、私はそつとその嬉しさを納つておかなければならぬ苦しさを味はなければなりませんでした。

この時もあたは見違へるばかり痩せて入らつしやいました。もうそれから一年にもなります。めなたと私とは相變らず世の中のあるさまたげの爲めに交通も出來ずにをります。けれ共、私はつね

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に幽かに時々聞えて來るあなたの御噂に耳を傾けてはあなたの御身を案じてをります。

あなたの神經衰弱はいよ〳〵強く、又その上近頃御不幸がおありのやうに承りましたが本統でございませうか。もし本統なら、さだめし御力落しの事だらうと私は外の人の不幸にもまして御愁傷に思つてをります。

短かい時ではありましたが、私は、あなたから、主婦として心得べき事をどんなに澤山敎へて頂きましたでせう。私が少しは世帶なれて、毎日出し入れの主人のカフスやカラーやネクタイの置き處までをきちんと極めて授し廻らなくても好いやうになつたのもあなたのおかげでございます。どうかして外國人に逢つてもまごつかない落着きを持つやうになつたのもあなたのおかげでございます、――英語をしつかりやつてお置きなさいと進めて下すつたのもあなたのが一番私に力がありました――私がいまだに一頁に幾時間もかゝりながらも英語を讀んでゐるのもあなたのおかげでございます。子と云ふものゝ爲めに親切な苦勞をする親の心、良夫と云ふものゝ爲めに人知れぬ心配をする妻の心、下女と云ふものゝ爲めにも我慢をしなければならぬ主婦の心、などを自然に敎へて頂けたのもみんなあなたのおかげでございました。つまり私はあなたの爲めに始めて「妻」と云ふ觀念を最も自然に、最も易しく、そして深く彫み込まれたのでございました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同時にあなたは、私と云ふ妻らしくない、子供のやうな心を持つた女――そしてあなたとは全で違つた世間を通つて來た女――の爲めに、毎日毎日同じ事より外に見聞く事の少なかつたあなたが、私によつて始めて世間にはあなたの知らぬ色がまだ〳〵幾らもあつた事をお知りになつて、「妻」としては豐富なあなたも「人」としては大變に貧弱であつたのを知ると同時に、それが私のやうな、馬鹿げたひやうきんな女から傳へられる事を必ず興味ある事に、お思ひになつたであらうと云ふ事を私は信じたのでございます。

あなたは私によつて濕ひ、私はあなたによつて富みました。そしてあなたと私との間には、何の欲望も何の嫉妬もなしにおつきあひする事が出來たのでございます。けれ共不幸には、――厭な例ですが、――昔牢屋住ひを長くしたものに、急に日の目を見せたり又は急に絹のものを被せ、疊の上に置くと、思ひがけぬ「死」が其者をおそふ事があつたやうに、私達二人の間にもそのきづかひが置かれたのでございます。その爲めあなたと私とは自然逢ふ事も話すことも出來ぬやうにされてしまつたのでございました。

それからと云ふもの、形は違つて居たかもしれませんが、あなたと私との間には長い退屈がつゞきました。その結果があなたは强度の神經衰弱に落ち、私はまた斯うして旅から旅をさ迷はねばな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らぬやうなはめになつてしまつたのでございます。あなたはさうとは御氣がつかないかも知れませんが、私は確かにさうだと信じ切つてをります。

あの時、あなたと私との間に何のさまたげも無かつたのならば、あなたも私も、かうした不幸には必ず逢はなかつたらうと思ひます。さう世間で思ふやうに、あなたは、そんなに深い「牢獄に這入つてゐた方」ではありません。私は又さう大して「強い日の目」では無かつたのです。あなたと私とは丁度好い按排に調和されて、其處に潤ほひのある豊かな何事にも不足のない好い奥さんが二人出來やうとしてゐたのに、世の中がそれをさまたげて置きながら、世の中は又二人をかうした不幸につき落してしまつたのでございます。

私はさうした目先の見えぬ世の中に生れ合した事を只恨むより仕方がございません。

それからも多分あなたの神經衰弱は強くなつてゆくばかりでせう私の「間違ひ」もいよ〳〵酷くなつてゆくことでございませう、だからと云つて今更、あなたと私とつき合した處がもう間に逢ひはいたしません。あなたはもう餘り深く神經衰弱に食ひ入られて入らつしやいます、私は又「間違ひ」に深く食ひ入られてしまひました。只私達二人は、かう云ふ「なりゆき」にされてしまつた世を恨むより仕方がございません。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

どうぞあなたもおあきらめなさいまし、私もあきらめます。そして、其處に、あなたと云ひ、私と云ふものが別の方面からとは云へ、互ひに間違へられてゐる世の中をくゞつて、秘かに細かい糸で繋がれてゐると云ふことを思つて、お互ひに少しの苦痛をでも逃れやうぢやございませんか。そこに僅かなりとも二人の休息を求めやうぢやございませんか。

私は此處にあなたの御病氣をおなぐさめする爲めに思ひいづるまゝの幼な語り、夢語り、又聞いた事見た事何に限らず、あなたの御病氣に障りさうもない事を短かくつゞつて書いて行かうと思ひます、そうしてあなたはそれをお讀み下さる中、私はそれを書く中丈でもお互ひに昔、春、夏の花の匂ひの美しい頃、あの綠のカーテンのかゝつた西洋間で、心地よい風に吹かれながら樂しくお話をした昔に返つて見やうぢやございませんか。

第一話。

髪

私は今日髪を洗ひました。夕方でしたけれど夏らしい好い風が吹いてたので直きに乾きました。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一番おしまひにゆすぐ時に好い匂ひの油を二三滴落したので、髪はしつとりして好い香りがしてをります。

私の髪は立つと腰の邊まで長さがあります。そして髪の數も少ない方ではありません。それでも十七、八の頃から見るとずつと減つて居ます。――まだあまり束髪に結はぬ頃なので私はいつも銀杏返しに結つてをりましたが、まん中を結へる元結が、いくら締めても浮いてしまふ位にその頃は多うございました。髪の毛の先が裂けてゐる質なので、銀杏返しの髷を一つ曲げてからの先の方が太くて結び憎いからと云ふので、髪結に頼まれて親指の太さほどそいだ事もありました。――

私は間もなくその洗髪を前髪も何も出さずにおばこのやうに束ねてピンで止めました。平打があれば平打で止め度いのですが、さうしたものに貧い私はマア間に合せにピンで止めまして髱を少し引き出す加減にしてゴムのパラフの鬢櫛で廻りを搔いて夫を根にグイとさし込みました。どうしたのか、今日は束髪に結ふ氣も銀杏返しに結ふ氣もないのです。

私は結ひ上げた髪と顔とを鏡で見ました。白地に業行格子に蘆の葉を納戸に染めた湯上りを着て狹帶をしめた私の姿は、常に似ず大變に意氣に見えました。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

私はも一度櫛を拔いて髮を掻いて見ました。私はまだ家に居た廿一か二の頃、この櫛の恰好に似たその頃出來たこのセルロイドの櫛をよくふだん銀杏返しに差して居た事をフト思ひ出しました。ト同時にその頃のある日私が、玄關へ取次に出て、御辭義をする拍子にその櫛がハタリと落ちた事を思ひだしました。その時見えた人は兄のお友達で、兄は相にく留守でございました。あくる日その人から兄の處へ來た手紙に「ゴムのさし櫛落ちてけり」と藤村の詩をもぢつた文句の書いてあつた事をも覺えてをります。――その人は今の武林夢想庵でした。私は再び鏡をのぞいてそして又髮に手を觸れて見ました。スルト私の指先は計らず小さなめらかな場處に當りました。私は急いでそこを分けて見ました。其處には二分ほどの丸さの禿があるのです。私は又その禿の出來た事をも思ひ出しました。――それは、私の十三四の時でした。朝床の中で何かの拍子に疳癪持の姉を怒らしたので、突然木枕で打たれた時の痕の跡なのです。然しその時の禿はもつと生際より深い處にあつた筈でした。私は、うろ覺えの場處を又分けて見ましたがありません。して見るとその禿がこんなに口元へ出て來たほど私の生際は拔け上つたのでせうか。それ丈私は年をとつたのでせうか。――

私は三たび、鏡の中を恐々覗き込んで見ました。

（完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二話。

寫眞（上）

まだ小學校へ行つて居た頃でしたから、

何でもわたくしが十二三だつたらうと思ひます。

ある日いつものやうに學校へ行つてますと、急に二三人の上級の人にとりかこまれて、その頃幼稚園の二階にあつた造花室へ連れ込まれました。造花はその時分の制度の高等四年でなくては敎はる事が出來なかつたのですから、わたくしにはその部屋の有様が大變珍しく見えました。少し暗い狹い部屋でしたが、隅々にはバラや緣に染めたカンレイシヤが四ツ手網のやうにシンシに張られて幾つも干してありました。部屋の眞中に置いた大きな机の上には、鐵緣の火鉢やみごゝ竹や、薔薇鋏や筋鏝や、打拔臺、カマ糸、染粉などが一所に一隅に片づけてありまして、背のない四角い上に籐を張つた椅子がその机の四邊に幾つか置いてありました。そして一方の窓の側に据えた粗末な大きな硝子戸の戸棚の中には、菊や、櫻や、菫、蒲公英などの造花が一ぱいに鉢だの葉だのに差して置いてあ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りました。

年の割に子供心の失せなかつたわたくしは、其處へ連れて行かれると、たゞもの珍らしくそれ等のものを眺めてをりました。すると、やがてコソ〳〵云つてた二三人の人はぐるりとわたくしをとり卷くやうにして種々な事を聞きはじめました。何もとりとまつた事ではなかつたので大方忘れてしまひましたが、その中にも兄の事を一番多く聞かれたやうに思ひます。

兄はわたくしと三ツ違ひで、その時高等四年で、大變な勉强家でした。そしてわたくしと違つて上品な坊ちやん肌の人でした。云ふのを忘れましたが、わたくしを造花室へ連れ込んだのは女生徒で兄と同じ級の人だと云ふ事丈はその時の心覺えにありますけれど、顔を覺えてるのはタッタ一人髮の薄いよく多辯る人で確かN何々と云ふ人でした。

わたくしは問はれる言葉に何にも滿足に返事は出來なかつたやうです。やがてその中の一人がわたくしに小さな縮緬細具の押繪の團扇を呉れまして、それでやう〳〵わたくしは離されました。その團扇の端に、その團扇に相當した字で何でも三字名の女の名が墨で書いてありました。

ずつと經つて――何でももう兄が高等學校へ行く頃――何かの事でわたくしが兄の机の曳引(ひきだし)を開けた事がありました。スルト何か奥に支へて開かないので手を突込んでその堅いものを出して見る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と、それは、二枚の寫眞の表と表とを合して綺麗な紐で十字に結んであるものでした。わたくしは無意識に四邊を見ました。けれども其處には只夏の午後の靜けさがある丈でした。わたくしはソッとその紐をときました。

（下）

その時、はわたくしももう十二の小娘ではありません。何となく其寫眞に美しい色のある事を直觸する程の神經は持つてをりました。紐を解くわたくしの手は少し震へてをりました。

見ると、一枚は兄の中學校の服を着た半身の寫眞で、一枚は見もしらぬそれは〳〵美しい、束髮にした上品な女の人の寫眞でした。わたくしは何と云ふ事なしにその寫眞の裏を返して見ました。其處に細く細く……と三字名が書いてあります。わたくしの記憶は突然小學校時代に歸りましたそして、直ぐその寫眞を二枚ともに懷中へ入れたまゝ、同じ部屋に同居してる自分の机の前へ行きまして、そしてその下に置いてある朱塗に扇流しの繪を描いたわたくしの一番好きな手箱を出して蓋をした儘、机の上へひつくり返しに置きました。そして箱の身の方をソッと取りました。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小切や、金糸や千代紙は、年たけた「妹」の時代の裏打を見るやうに其處に顯はれました。その一番底――の返したので上になつた――とき色の鹿の子絞を上げて見ると、直ぐにわたくしの覺えは間違はずにその時歸つて來て誰にも云はず直ぐ吉野紙に包んでしまつて置いた小さな小さな押繪の團扇は、紫の色も褪めずに出て參りました。

わたくしはその團扇に書いた名と、寫眞に書いた名とを比べて見ました。字も手跡も少しも違つて居ないのです。わたくしは急に胸が轟くやうに覺えました。そして直ぐに記憶に縋つてそれを呉れた人の顏を思ひ出さうとしましたが、さうしやうとするわたくしの目の前にはとか〳〵あの髮の薄いお多辯の人の顏ぢりが浮いて來て邪魔をするのです。わたくしはどうも、その席には此團扇の主は居なかつたやうに思ひます。

兄さんに云つちや不可ませんよ。

ぢやア誰もあたしの級の人は兄さん處へ行きやしませんね。

と誰ともなしに、その中の人々が云つた言葉丈がわたくしの耳に殘つてをります。

わたくしは寫眞を元のやうに合して元のやうに紐をかけて、そしてその十字になつた處に今出し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

た團扇の柄を差し込んで元の處――と云ふよりも、もつと深い、タレからも見つかりさうもない――處へ大切に納つてしまひました。

その兄は大學を出てから何年にもなります。そしてもう結婚もしました。外國へも行つて來ました。母も親類も、嫂もわたくしもわたくしの良夫もみんな喜びました。

その外國から歸つて東京の家へ落ちついた日、兄は日に燒けた顔に短かい口髯を生やした口元に何かなし笑をたゞへながら、わたくしの良夫と巴里とか露西亞とかの話をしい〳〵一寸と煙草を啣んで、煙草から出る煙に顔をしかめながら、手許にあつた手提の鞄の口を開くと、溢れたやうになつた書物の中からハタリと落ちたものがありました。第一に夫を拾つたのは、兄に引添つて座つて居た嫂でしたが、兄は直ぐそれを取りました、そしてわたくしの良夫に向つてかう云ひました。

あつちにゐる中退屈したら書かうと思つて、こんな材料まで持つて行つたのですけれど、どうして退屈する處か――

と云つて笑ひながら、その落ちたものをチラと良夫に見せました、それは一枚の女の寫眞でした嫂の眼は直ぐその寫眞を追ひましたが、口輕く云ふ先の體度に安心したやうにお茶でも入れに行つたのか座をたちました。タレの眼に這入らずともわたくしの眼にはどうしてそれが這入らない事が

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ありますものか、わたくしの胸には直ぐ造花室と押繪の團扇とが蜃氣樓でゞもあるやうにポッと浮びました。

その時、兄は、その寫眞を、おもちやでも投げるやうに、上の方から鞄の中へ落して、何氣ないさまに鞄の中へ手を突込みましたが、暫く搔き廻した揚句がやがて出したのは露西亞のバアで賣りつけられたと云ふオドケの繪はがきでした。

兄と良夫とは夫を透して見て「好く出來てる」とか何とか云つてをりました。

わたくしは何となく悲しくなりました。（つゞく）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

俳優の青い鳥

尾竹一枝

わがゆけば
白き露臺の冷(つめ)たき緑玉(エメラルド)の花
匂よき夕ぐれに忍ぶ
ほのかにも
きのふありし君の窓(まど)さしのぞけば
かなしやな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

俳優の青い鳥
さびしくもひとり
とんぼかへして
踊りけるかも

薄暮(たそがれ)の時

I

なんとしやう
かりそめにはらだちて
しみじみと憎げにものおもふ息づかひすれば
美くしく小さき寶石のやうな人妻は

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

かなしやな涙ながしそ。

II

夏のかはたれはなつかしきかな
なまめかしきひかりのかげに
やはらかによりそひ
　つかのまも君をみずには……
秋の虫のちろちろとなく
白き露臺の人妻の顔の
しみじみとした美くしさ。

III

おもえどもおもえども
別れは悲(かな)し
わが愛(め)づる君のまなざし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ほのかにもさみしく
美くしく小さなる脣(くちびる)
哀(かな)しくも顫ふ
しみじみと二人して泣けば
いつしかに暮れて
にほやかに鈴虫のなく。

七・一五・夕暮

紅(あか)し紅(あか)し

紅(あか)し紅(あか)し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

鳳仙花のかたまりて散りゐたり
あついあつい夏の日のひるざかり
なんとなしに寂しくやるせなげに
剃刀研人の過ぎてゆく
たとへやうもない傷ましい悩み

きりぎりすの
つつましやかに匍ひ廻る

かなしやな
剃刀研人の過ぎゆきにける。

七・一九・午後三時

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

眠れよ旅人

いざやかなしかりし日の涙をかなしか
なしとうたはんげにきみはかの眞白き
蓮の花に譬へらる。

眠れよ眠れよ
旅ゆく若人
やすけき眠りに
戀ふ人ぞ戀え
歎くとていまは遠き日ぞ
夕の鐘のいくつかゆく

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

眠れよ眠れ
旅ゆく若人
眠りて夢みよ
眞白(ましろ)き睡蓮(すゐれん)
美くしくさはいえかなしき
その遠き日のまなざし
静こころなく夕(ゆふべ)とどろく

眞白き睡蓮
そは君(きみ)のなぞ
戀ふてはたぐらん
君(きみ)なるその花(はな)
やはらかに歎(なげ)けば

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

しみじみと夕の迫る
いつしかに
ほのかほのかに暮れて
夜となりける

旅ゆく若人
安けく眠れ
眠りて夢みよ
戀ひしきその花
歎くとていまは遠き日ぞ
夕の鐘のいくつかゆく
わがおもふ人
いづくにありけん——

七・二〇・朝はやく

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

浮世

小林哥津

一

しさしく御ぶさたいたし居り候。
さてあたくし事、又々例のごたくさにて、この節は駒形の家にまゐりをり候。もう今度といふ今度は久松町へはかへらないつもりにて御座候。つもるお話も色々と候まゝ、是非〳〵こちらへお出での節はおたちより下され度候。かしこ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

十三日　　　　　　　　　　　　　　　ふさ

おしんさま

二

十五日はおまゐりにお出でになる日なのでおよりになるかと心待ちにまつてゐました。今朝お葉書をうけとりました。身體が惡いんですつてね。いけませんねお大事になさいまし。そつちからお出かけなさいつたつて、なんだか勝手のしれない山の手へ行つてまごまごするのはいやですもの、お見舞に行けばいゝんだけど、やつぱり、行きませんよ。それに今の場合あんまり出歩くのはよくあるまいつて姉さんも云ひますからね。

たけど逢いたくつて、逢いたくつてしようがありません。逢つて、聞き手のないあたしの愚痴を聞いてもらいたいの――ほんとうにあたしの愚痴もずいぶん久しいもんだけど。だけどおしんちやん勘忍して頂戴よ、愚痴を云ふつもりぢやあないけど、あたしの身のまわりに出來てくることは何一ついゝことはないんだもの、――たゞの話も愚痴になりまさあねえ。

心配してゐて呉れるなんて、やさしい事を書いてよこしたあんたの葉書を見たら、もう今度は云ひ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ますまいと思つてゐた泣きごとがまた云ひたくなつちまつたので、逢へないあんたに、せめて手紙でも書かうと思つて、かきはじめたんですよ。あたしの字は讀みにくいつてよくおしんちやんは云ふわね。察して讀んで下さいよ。

おしんちやんの葉書にも、大低い、こんだのことは察してわかつてゐるとかいてあつたわね。今度はことのをこりは仕事からなんですよ、あたしには袷羽織の衿先きの折がいくらおそはつても腑に落ちない、やつと出來たと思ふと、お母さんはきたないつて云ふし、ほんとうに出來ないといふものはじれつたいもんだわね。その羽織は五日のよかゝつてまだ衿先きの折のところよりすゝまなかつたんですよ。いくらなほしても、なほしても、お母さんの氣には入らない、と今度は折角一度おぼえた折り方がめちやくちやになつちまふし、あたしはもうじぶんの腑甲斐なさに、口惜しくなつて了つて思はず仕立物の上に涙をこぼしたのが、それがお母さんには、妙にひねくれてとれて了つたんですね。

ねえおしんちやん、じぶんの思つてゐることをとりちがへて小言を云はれるくらい口惜しいことはないわね、——さんざばらお小言を云はれて末は、又例の元の身のことを云ふんぢやありまやんか。惡いのは何でもあたし一人で、孝三郎はあたしにつられて、あたしにだまされて、ゐたんだとか、あたしがあつたばつかりに、もつと孝行にしてくれる筈のわきの女も孝三郎の氣に入らなかつたんだと

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

か云ふんぢやありませんか、

あたしはね、もうこれなり死んで了ふんぢやないかと思ふ程、かなしうござんした。今更おさらいをされる迄もなく、あたしは水商賣をしたもんだわ、それから孝三郎はお客だつたんだわ。そういふ身分のものが、立派な大店の御新造になつたのは身分をしらないさただとか、よく世間で云ふ玉の輿にのつかつたんだとか云ふことは、云はれなくたつて、わかつてゐるわ。だけどねえおしんちやん、あたしがあゝなる時だつて、他人のやうに、けつして浮いた氣や、浮氣づくでなつたんぢやありやしないわね。この廣い世間の中で、あたしとあの人と結びついたのも、よくよくの因縁がなければこそさ、あたしは思ふわ。あたしはそれを往來ですれちがつた人と人とやうな氣で、わかれちまふなんてことは出來ないと思ふわ。だからみすみす、あんな堅い家へ入るのは辛い、かなしいことだとはわかつてゐた、——まあ云はゞかくごしてかゝつたことなんだわ、それを辛棒して、これからの世間を地道に暮したいと思つたのも、みんな、あの人への操なんぢやありませんか。やゝともすればお金を出してわかれてくれろなんていふお母さんの心持を、あたしは、なんて情けない心持だらうと思ふわ。

ほら何かの本に書いてあつたぢやありませんか、——年とつた人は、じぶんだちだつて若い時のあつたことを忘れちまつて、じぶんの若いうち辛いと思つたことを、平氣で何是云へるんだらうといふ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

やうなことがありましたわね、あたしやどうしてから若い者の氣がお母さんにやあわからないのかと、つくづく情けなくなりましたよ。

その日お母さんは腹立ちまぎれで、お正午を食べるとすぐ親類へといつて出かけて了ふし、孝三郎は用達で朝から留守でしたし、あたし一人で、店の者にも、奥の女達にもまあどんなにきまりの悪い思ひをしましたかつて。

それでもその時には未だ駒形へかへらうなんて氣は出てゐやしなかつたんですの。それから、夕方になつて、明りがつくやうになつて、お母さんも歸へつてくるし、孝三郎もかへつて來て、みんなで御飯のときに、お母さんはあたしには知らない名の女のことをしきりに話し出したんですよ。――それが後になつて見ると、孝三郎のところへ來ることになつてゐた女なんでした。孝三郎は無言つたまゝ、何を云はれても返事をしないので、お母さんの嬉嫌が又、少しいけなくなつて來たんです。そして揚句の果には、私は實の息子にこんなあたじけないのを持つかと思ふと、ほんとうに苦勞なこつたね。一日も早くまあお迎ひが來ればいゝけど、けれどもまた、私のゐなくなつた後はこの家はどんなになつて了ふことやらつてから云ふんぢやありませんか。

それから騷の輪が大きくなつて了つたんですよ。そして、こんな家にゐたつて面白くもないから私

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はどこへでも行つてとまりますといふお母さんをなだめて二階へ寢かしたはもう十二時をよつぼどすぎてゐたじぶんでした。
大風のあとのやうに騷のあとが靜かになるとあたしは何だかもう、こうしちやゐられないやうな氣がいたして來たの。
なんだかもうかうしちやゐられない、まあこの家のこんな淺ましい騷ぎだつて、ことのをこりはみんなあたしからなんだと思ふと、ゐたゝまらなくなつて來て、前後の考へもなくあたしはいつか裏木戸から外へ出て了つたの。――あたりはもう恐しい程靜でしたよ、あたしはたゞもう一散に久松町の電車通りを矢の倉の方へかけ出して行きました。たゞもう、川の見えるところへ、川の見えるところと思つて馳けてゐたんですね。もう少しで濱町の河岸へ入るといふまがり角で、ふいにあたしの肩をつかんだ人があつたんですの、それが孝三郎なんでした。あたしはもうびつくりして、そこへ立ちどまつちまつたの。
をい、こんな夜中に馳けまわつて、どうしようてんだい。――そう孝三郎に云はれて、あたしは、今迄、死ぬつもりでこゝまで家をぬけ出して來たんだと、はじめて氣がついたやうな氣がしたんですよ。孝三郎が知らないですんで了つたらあたしは今頃死んでゐるとこうなんですねえ。――

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

死んでどうなるもんかい、――今迄苦勞したのはみんななんにもならないぢやないか。孝三郎はそう云つて、あたしの肩をはなさづに、づん〳〵歩き出すんでせう。あたしはたゞもうどうしていゝかわからないやうな風で、無言つて、やつぱり歩いて行つたんですの。あたし達が、代地の橋までくると、牛乳屋が通りました。そこで始めてあたしは駒形へつれて行かれるのだと、わかりました。

　その日からもう今日で、姉さんのとこの二階住ひも、六日ばかりになります。孝三郎は一度その出先まで葉書をよこしたきり、一遍も來ません。――まつたくじぶんで、じぶんのゆくさきがわからないなんて、おかしなことですけどあたしや今のところ、これからの先きのことなんかどういふ風になつて行くんだか、見當もついてゐないんですよ。

　あたしは書くのが下手だから、おしんちやんにはわかつたゞらうかと、今になつて思ひますだけど、よろしく、御推讀をねがいます。お大事になさい。さよなら。

十六日　　　ふさ

しんさま

三

花がさいたとか申し候。毎日、陽氣なお天氣がつゞき、土手は大した人出の由に御座候。あたくしよりも、しばらく御ぶさたいたし候へどもお前さまもずいぶんの御ぶさたにて候。御身體はいかゞにて候や、たぶんお出でなきところを見ればお惡いのかと、ちよつと案じられ候。あしたは一日なれば、およろしくばお出かけなされ度候。そのごあたくしの方は相變らず、このまゝ別れて了ふのか、または、久松町へかへされるのかわかり申さず、なんだかあてのないことをあてにしてゐるやうな妙な氣がいたし候。　孝三郎は片だよりにて、無事のことは存じをり候へども、それでどんな日を暮しをることにや、一切それもわからぬことにて御座候。久松町を出て、大凡、半月のよにもはや相なり申候、あきらめのよきお前さまならばもうとつくの昔に、きれいにあきらめて、了ふことゝ存じ候、この頃は何だか、もうたよりに思ふ孝三郎も意久地のないあたくしをつきはなして了つたやうに思はれ、なにとなくかなしく候。

それはそうといつも勝手なこつちの愚痴ばかり毎々おきかせ申候、お前樣の方のことを伺ふのを忘れてをり候。それではいかゞお暮しにて候や。多分、あたくしとはちがつて、お前さまがしつかりはしてお出でなれば御案じなさるほどにはないと存じ候へども、少し案じられ申候。

羊の六白は不幸の生れの由、ちいさい時分、占ひ者にきいて、お前さまが泣いたことがあり候。まつ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たくお前さまにしても、あたくしにしても、お金ちやんにしても、不幸までゝはなくとも幸(しやわせ)とはあんまり行かないやうにて候。

お金ちやんと云へば、この間、階下(した)へ來るさる人がこの頃は、あの お人は公園のお茶屋さんのした て物をうけ合つてをり候よし申居り候、足はやはり不自由との事にて候、まづは右までまゐらせ候

三十日　　　　ふさ

しんさま

四

お手紙拜見いたし候。――この節ではあんまり不幸(ふしやわせ)でもないんですよとの書き出しには少しびつくりいたし候。こちらから愚痴(ぐち)の百萬だらを申上ても、お前さまの愚痴をきいたことはいつもなく候へども、お幸になつたときくらいは、一寸おしらせ下さつても罰はあたるまじくと存じ候。それでは、とうとう、厭をお通しなすつたと見えるねと、姉は申候。この頃はお身がるで、おうらやましきことゝ思ひ候。明後日はお出で下さるとこのことうれしく存じ候。――

さき程御存じのくみちやんが一寸うちより申し候あしたはお花見のよし、大變きれいに髮を結ひ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

めつきり美しくなり申候。この間——と云つても、もう一月程前お前さまを仲見世にてお見かけしたとのことにて候。お連れがあつたとの事にて、誰れにて候やまさかお別れになつたあの人と、御一緒ではあるまいと存じ候。この頃おくみも、めだつて大人じみてまゐり候。さよならと格子を出てゆく後すがたを見て、あの子も苦勞になく時が、もうぢきくると、ふつと思ふと可愛想にあいなり候。姉は、あの通りのお人よしにて候へば、どうかして、あんまり苦勞のないうちに、堅氣にさせたい、させたいと申をり候。——考へて見ると、あんまりあの時分には苦勞をしなかつたあたくしも、かへつて堅氣になつてからこんな辛い目に逢つたのを考へると人間ゆくすゑのことほどわからないものはござなく候。おたづねの孝三郎は今もつて、まゐらず、この節はたよりもなく候。いよ〱どうなることかたゞたゞ、はかなく、世の中が思はれ申候。かしこ

二日　　ふさ

しんさま

五

この間はお出て下さつても失禮ばかりでしたね。若やいだ陽氣なおしんちやんの顔を見てゐると、

あたしまで氣が晴れ晴れしましたよ。ほんとうにちよいちよいお出でなさいよね。けふは少し安心をさせたいと思つて、この手紙を書きはじめたんですの。實は夕べ、孝三郎が來たんですよ。

昨日はね、姉さんが深川の仲間のおさらひで、おひるから稽古の娘たちと出かけて了つて、さみしい留守をしてあたし一人ゐたんですの。四時をうつたから、そろそろ掃除をはじめて、格子の前をはいてゐたんですよ。とね、ほら角の煙草屋ねあすこを、ついとまがつた人がどうもよくにてゐると思ふと、あたしの前へ來てたちどまつたぢやありませんか、――それが孝三郎だつたのさ。あたしの見たことのない羽織をきて、ぢつと立てゐて、何とも云はないでせう。あたしや又そうでもないよく似た人なのかと思つたくらゐでしたよ。

その晩はおそくまで遊んで行きました。あたしと別れてゐる間どんな風にしてゐたんだか聞きたかつたけど、あの人はそんなことは、みじんも云ひ出さなかつたんですよ。そしてね、たゞ、無暗に、店の用が急がしかつたとばかりでね。――何だか、あたしもわからなくなつちまつたんですの。もう孝三郎が來るやうなことはないんぢやないかと思つてゐて久しくなるのに、ふいに來て、何ともあの時の話なんかせずに、かへつて了つたんですものね。あの人はあの時のことなんかどう思つてゐるんで

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

せうね。あたしには見當がつかないわ。

それに無論これからのことをどうしようつてなんて、ことも云ひませんでした。たゞまた、あさつてくるつてかへつて行つちまいましたの。——ほんとうにどうなるんだか。

ねえおしんちやん、ゆうべはいゝお月様だつたわね。二階の小窓をあけて見てゐると、ふいに孝三郎が古いことを云ひ出してね、ほら、八幡様のかへりに、あたしと、孝三郎と、明りもつけない、いゝお月様の光りのさすおしんちやんとこの二階で、冗談を云ひ合つて、遊んだことがあつたわね。あの時のことを云ひ出してさ、——おしんちやんは今でも元氣がいゝかいつて、そう云ふの。

まだ〳〵あの時分には、あたしもおしんちやんも、どれが苦勞つてほどの苦勞もなかつたわね。——あの時の晩のことを覺へてゐて。——まるで灯入りの遠見のやうに、窓から見下ろす町がきれいだつたわね。ゆうべもそうでしたね。

あしたは來ますから、おしんちやんも晩方から入らつしやいよ。

十日　　　　ふさより

しんちやんまゐる

六

ずいぶん御ぶさたをしちまいました。この間はおより下さつたんですつてね、合憎留守でごめんなさい。又きのふはゞがきをありがとうござんした。姉さんにすつかりきいたでせうね、この間も、きのふも、家さがしにぶら〳〵出たんですけど、どうもいゝのがなくつてね弱つてゐるの。きのふは竹屋を渡つて寺島の方から小梅の方へ行つて見たんだけど、いゝのがやつぱりないんですの。

いゝ家だと思ふと人が住つてたり、空家であるのはみんな感心しないし、やつぱり向島はあきらめらしいのよ。孝三郎がばかに向島向島つて云ふんですけど、あたしはあんまり住むつて氣もないわね。もう早やいもんで櫻はもうみんな葉になつて了いましたね。――これから青い木につゝまれた寺島も惡かない、と思ふけど、すまふにはやつぱり人情本でよむやうにいかないわね。蚊も出るし、それに、ふだん一人でゐることを考へるとぞつとしないんですよ。だけど、佗住居なんてにはもつてこいのところさね、かう小さい庭のある、青すだれをかけた、小體な家を見ると、牡丹燈籠を思ひ出すわね。――それでまあ向島も思はしくないから、あしたは、根岸の方へ行かうと思ふの。あつちは方角もいゝし、それに、靜かだし、ちよいと、久松町からははなれてゐて、工合もいゝですよ。

孝三郎は今こゝにゐるんですよ。この五六日、こつちへ來てゐます。遊びに入らつしやいよ。ね、な

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

んなら家をさがしに一緒に來てくれるさいゝんだけど。——

二十三日　　　　ふさ

おしんちやんまゐる

七

きのふ雨がしとしとふるのにひつこしをいたし候。さゝの雪の近所にて御座候。まへに溝を控へし格子づくりの二階家にて候。夜になると、駒形とはちがひ、流しがまゐり候お前さまのおすきらしいところにて候。

——あれは兩國の花火の晩だつたかと存じ候、あたくしと、お前さまと、お前さまのところの涼臺で花火を見ながら、お前さまはおめかけがすきだと、申され候ことがあり候。その時あたくしは、少しはびんぼうでも、おかみさんがいゝと申し候。——この節あの時のことをかんがへ出し、何からおかしく思ばれ申候、思へば人の身のゆくすゑほどわからないものはないとつくづく思ひ候。孝二郎は、三日をきくらひにこちらにまゐり候あとは、小女と二人きりにて淋しく候、とまりがけで、お出で下され度候。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

あたくしもこの間まで、おかみさんになるつもりでゐたのに候へども、やつぱりこうなるのが因縁とやら申すことにて候。まさかお前さまは、好きだつたおめかげになることもあるまじく、と何だかおかしくなり申候。今となつては、お亭主があつても、ないやうなみじめなおかみさんなら、ふつふついやに候。姑にいびられるやうなのも厭にて候、そこらの味がわかつてきたのが、小供から大人になつた相違かと思ひ候。まづは右おしらせまで、かしこ

三十日　　　　ふさ

おしんさま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ブエルデイの歌劇（上）

原　信　子

ブエルデイ (Giusppe, Verdi 1813-1901.)

オベルト　コンテ　デイサン　ボニフアチオ…………一八三九年

(Oberto Conte di san Bonifacio.)

此歌劇はブエルデイの處女作であつて形式上古いものであるが强みのある高尙な作であつてブエルデイから後年の作風は既に此作の中に其幼芽を出して居る。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

ウン　ジオルノ　デイ　レーニオ……………一八四〇年
(Un Giorno di Regno.)
イル　フイント　スタニスラオ………… …………一八四〇年
(Il Finto Stanislao.)
此の二作は喜歌劇にして失敗の作である
ナブユドノゾール
(Nabucodonosor.)
イ　ロンバルデイ……………………………一八四二年
(I lombardi.)
右の二作は共に相當の名聲を博した今尙歐米に上場さる。
エルナーニ……………………… ………一八四四年
(Ernani.)
エルナーニはブエルデイの初期の代表作である然し其技巧の點に於ては未熟なものであつた
作風は一體に荒く粗野に流れる傾きがあるが其れは當時の聽衆の要求が男性的で荒々しいの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を好んだからであらう其上當時の伊太利の狀態は人民すべてが如何かしてオーストリアの支配から放して獨立せしめやうとする革命の氣分に滿ちて居たので從つてブエルディの作にも其氣の影響を及ぼしたのであらう次に其梗概を書く。

初演の時はイル　プロスクリツト（Il Proscritto）と云ふ外題で上場された筋書はヴイクターユーズーのエルナーニを取つたものである。

人物

ドン　カルロス（Don Carlor.）スペーイン………バリトン

ドン　ルーイゴメッツ（Don Ruy Gomez.）貴　族………バス

エルブイーラ（Elvira.）貴族の姪………ソプラノ

ヨハンナ（Johanna.）其の乳母………メッツオソプラノ

エルナーニ（Ernani.）山賊………テノール

ドンリツカルド（Don Riccordo.）王の太刀持………テノール

イアーゴ（Iago.）貴族の太刀持………バス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

場所
アラゴン地方

時代
一五一九年

第一幕

アラゴンの山中、山賊共は此日にかぎつてエルナーニが沈んで居るのをどうしたのだらうと思つて尋ねた合唱『お前の爲めに祝杯をあげて居るのではないか、なぜお前はさう沈んで居るのだ强いお前の額にお前の心配が現れて居るではないか』エルナーニ『有難う友達よ、花が日光にあたつたやうに』エルナーニはエルブイーラを戀して居つたけれどエルブイーラはゴメッツと必ならずも結婚させられるやうになつた、彼は山賊共にどうかエルブイーラを誘拐して下れないかと賴む。

エルブイーラの居間、エルブイーラ『もう日は沈んだ、シルブア(ゴメッツ)は歸つて來ないエルナーニ、エルナーニ、私を救つて下さい』ルブアの結婚の送物が來るエルブイラは受けなけ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ればならないのである、此時カルロス王が美装して入つて來てエルブイーラにお前を戀して居ると云つた、コルブイラは其事を拒絕されたので力づくで同意させやうとした其時突然エルナーニが入つて來てエルブイーラを助ける、三部合唱『友達がそなたを救ひに來た』王はエルナーニ其山賊の頭目だと見破るエルナーニが王と決鬪をする其時シルブアが入つて來た、シルブア『恐ろしき光景よ、不幸な者よお前はよく考へたのか』エルナーニは兩人に戰ひをすゝめエルブイーラは用意しろと私語く。

第二幕

シルブアの邸宅の大廣間、エルナーニは巡禮に扮して來る、三部、合唱『エルブイーラ、エルナーニ、シルブア』『巡禮が來た』が歌はれる彼は僞つてエルナーニは追はれそしてシルブアに許されると云ふ安全を求めて居ると云つた、エルブイーラはエルナーニは死んだものと思ひそして自身は結婚の式場に於て自殺しやうと決心した、二部、合唱『エルブイーラ、エルナーニ』『あゝ僞る者よ、そなたは噓言つき』エルナーニは假裝を取つた、三部、合唱『恥知らずものの、汝等はそれを悲しむだらう』が歌はれる、シルブアはエルナーニを救ふと約束

した然し己が個人的復讐はたゞ延ばす事にした、カルロス王がは入つて來て何せ城内を鎖して置いたのかと聞いたシルブアは王にエルナーニを渡すことを拒むだ。カルロスの部下はエルナーニを探したが見出すことは出來なかつた、シルブアは王がエルブイーラを人質として監禁するやうにしても約束は違へなかつた彼は王が去つた後エルナーニは叫び出してエルブイーラの爲めに決闘を挑むだがエルナーニは彼の恩人と戰ふのを拒みシルブアと共にエルブイーラを救ふ相談したそして何時でもシルブアが呼べば行かうと誓た。

第三幕

アイクス寺院に於けるチャールルス大王の靈廟、此日カルロスは此の廟に參拜に來たそして共謀者どもの會話をふと洩れ聞いた、シルブアもエルナーニも此の群の中に居たのである、エルナーニは王を殺害しやうと決心する、共謀は王の出現によつて破壞された、王は貴族達を死罪に行ふと宣告した、エルナーニは前へ進みでゝ自分も殺される可き筈であると云つたそして彼は追放されてアラゴンのドンフアンと云はれて居るものだと自白した、エルブオラは只彼の戀人の爲めに慈悲を乞ふばかりである、カルロスの心情は變つて、エルナーニとエル

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ブラとを許し二人の結婚を承知した。

第四幕

エルナーニの城中、エルナーニ、エルブイーラ二人の結婚の式が今や終るか終らぬに突然ラッパの響が聞えた、それはシルブアの一行の到着のしらせであつたのだ、そこへシルブアは現れてエルナーニに默して短劍を渡した、エルナーニは誓を守りて我胸深く刺した三部合唱「總て止むおゝ音樂よ光りをはなせ」

イ　デイユエ　フオスカーリー……………………一八四四年

(I Due Foscari.)

此歌劇は前のエルナーニに比して美しい場面はあるが力の點に於て大いに劣つて居る、不成功の作である。

ジオバンナ・ダルコ……………………一八四五年

(Giovanna d'Arco.)

アルツイーラ……………………一八四五年

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(Alzira.)

アッテイーラ……………………………………一八四六年

(Attila.)

之等三曲は世人の話題にも上らぬものである。

マクベス……………………………………一八四七年

此の作はあまり成功の作ではないが有名な作である（此のマクベスに就いては昨年のとりでに書いた事があるから此れだけにして置く）

イ　マスナディエーーリー……………………………………一八四七年

(I Masnadieri.)

マクベス以後ブエルディは數篇に歌劇を作曲したけれどいづれも拙作であつた爲めに殆ど世人に忘れられてしまつた。此歌劇は其中の一篇であつて英國皇后の建設せられた劇場の爲め

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に作つたものである、當時の名優ジエンニーリンドが其王役を歌つたが全然失敗に歸した、批評家コルレーの如きは嘗て英國に於て上場された歌劇中で尤も劣作であるとさへ云つて居る。

イル　コルサーロ……………………一八四八年
(Il Corsaro.)

ラバツタリアデイレニアーノ……………一八四九年
(La Battaglia.)

ルイザシルレル……………………一八四九年
(Legnano.)

ステイツフエリオ……………………一八五〇年
(Stiffelio.)

四篇共に失敗の作であつたが之れから後が即ちブエルデイの光明時代であつて彼が天才は此時代から强い光を放ち始めたのである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

盲樂師（コロレエンコ）（承前）

青山菊榮譯

七

それからといふものペトリックは夜毎に厩で時を過した。がその夜の來ないうちにトキムに笛を吹いて貰ひたいとは尠しも思はなかつた。眞の樂みを味はふには晝間は派手に過ぎ騷がし過ぎるし、トキムはトキムで馬の世話をしなければならなかつた。が、日中の熱さも負擔も終つて、赤い日が黑い松林のうしろに沈んでしまふと、ペトリックはもう矢も楯も堪らなくなつた、而して彼にとつては

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夕餉の鈴は待ち焦れてゐた時の迫つた事を告げる外何の用もないのであつた。

　ところが斯うした成行きはポペルスキー夫人には餘り有難くなかつた、がさうかと云つて夫人は愛兒が就寢前の一二時間をトキムと過ごすのを妨げる氣にもならずに居た。ペトリツクにとつては其の一二時間こそこの世に又とない樂しい時なのであつた。母親は次第に嫉妬を强め乍らこの新に湧いた音樂熱が終日我子の心を領じて居るのを見て居た。母親の膝に倚つてゐる時でさへ、ペトリツクのおもひはひたすらトキムと其の笛とへ奔せてゐて、母親の愛撫に對してももとの樣に熱心に報いなくなつたのは明白であつた。かういふ事を思ひめぐらしてゐるうち、アンナ・ミカイロフナは其娘時代に、貴族の令孃を養成するラデツキー夫人の學校で習つた課目の中に音樂もあつた事を思ひ出した。しかしこれは餘りよい氣持を起させなかつた、といふのは教師のクラツプス孃――瘦せた氣むづかしい味も卒氣もない獨逸人の老孃が――聯想されるからで。其の人の癖は生徒の指をしなやかにするためだと云つては「控いて」しまふのであつた。その結果却て情味に富む音を出せなくして、愉快である筈のものを辛いいやなものにしてしまつたのであつた。

　さういふ譯でアンナ・ミカイロフナは學校を出てから一度もピアノに手を觸れたことは無かつた。併し今、妬ましげに思ひ沈み乍らトキムの奏樂に耳を貸してゐるうち、クラツプス孃の指をギク

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

〳〵させる癖にもさすがに消され果てずにゐた彼の潑溂たる妙音に對する情が心に目覺めて來た。
翌日ポペルスキー夫人はピアノを買つてくれと夫に賴んだ。
「あゝ好いとも」とこの君子は答へた。「だが――お前は音樂は好かない樣に思つて居たがね」
「今迄はさうでしたけれど、でも私は考へましたの、もし私にピアノがありましたら――」
「そりあ時々は彈きもするだらうさ、お前の彈奏を聽くのは至極結構だ。今日すぐ注文しやう、きつと上等なのを買つて上げるよ」
それで注文はすぐ發せられた。が道が遠いせいか、又はポペルスキー氏の發した樣な嚴しい注文にあてはまるのが無かつたせいか、ピアノは數週間邸にとゞかなかつた。
其の間笛の吹奏はつゞいてゐた。ペトリックは夜每に厩に出掛けた、時には母の許しを乞はずに行くことさへあつた。彼は大抵熱心に聽き入つてゐて決して邪魔をせずに、恍惚として座つて居た。併し、或晩トキムが一寸罷めてゐる間に、子供の無言の讃美は何と云ひ樣もない憧憬に負けて彼は笛の方へ手を延ばした。トキムはそれを彼に渡した。彼は受取るとすぐ熱心に唇につけた。が、餘り夢中になつたので息がはづんで最初の試みは失敗した。併し少しおちつくと彼はずん〳〵覺えた。トキムは弟子の指を穴にあてた。一オクターヴだけひろげるには手が小さすぎたが、それでも子供はすぐ調子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を皆知つてしまつた。彼の活き〳〵とした想像は各音に明白な個性を附した。響を立てる小さな魔者が穴毎に居て、彼はその聲を知つてゐるのである。トキムが緩やかな調子を吹く時にはその指の動くがまゝに子供の指も動いた。彼は穴の位置に依て音をすつかり覺え込んだ。

一月も待たれた擧句にやつとピアノが着いた。ペトリックはそれを聞くと庭に出掛けた、而してどんなものかと想像し乍ら、荷を解いて「音樂」を家の中へ運び込むのを聽いて居た。それを動かす時に車がギー〳〵鳴つて、人は息を切らして苦しさうに呻めいたので見ると確に餘程重いものらしい。それを地面へおろすと人はホッと息をついた。それからまたそれを持ち上げて皆はドタリドタリと調子を揃へて歩いた。すると何やら中のものがさう手荒に扱はれるのに抗ふ樣に、顫へて呻いてつぶやいた。この奇妙な樂器が客間の床におろされると、また來たてのくせに腹を立てゝ皆を脅やかす樣に鋭い嚙みつける樣な叫びを立てた。

かういふやうな事が凡てペトリックに好い氣持を與へなかつた。彼は此樂器を恐がつて嫌つた。さうして町から隨いて來た調音師がピアノの音を調へてゐる間、庭へ出たきりはいつて來なかつた。

愈々これで好いとなるとすぐアンナ・ミカイロフナは息子を呼びにやつた。ウインナ出來にちがひ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ないこんな美事な樂器があれば、馬丁だの馬丁の笛などは譯もなく負かして見せると夫人は思ひ込んでゐた。而してこれからは馬丁は寂しい厩の中に只一人で笛を吹いて、愛兒は以前のとほり毎晩自分と一所にゐる樣になるものと許り考へてゐた。

ピアノはペトリックを母に歸服させる不思議な磁石なのである。

ポペルスキー夫人は眼に笑みを含んでいとしげにペトリックを見遣つて、次に意味あり氣にマキシムを見た、「見ていらつしやい」とでもいふ樣に。

最後に夫人は「異國の音樂」を伺ひたいと許しを乞ふて、謹んで戶口に立つてゐたトキムを憐れむ樣なわざと卑下する樣な眼付でちらと見た。

それから夫人はまだ指が固くならないのを見せるために一寸曲彈きをして見て愈々始めた。

それはラデツキー夫人の學校で完全に習ひ込んだ曲で、特に華やかなのではないが、彈き手の熟練が入るのでむづかしい曲であつた。アンナ・ミカイロフナは公開試驗の時にこの曲を巧く彈いて非常な喝采を博したし、クラツプス孃は弟子の立派な出來榮えを散々賀ばれたものであつた。この曲の演奏で夫人は無口のポペルスキー氏の心を獲たのだとまで云はれて居た。而して今、夫人はトキムの笛に盜まれたやうな氣のする我子の心をとり返さうとこの曲を奏するのである。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

併し今度は勝利の代りに敗北しか得られなかつた。ウィンナから來た大ピアノは小露西亞の笛に叶はなかつた、而してペトリツタにとつてはこの貴婦人のピアノ彈きは卑しい笛吹きの相手ではなかつたのである。

成程夫人の華奢な指はトキムのごつ〳〵した指よりは器用に迅く動いた。彈いた曲はトキムのよりも音色が豐富で複雜であつたし、拍子もちやんと合つて居た。が、馬丁の方は出來の音樂的天才であつた。

彼は戀をした、而して苦しんだ。而してその靈に籠る詩趣を凡て笛の中に吹き込むのである。彼はその素朴な節を森の葉摺れや、廣野の草のしめやかなさゝめきや、その搖籃の上で歌はれた哀しい小露西亞の鄙歌(ひなうた)から學んだのである。

アンナ・ミカイロフナが彈き始めるとすぐ――夫人自身では非常にうまいつもりで居た――マキシムは敷物を杖で急にたゝいて何か起つたのを知らせた。夫人はふりむいた。すると始めて散歩に連れて出られた早春の日、草の上に昏倒した時に似た懊惱のさまがペトリツクの蒼白の顏に表はれてゐるのに氣がついた。

トキムは盲目の子を氣の毒さうに眺めた。それから「異國の音樂」をさげすんだ樣な眼つきでぢろり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と見てから部屋を出て行つた。次の瞬間にはその大きな靴がドタリ〳〵と床に鳴つて廣間中に響き渡つた。

愍れな母親はこの失敗のために非常に氣を傷めて涙まで流した。尤も始めは大變腹を立てた、立派な貴婦人の自分が――同じ上流の立派な聽衆からほめられた程なのに――不面目にも馬丁風情に負かされたといふ事は、思ふにも忍びないのである。腹立ちまぎれに夫人はトキムを粗野で下素で無感覺の鉄でなしだと罵つた。

それでも我子が自分を捨てゝ氣の合ふ馬丁の方へ行つてしまふと、笛などはほんの土百姓の埒もない慰みだと思ひ込まうとし乍ら、夫人は窓の所に座つてぢつと聽き入つて居た。が、暫くすると笛の音に吹き手のことは忘れ果てゝ我識らず其霊妙な旋律を讃美せずにゐられなくなつた程この埒もない慰みに心を吸ひ込まれてしまつた。到底敵し難い魅力を帶びてゐるこの即興の曲の妙趣は一體どこにあるのであらうかとやがて夫人は心に訊ねた。

つく〴〵考へて見てその答へが見付つた。夕方の蒼空や、もの凄い夜の物影や木の間を渡る風の吐息のうちにその答は見出された。トキムの笛の音の魅力はその素朴さと、周圍の自然との融和に潜んでゐるのであつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「さうだ、さうだ」と夫人は始めて事實を明らかに認めて考へた。「トキムの笛にはどこか特別の所がある。あれには純な詩的な感情があるし、自然に對する同情も有る。それが人の心を動かす微妙な音樂になつて出て來るのだ。あれは秘訣を握つてゐる。所が私は——私には音樂の天才も無し純な詩的の感情もない」

アンナ・ミカイロフナは泣き出した。夫人は自分にトキムの革樂的天才は無いまでも同じ樣に深い眞摯な感情はあるといふ事を夫人は忘れてゐるのであつた。馬丁が自然を熱愛したとすれば、夫人は更に强い更に神聖な愛——母の愛——を同じ樣に微妙な音樂で醉はし得ぬ許りに自分を捨てた盲目の子に注いで居るのであつた。

事實夫人は我子の目の盲いてゐる事に氣を痛めて不憫がる餘り、又子供の愛を欲する餘りに、身體をわるくする程で子供の苦痛はどんな些細な事でも病的に氣にするし、その將來についての心配は言語に絕してゐるのであつた。大抵の婦人なら一寸氣にするぐらゐで濟んでしまひさうなこの百姓の音樂家との妙な競爭は、夫人には燃える樣な悲しみのもとであつた。

暫くの間夫人に何の慰安をも與へなかつた「時」は遂にその心を新な方向にむけさせた。夫人はトキムの笛に籠る彼の詩趣と旋律の感じに似たものが、我身の中に活きてゐる樣な心持がして來た。そ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

こで夫人の希望はよみがへつて來た。而してもと〳〵勝れてゐる勇氣を鼓舞されて、ピアノの遙かに豐富な音色でトキムの笛の地味な音を壓倒する氣で幾度かそこの所へ行つた。が、いつも氣をくれがして思ひ切つて實行するまでにゆかなかつた。夫人はペトリックの苦しげな顏と馬丁の蔑すんだ樣な目つきとが忘れられなかつたので、その手は熱心に、併しおづ〳〵と鍵盤の上を奔るのであつた。

が日一日と自信が出て來た。ペトリックが散歩に出た跡で廣場で遊んでゐる時には、夫人は想心に練習した。併し始めのうちは一向思ふ樣に行かなくて、指は更に感情に反應しないのであつた。しかし次第に夫人は此の困難に打勝つて、やがて早や十分に、自由に情緒を表現する事が出來る樣な氣がして來た。

トキムの敎へと親心とがどうしたら我子の心をとり返へせるかといふ事を夫人に敎へたのであつた。

程なく夫人は大びらに仕合をして大丈夫だと感じた。そこで或晩不思議な競爭が始まつた、つまり堂々たる貴婦人と音樂に秀でた馬丁とが對陣して戰ひを始めたのである。低い藁屋根の下の暗い馬小屋から銀の樣な柔かい笛のふるへた音が漂つて來ると、樅の木の間に輝いてゐる客間の開け放した窓からは大ピアノの豐富な濃厚な音がどつと溢れ出した。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

始めはペトリックもトキムもこの挑みかゝる樣な相手の音樂にまるで氣をとめずにゐた。が少し經つと小供は腹を立てゝいら／＼し始めて例の樣子をその顏に現はした。

不意にトキムは吹き罷んだ。

「お吹き！　何故吹かないの」と子供は叫んだ。

「聽いてらつしやい、」とトキムはそつと云つた。ペトリックは耳を傾けた。

次の晩も、又次の晩も競爭が始まつた。時々馬丁は笛を措いて益々强い歡喜を感じ乍ら聽いて居た。その間ペトリックも耳を澄ましてトキムに吹けといふのも忘れる位氣をとられてゐた。三晩目にトキムは笛を措いて思ひ沈み乍ら云つた。

「佳いなア！　誰があんなものを思ひついたかなあ！」

聽き惚れてゐる人の樣に夢中で彼はペトリックの手をとつた。而して二人はこつそりと庭を通つて客間の窓に近い椈の樹陰に立つた。

トキムは「奥樣」は只自分の慰みに許り彈いてゐるので自分達のゐる事は知らない事と思つて居た。併しアンナ・ミカイロフナの敏い耳は笛の音の罷んだのを聞きつけた。而して何が起つたかといふ事を察して夫人の心には悅びが溢れた。今度こそ夫人の勝利であつた。大勝利——苦痛を伴はぬ勝利。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

トキムに對する夫人の怒は疾に消えてしまつて、今はこの新に生れた幸福も全く彼のお蔭だといふ事をよろこんで認めた。どうしたら我が子の心が獲られるかといふ事を敎へて吳れたのは彼である。夫人は今その子に新な印象の充ち滿ちた世界を披いて見せる事が出來る樣になつた。この大きな福祉は親子二人の師なり友なりの百姓の笛吹きの賜物であつた。

隔てはとれた。翌朝ペトリックはあの騷々しい無作法なウインナからの珍客が到着した多事の日以來、始めて好奇心に驅られておづ〳〵と客間にはいつて來た。

前の晚の演奏はすつかり彼を感心させて、其の氣持をまるで變へてしまつた。

ペトリックはそつとピアノに忍び寄つて、ピタリと立ち止まつてぢつと耳を澄ました、部屋には誰も居なかつた。が、次の間の開いた戶口からは母親が息を凝らして彼の仕ぐさに一々氣をつけて、その美しいよく動く顏にあらはれる變化を一つもゝらさず見守つて居た。

ペトリックは手を延ばして胡桃製の函のすべ〳〵した面に一寸觸れて、あとじさりした。幾度か同じ事を繰り返してから彼はもう少し近づいてピアノ全體を撫でまはした。その大きさや形がはつきり分かると彼は指を鍵盤の上においた、と、柔らかなためらつてゐる樣な響が空に顫へた。子供は母親には聞きとれなくなつてからも暫く熱心に柔らかな顫へに聽き入つて居た。同じ樣に

深い注意を拂つて彼は別の鍵に觸れた。それから鍵盤全體を通り越して高い音をいくつか出して見た。一ツ一ツの音に彼は時間を十分與へて、その響いて顫へて消えて行くのをきいた。其の間彼の顔は甚深な興味と非常な歡喜(よろこび)とを示した。彼は一ツ一ツの調子を讃美して研究してゐるらしい、旋律の要素を味ふ天賦の力で眞の藝術家の素質のあることを見せてゐた。

のみならず、その様子で彼は各音の特質を認めてゐるのが分かつた。その指が高い陽氣な華麗(にで)な音にふれると、音の行つた方向を眺める様に彼は活き〳〵した顔を上へ擧げた。併し低いのを打つた時はさういふ重い音は床へ落ちてどこかの隅へ消え失せてでも行く様に思ふらしく頭を下の方へ傾(かし)げた。

八

マキシムはかういふ音樂上の試みを眞から滿足して見てゐることが出來なかつた。ペトリツクの音樂好きな事は老ガリバルヂ派に二様の感情をおこさせた。彼は甥に特殊の才能のある事はよろこんだもの丶、もしそれが外の方面であつたなら猶好かつたと思つた。云ひ換へれば彼は失望したのであつた。

「おれは知つてる」と彼は心で云つた。「おれは音樂は力だといふ事を知つてる。何しろ人を動か

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

すものだ。ペトリックは今に男だの女だの、のらくら者のわい〱連を一杯あつめて、其奴らのためにいろんなワルツや夜曲(ノクターナ)を彈くんだらう（マキシムの音樂上の智識は確に廣いものではなかつた）面して其の連中は香水をふつたハンケチで愚にもつかぬ涙を拭くんだらう。こんな事になるつもりではなかつたが。まあ仕方が無い、小僧盲目だからな、自分の得意(えて)でやつて行く外あるまい」

マキシムの教育法に從つて、ペトリックは何でも出來るだけ人手を俟たない樣に仕つけられた。其の結果はどの方面から見ても良好だつた。彼は屋内は手引なしで自由に歩きまはつて、自分の部屋は自分で片づけるし玩具を始め持ち物はみんな自分で始末した。

亦彼の體育も等閑にはされなかつた。彼には彼だけの遊技もあり六歳の誕生日に伯父から貰つたよく馴れたよく仕込まれた小馬もあつた。始めてこの話が持ち上つた時、ポペルスキー夫人は盲目の子を馬に乘せるなど〻いふ氣ちがひじみた思付き――夫人はかう云つた――を聞き入れなかつた。が例の通り最後にはマキシムが勝つた。で二三ケ月のうちにペトリックは小馬に乘つてトキムの指導のもとに面白さうに驅けまはつた。トキムは曲がるとか邪魔ものを避けるとかいふ樣な必要に迫られぬ限り、決して子供の自由な運動に干渉しなかつた。

それでペトリックの不俱な點は少しも身體の健康な成長を妨げなかつたし、マキシムは甥の精神

Digitized by Google	Original from CORNELL UNIVERSITY

的方面にもその影響の無い樣にと極力つとめた。此の時分ペトリックはきやしやではあつたが、年の割に丈は高い方であつた。その顏には血の氣がなくて顏立ちはやさしくて表情に富んで居た。

彼の黒い髮は蒼白な皮膚と大きな黒い眼によく映つた。その眼は滅多にうごかないので彼を異樣に殆ど神秘的に見せて必ず始めて會つた人の注意を惹いた。此の特徵は一寸眉をよせるのといつもうつむき氣味なのと、時々美しい顏を掠める悲哀の影と共に盲目のしるしであつた。勝手の知れてゐる所ではペトリックはどしどし臆せずに振舞つた、がその一體の動作と時折の神經的な身振とで、不倶のために彼の生來の活氣がよほどそがれてゐる事は少し氣を注けて見る者にはすぐ分かつた。

時を經がまゝに音樂は愈々盲目の子の生活の主な興味と仕事とになつて來た。彼は聞こえる所で彈かれたり歌はれたりする曲は氣をつけて聽いてゐるだけで覺えてしまうし、周圍の自然の物音は苦もなく聞き知つた。それを彼は統一して俗謠とも自作の歌ともつかぬ自由な即興の曲にした。自分でさへどこからどこまでが獨創なのか籍り物なのか分かち得ぬ程に此の二ツの要素は、ペトリックの心裡でよく混和して居た。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ペトリツクはピアノが氣に入つて母親と一所に練習したものはどれも皆譯なく覺えてしまつたもの丶、トキムの笛も捨てゝしまつた譯ではなかつた。

ピアノの音色は堂々として充實してゐて朗らかであつた、がいつも一ツ場所にある不便がある、所が笛はおもてに持ち出して曠原の奔放な音樂や森林の神秘なさゞめきに合はせて吹く事が出來た。

ペトリツクが九歳の時、これまで熱心に最良の盲人敎育法を研究して居たアキシムは彼に讀み方を敎へて正則に授業を始めた。子供は出來がよくてずん〳〵進んだ。この訓練は新な觀念、新な喜悅を多く與へた上に、盲目なるが故に且は音樂に熱した餘りおのづから生じた內省や夢想の傾向を矯める事が出來た。

子供は每日爲る事があつたし、樣々の印象にも乏しくはなかつた。彼はその年輩の子供にしては十分に充實した生活をして居て、その不具の意識――少くとも苦い意識――は無い樣に思はれた。でも、やはりその性質には子供らしくない悲哀が添うて居て、一體の遣り方が外の子供とはちがつて居た。マキシムはこの特徴をペトリツクに子供の相手がないからだと考へて、その原因を除かさうとした。

近所の百姓の子供らは邸へ來てペトリツクと遊んで呉れと賴まれた。併し子供らは四邊に馴れな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いのと、若いあるじの盲目なのに臆して ドギマギしてゐた。彼等は一ッ所にかたまつておづ〱と默まり込んで居たり、仲間同士でこそ〱さゝやいたりして居た。庭か廣場に出された時は皆愉快におもしろさうに遊びまはつた、が、さういふ場合にはペトリックは遊び相手の陽氣な叫びを哀しげに聽き乍ら仲間はづれになつてゐた。

時には彼も子供らをまはりに集めて面白い話をして聞かす事もあつた。すると小露西亞の口碑に通じて魔法使や惡魔の不思議な話を聞きためてゐる子供らもてん〲に話を持ち出した。それでかういふ方は中々活氣があつた、が、ペトリックは熱心に聞いて居ても笑ふ事は滅多になかつた。多くの外の事と同樣に、口語のをかし味は目の見えぬ子には到底分らなかつた、話し手の笑つてゐる目や、とぼけた身振が見えないのはいふまでもない。

丁度マキシムが甥の憂鬱をなほさうと思ひ立つ少し前の事であつたが、近所にヤクッスキーといふ夫婦者が棲む樣になつた。二人とももういゝ年で、兩方の年を合はせれば殆ど百に近かつた。その癖、二人はずつと前に結婚した譯でも無かつた。ヤクッスキー氏は生れは貴族であつたが、畑を買つてそれを維持してゆくだけの資本をこつ〱溜めるのには久しく骨を折らなければならなかつた。其の間彼は獨身で居て、まだ若いうちに約束をした其戀人はサドヴ伯爵夫人の介添となつてすご

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

してゐた。もう一所になつても好いと思つた頃は、女のうら若い色香は褪せて男の殘り少なの毛は寄る年に白くなつてゐた。併し二人の心は以前のとほりに若くていかにも樂しく暮して居た。ペトリックが生れた少し後、小さな娘ができてからは猶更であつた。その子は金髮碧眼の可愛い子で、會ふ人は皆その顏の妙にとりすましてゐるのとその樣子のおちついてゐるのとに驚いた。その娘の性質、その子供に似ぬ分かりの好さや、立居のしとやかさや、濃い碧眼には兩親の晩婚のまじめさが映つて居る樣におもはれた。この子は知らぬ人に會つても少しもはにかます、大人には臆せずに對した。一方子供仲間のつきあひを避けもせず、時々は一所に遊びもしたが一所になる時は自分の樂しみよりは外の人の慰みのためでゝもある樣に一寸讓つた樣な氣持でゐた。併しこの子が一番好きなのは幼ない娘といふより少婦人といふに似つかはしく、眞顏で巧者に人形と話したり、花を摘みながら只一人でさまよふことであつた。

九

或晴れた日の午後、ペトリックは氣に入りの河沿ひの丘へと出かけた。日は沈む所であつた。風は鎭まつてゐた。ペトリックは座つて、今はもう離れられぬ友達の横笛を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

とり出した。すこし吹くと彼はそれを措いて、草の上に寢轉んだまゝ夏の夕の睡りをさそふ樣な氣持に浸つて、野らから歸る牛の呻きや、揚げ雲雀の朗らかな歌聲や、薄明りの中の目に見えぬ蟲のつぶやきに恍惚と聽き入つて居た。

夢想の眞中に輕い足音が聞こえた。邪魔されるのをうるさくおもひながら彼は肘をついて、身を起して、耳を傾けた。足音は丘を登つて來る。が聞き馴れぬ足音なので闖入者は知らない人だと知れた。

次の瞬間に彼は女の子の聲を聞きつけた。

「一寸、今しがた笛を吹いてたのは誰だか御存じ?」

「僕」と彼は無愛想に孤獨の妨害者に答へた。

「まあ」と女の子は叫んだ。それから感心した樣な調子でさつぱりと云つた。

「あなたほんとにお上手ね」

「何故あなたは自分の行く所へ行かないの」とはペトリックの無狀な返事であつた。

「でも、何故あなたは私を外へ行かせたいの」と女の子は不思議さうに聞いた。

その可愛い聲はペトリックの耳を和めたが、猶彼は前と同じ調子で云つた。

「僕は人がこゝへ來てほしくないの」

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「こゝへ人の來るのがいやですつて?」少女は面白さうに笑ひ乍ら云つた。「何故?聞きたいわ。まるで世界中あなたのもので誰も外の人は歩いちやいけないやうね」

「母さんが僕はそつとしておかれなけりやいけないつていふの」

「でも私の母さんは好きな時に河邊(かはぶち)を歩いて好いつて仰しやつたわ」

すると抗はれたことのないペトリックき赫とした。

「行つちまへ、行つちまへ、彼方へ行けつてば」と彼はむきになつて怒鳴り乍ら立ち上つた。

少女は不意を打たれて呆れ果てゝ彼を見た。丁度そこへペトリックを茶のために呼びに來たトキムの聲がしたので彼はさつと丘を駈け下りた、が、その耳には「まあ何てわるい子でせう」といふ小婦人の腹立ち聲が響いて居た。

翌日の夕方前日の怒はすつかり消えて、銀の樣な聲をした少女が又來れば好いがとまで思ひ乍らペトリックはまた丘へ行つた。彼の知つて居る子供らは無作法で騒々しくて、彼の感じ易い耳に軋む樣な聲を立てゝきやあ／＼さわいだ。あの女の子の樣に氣持の好い物云ひをする者は一人も居ない。が、彼は餘り怒つたからもう來ないのではあるまいかと案じて居た。

其日は娘は來なかつた。併しペトリックは同じ望みを抱いて何度も出かけた。すると四日目の夕方

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

彼が心待ちに待ち乍ら草の上に寢ころんでゐる處へ、あの足音が下の河の方できこえた。娘は歌をうたひ乍ら小石を足で蹴てそろ〳〵歩いて居た。

「あなたなの」と女の子が近づいて來ると彼は呼びかけた。むかふはなほ歌をうたつてゐる、小石はやはり足で轉がされてゐる。相手の聲には此方の無作法をまだ氣にとめてゐるとおもはせる様な調子があつた。

併し近くへ來ると少女は歌ひ罷んで下の河邊で摘んで來た野花を揃へでもする様に立ちどまつた。

久しく斯う默つてゐるのは、わざと知らん顔をしてゐるしるしだと思つて、ペトッリクは辛抱して返事を待つた。

「私だつてことが見えないの」と少女はやがて傲然と云ひ放つた。

譯もない問だ。が、盲目の子の耳にはつらく當つた。彼は何も云はなかつたがその身をもたせかけてゐた手は一握りの草をきゆつと掴んだ。それでも二人は近附きになつた。

「誰に笛を習つたの？」と少女はやはりもとの場所で聞いた。

「トキムに」

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「全くあなたはお上手よ。でも何故さう怒りつぽいの」
「僕――僕怒りつぽいもんか」
「私だつて。一所に遊ばないこと？」
「僕はどうして遊ぶんだか知らないの」ペトリックはうなだれて答へた。
「どうして遊ぶのか知らないつて？　まあ驚いた。でも何故？」
「何故つてば――」
「えゝ！　何故遊ぶことを知らないの？　話して頂戴、ね、さあ」
「何故つてばね――」ペトリックは愈々低く垂頭れて微にかう云つた。
ペトリックは今迄一度も知らない人に自分の目の見えないのを告げたことはなかつた。少女の無邪氣な執拗な好奇心は彼の急所を刺した。
「隨分變な方ね」少女は彼の傍に座り乍らませた、慈しむ樣な調子で云つた。
「あなたは私をまだ御存じないからそんなこと仰しやるのよ。もつとよく知り合つたらあなたはちつとも私を恐がつたりなんかなさらないわちつとも。私は誰も恐がつたりなんかしないの」
少女はペトリックには殆ど氣をとめないで花を弄び乍らいかにも落付き拂つて話した。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「その花どこで摘んだの」彼は云つた。
「あそこで」と少女は頭を動かして云つた。
「野原で？」
「いゝえ、あそこよ」
「じやあ草の中だ……何の花？」
「あら、御存じないの？　まあ、餘程妙ね、あなたは」
ペトリックは一つの花をとつて葉や花を指で撫でた。
「これはたんぽゝだ。此方は菫」と云つてから彼は花を知つた樣に新しい友達をも知り度かつたので、左の手を少女の身體にまはして、右の手で髮の毛や眉や顏をそつと撫でゝ、その目鼻立ちを覺え込むために一寸たゆたつたりした。

その遣方が餘り突然で急だつたので呆氣にとられたまゝ口もきかれなかつた少女はたゞ目をみはつて彼をながめてゐる許りであつた。すると始めてこの新しい遊び相手には餘程妙な所のあるのに氣がついた。蒼白い弱々した顏ときつと寄つた眉とは、いかにも熱心らしく見えて、落日の赤い輝きをしづかに映してゐる物凄い動かぬ眼と強い對照をしてゐた。この物を視ぬ眼をぢつと見てゐるう

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ちに少女の驚きは一變して怖となつた。すばやく身をふりはなして突立つと子供はワッと泣き出した。

「何故そんな風に人を見ておどかすの？　厭な人。私が何を爲て？」彼女は激しく啜り上げた。

ペトリックは餘りの驚きと餘りの悲しみに答へが出なかつた。怒と耻辱とに胸も裂けさうな氣がし乍ら彼はうつむいてぢつと座つてゐた。生れて始めて彼は不倶の口惜しさを感じて、又それは憐みのみならず。恐れや惡感を起させるものだといふ事を知つたのである。

燃える樣な口惜しさと激しい悲しみとが咽喉をひきしめてはては息もとまりさうな氣がした。自尊心は威嚴を保てといふ。併し彼の感情はとても堪へきれなかつた。どつと涙が溢れると彼は遣瀬のない悲しみに悶えて地に身を投げ伏して傷々しく啜り泣いた。

この音を聞きつけると、もう丘を駈け下りてゐた少女は驚いてふり返つた。ペトリックの悲しみを見るとその心は融けて、怒は消えた。

「ね、何故泣くの」少女は彼の方へ身を屈め乍ら云つた。「私が云つけると思ふの。さあ泣きつこなし私誰にも云はないわ、誰にも」

かういふ同情の言葉とその物云ひのやさしさとが慰れないペトリックをなほ更泣かせて彼は一言の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

返事も出來ないのであつた。
　少女は彼の傍に座つてしばらく途方に暮れたやうに默つて眺めて居た。それから彼の髮を撫でゝ頬をさすつて、後悔した子供を慰める母親の樣に氣長に柔しく彼の頭をもち上げてかくしから小さな手巾をとり出してその涙を拭いた。
「もう好し！　もう好し！」と一ぱしの大人の樣な尤もらしい調子で少女は云つた。「さあ好しと。私をおどかしたのをそんなに後悔していらつしやるからもう怒つてなんかゐないことよ。」
「僕はおどかすつもりじやなかつた」とまたせき上げて來る泣いじやくりを壓さへつけやうと深く吐息をつきながらペトリックは答へた。
「さあ、私は怒つてゐないつて云つてるじやありませんか。もうそんな所に倒れてるんじやないの。こゝへお座りなさい。私のそばへ」少女は彼の肩に手をかけて起こしかけた。
　ペトリックは云ひなりになつた。けれども少女は彼の顔をまた見ると殆ど前と同じ位な恐れを感じた。眩ゆい日光に向つて、はつとあいたきりの彼の冷かな動かぬ眼には涙が一杯で、その蒼白な顏は悲しみをこらへてゐる樣にゆがんでゐた。
「でも――變ねえ――あなたは」と少女は二三尺離れて訝かしげに云つた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

憐なペトリックはいぢらしい手ぶりをした。

「變なこたあない、……僕は盲目だもの」

「盲目！」と少女は震へ聲でつぶやいた、まるで相手のさゝやいた悲慘な言葉がその小さな女らしい胸に傷ましい傷を加へたかの樣に、

「盲目！」と少女は聞きとられぬぐらゐの聲で又云つた。それから、とても言葉には及ばぬ程氣の毒におもふ樣子で、盲目の兒の首に兩腕をまはして顏に顏をおしつけた。少婦人の怒はたちどころに消えて生地の可愛らしい子供に返つて泣き出してペトリックの涙に我涙を添へた。

暫くは二人とも默つて居た。

最初に氣をとりなほしたのは少女であつた、其の顏はいかにも悲しさうで深い吐息をついては居たが、涙に曇つた眼で少女は暗い地平線に沈んで行く燃える樣な太陽を見守つた。大きな火の玉の金色の邊は最後の光を放つて閃光は空に迸つた。黑い森の影は地から天へかけて擴がつてゐる巨大な雲の樣に遠方にぼうつと見えた。

夕方の靜けさ、河から吹き上げるやはらかな微風、それにも增して相手の同情の温かさ柔しさがペトリックの亂れた心をなだめてその勇氣をとり返した。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「あんまりかわいさうでね」と啜り上げ乍ら少女は云つた。それから氣を鎭めて話を變へた方が好いと思つたので、もう日の沈んだ事を云つた。

「僕は太陽つてどんなものだか知らないの。只感じるばかり」

「太陽を知らない？」

「えゝ」

「じやあ母さんは！　母さんも知らないの？」

「いゝえ、知つてる。母さんは知つてる。母さんがずつと遠くから來るのが分かるの」

「私もさうよ。私も母さんが見えなくても知つてゐたいわ」

これから話は碎けて互に打とけて來た。

「僕はね」とペトリックは勢よく云つた、「僕はね太陽は感じる事ができないけれど、沈んだ時には分かるの」

「まあ、でも、どうして？」

「それはね、あのね……こんな風に――感じるの、それで僕には分かるの」

「あゝさう、えゝ分かつたわ」とこの說明によく滿足して少女は云つた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「さうして僕は讀む事も出來る。ペンを使ふ事ももうぢき習ふの」ペトリックは自慢さうに云つた。

「讀む！　あなたが！　でもそれは――」と云ひかけたが、餘り根問ひして相手の氣をわるくさとすまいとする樣に少女は言葉を切つた。

「僕がどうして讀めるかとおもふの？　あのね、自分の本を使つて指で讀むの」

「指で？　私にはとても指でなんか讀めないわ。丁度私が讀むのと同じ事ね。父さんはね、女は物の分かりがよくないつて仰しやつてよ」

「僕は佛蘭西語もよめるの」

「まあえらいのねえ」と少女は感心して云つた。「でもこゝにいらつしやるとあなた風を引きさうね。河から霧が立つて來たわ。」

「あなたは？」

「私は平氣。私は何にも身體に障つたことなんかないの。」

「僕だつてさ。それに男の子は女の子の樣に風なんか引かないもの。もつと強いんだから。マキシム伯父さんはねさう云ふの。男は何でも恐がつちやいけないつて、おなかゞすくのも雷も雨も。」

「マキシムさん！　あの拐杖をついてる人のこと？　私見たことがあるわ。恐いのねえ。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「うゝん、恐いもんか。それあ好い人。」

「いゝえ恐いわ。ほんとうに、全く恐いのよ」、と少女は斷乎として繰り返した。「あなたは知らないのよ、見たことが無いから。」

「知つてるとも。伯父さんはいろんな事を教へてくれるの。」

「あなたを打つて?」

「一ぺんも。叱ることさへないの」

「そんな事誰がするもんですか。盲目の子をいぢめるなんて恥だわ」

「でも伯父さんは誰もいぢめやしない。」とペトリックはぼんやり答へた。彼の敏い耳は河原を來るトキムの足音を聞きつけた。次の瞬間には馬丁の姿が見えて若主人をよぶ聲が聞こえた。

「あなた御用があるのよ」と少女は立ち上りながら云つた。

「えゝ、でも僕はあなたと一所にこゝに居た方が好いな」

「いゝえ行らした方が好いわ。明日また會ひに來ませう。今はお家であなたを待つてらつしやるのよ。私のとこもさうだわ」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

十

少女はちやんと約束を守つた。翌朝ペトリックは受業中ふと頭を上げてキッと耳を立てたが非常に勢づいてから云つた。

「一寸向ふへ遣つて下さいな、女の子が來ましたから」

「女の子?」とマキシムは笑みを含みながら不思議さうに云つた。而してペトリックを遣つたあとから廣間の戸口までついて行つた。

ペトリックの新しい友達は庭にはいつて來てポベルススキー夫人を見るとさつさと然もしとやかに近寄つた。

「何ぞ御用ですか、お孃さん」夫人は少女が何か使ひにでも來たものと思つてかうたづねた。

「盲目の子はこゝにゐますか」と小婦人は落ちついた威嚴のある樣子で手をさし出し乍ら聞いた。

「はゐ居りますよ」と夫人は少女の輝かな眼と淡白な臆せぬ態度に魅せられて答へた。

「うちの母さんが來ても好いつて云ひましたの。お目にかゝれますか」

「あなたのお名は?」

「ヴエリア・ヤクッスキー」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

「おや、まあヴエリア」

「丁度其の時廣間の戸があいてペトリックは來客に挨拶しやうと駈け出した。ずつと後の方にはペトリックの足ほどに早くは動かぬ拐杖(かせづえ)にすがつて伯父がついて來た。

「これが僕のお話したあの子なのよ母さん。」とペトリックは友達の手をとり乍ら云つた。「でも、僕はお稽古があるの。」

「なあにようござんす。伯父さんが今朝は休ませて下さるよ。私からお願ひしませう。」

ヴエリアは拐杖にすがつてゴトリ／＼出て來たマキシムを見つけると、そこへ出かけて行つて握手した

「よく盲目の子をお打ちになりませんのね。私はお打ちになると思つてましたの。でもそんな事無いつて此方(このかた)がおつしやいましたわ。」

「そんな事を申しましたか、これが?」と老武夫は大きな掌に小さな手をにぎつてわざと重々しく聞いた。「そんな事を申しましたかな。かういふ可愛らしいお孃さんによく思つて頂けるのも弟子のお蔭ですな」皮肉な老人は少女の手を放して快く笑つた。彼は少女の碧い眼と人を魅する素振とがすつかり氣に入つたのであつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「氣をお注け」と彼は意味ありげに微笑んでこつそり妹に云つた。「ペトリックは早く遣り出したぞ。盲目にしては目が利いてるね。目明きでももつと拙い奴がいくるもあるよ」

「何を云つてらつしやるの、あなたは」と妹はつんとして云つた。温かい血潮はさつとその顔を染めた。

「なあに、何でもない、冗談さ」マキシムは自分同樣妹の心にも自づと湧いた思ひを口にしたため、ついその胸を刺したのを見てわざと平氣なふりでかう云つた。

アンナ・ミカイロフナは益々顔を赧らめながら、朧氣に將來を見透かしてゞもあらうか、ヴエリアをやさしく抱きしめて熱い接吻をした。小婦人は一寸驚いて目を見張つたが相かはらずおちつき拂つた樣子で、立派な貴婦人の不意の抱擁に身を任せた。

この時から邸と小屋との交際は親密に且頻繁になつた。ヴエリアがペトリリックをたづねて來ない日は殆ど無く、ペトリックは亦ヴエリアの居ない時は眞から樂しさうに見えないので、ボペルスキー夫人とマキシムとはヴエリアに毎日來て一所に物を習ふ樣にすゝめた。

併しこの計畫をヤクツスキー氏に聞かせた所が、思ひの外によろこばれなかつた。まづ第一に彼は所謂婦人の高等教育に對しては牢固とした意見をもつて居た。着物の遣繰りが出來て帳簿でもつけ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

られる女は女として十分な敎育をうけたものだと考へてゐた。のみならず固い加特力敎徒でガリバルヂや其の旗下で戰つた連中は異端異敎と餘りちがはない樣に思つてゐるので、マキシムを自分の幼女の先生にするのは有難くないと考へた。それにまた彼はマキシムはヴォルテールを讀んだといふ恐ろしい評判も聞いて居た。ヴォルテールを讀むなどゝは墺太利人と戰つたり法王に手向かつたりするよりまだ惡いのだ。

併しマキシムと近づきになつて見ると、彼はその人物を見直さない譯には行かなかつた。彼は惡魔は繪に描いてある程黑いものではないとおもつた。云ひ換へれば準外道の前謀叛人はヴェリアとペトリツクの事から緒の解けた話のうち法皇を貶しもしなければヴォルテールの言葉を引きもせず、いかにも上品なよく分かつた、甚だ感じのよい紳士だといふことが分かつた。

かうした事情なのでマキシムの氣にも障らずポペルスキー夫人の歡心も得度いと思ふヤクツスキー氏は、娘が向ふ任せになる危險だけ避けて、云ひ分に從はうといふ結論に來た。が、その危險があるので、子供及自分の利益から見て及ぶ限りそれを減少するのが至當だと考へた。そこでヴェリアの始めての稽古日が來ると、彼は一所に連れて行つて、歸る前に弟子にあてゝではあつたが其實先生に對して、嚴そかな一場の小演說をやつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「なあヴエリア」と彼は娘の肩に手をかけて、然も目はマキシムの方を見乍ら云つた。「父さんの云ふのを聞いておいて。さうして天には神様がお出になり。羅馬には法王様の御出になる事を忘れてはならん、宜いか。かう云つて聞かすのは私じや、お前の父さん――ヴワレンチン、ヤクッスキーじや。お前はわしの云ふ事を信じるのだぞ、第一に（こゝで愛すべき老紳士は息を切つた、丁度自分だつて世間並みに羅典語も引けるといふ事をマキシムに知らせる様に）わしはお前の父さんだから第二にわしは紋所には稻叢に烏の外、青地に十字架の描いてある貴族だからな。ヤクッスキー一家の者は皆勇ましい善い武士だつた上に宗旨のことにも暗くはなつた。其の外のことは――オルビステルラルム――即ち現世の事についてはマキシムさんの云ふ事を聞いてな――怠けなさるなよ」

「いや御心配には及ばんです。」とマキシムは面白さうに微笑み乍ら云つた。「私どもは令嬢方をガリバルヂ派には致しませんよ。」

新しく始めた仕事はどの方面から見ても成功であつた。生徒は二人とも進みが早かつた、尤もペトリックの方が進んでは居たが二人の懸隔は健全な競爭の出來ない程ではなかつた。ペトリックはヴエリアに學課を見てやり、ヴエリアは彼が盲目のためにはつきりと思ひ浮かべたり。意味を掴みにくい事を説明してやることもよくあつた。それに相手が出來た爲めにその勉強も今迄に無い味や

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

面白味が出て來た。

つまり此の友誼はペトリックにとつては全く天與のものだといふ外なかつた。彼はもう夢想に耽つたり寂しい場所を求めたりしなくなつた。彼は久しく熱望してゐた同情と友愛――大人や今迄出會つた子供等の與へ得なかつた――を見出したのであつた。ヴエリアが傍にゐるのはいつも有り難くおもはれた。晴れた日の逢引の場所はやはり河岸の風の靜かな丘であつた。そこでヴエリアは小一時間もペトリックの笛にあどけなく聞き惚れて、彼が笛を措くと、小供らしい活き〳〵した喩へでまはりの風物の印象を彼に傳へやうとした。ヴエリアの調子が言葉に力を添へた上に、ペトリックはその作完全に達してゐる感覺を籍りて說明される光景を心に描くことが出來るのであつた。ヴエリアが大地を一面に蔽ふ暗い夜の話をする時は、その低い銀の樣な聲音に彼は暗を聞く樣な氣がした。

「ヴエリアが顏を上げて、

「まあ！　何といふ暗い雲でせう、向ふの方にかたまつてゐるのは！　何といふ眞暗な鬱陶しい！」

といふとペトリックは寒くでもある樣にわな〳〵顫へて、ヴエリアの言葉尻の調子に、頭上遙かな空を不祥な恠物の這つてゐるのがきこえるやうな氣までするのであつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外通信

O. P. Q.

女大學生。ベルリンの大學教授(文科)リヨオテは女を講堂へ入れぬと云ふ條件を附けて就任したのである。然るに時世が變つて來たので、此拒絶は頗困難になつた。只教授は依然前の條件を守つてゐる。とう〳〵議會で議員ミユンテルベルヒの質問に對して、文相フオン・トロット・ツウ・ザルツがかう云つた。教授の主張を變へぬのは尊重すべき事である。併し女の前でもドイツ文藝史は講ぜられるものだと、リヨオテ教授が今日悟つてくれたら、本大臣は喜ぶであらうと云つた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Marie von Bunsen. 理學者ブンゼンの孫娘である。犬を一疋連れ、拳銃を一つ持つて、フォルモトサと云ふ端艇で、全ドイツ國を旅行した。陸上では農家や漁家に泊つた。其紀行はイムルウデルボオト・ドウルヒ・ドイチユランドと題して、ベルリンのエス・フイッシエルから出版せられた、文章は極て眞率である。

Sarah Bernhardt. ベルジックへ旅興行に往つてゐて、足に怪我をしたと云つて、パリイへ歸つてダアスへ保養に立つた。何か別に病氣がありはせぬかと世間で云つてゐる。

婦人會同盟　ドイツの婦人會同盟は五十五の大結社と二千五百の地方結社とから成り立つてゐる。直接聯合に加はつてゐる會の數が約三百である。其會員數は五十萬人になつてゐる。市政參與權は殆全部が要求し、國政參與權は過半が要求してゐる。會長はGertrud Baeumer である。

女子の職業組合　ブレスラウとリイグニッツとに女裁縫師の組合、エルフルトに女粧飾師の組合が出來た。女子の職業組合はドイツでも中世には成立してゐた。それが十四世紀以後中絶してゐたのである。

看護時間　カリフオルニアでは看護婦の一日の勤務時間を八時間と定められた。

女齒科醫　ドイツでは一九一四年一月一日の保險法で、保險組合に入つてゐる患者を取扱ふ女齒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

科醫は三乃至四年間の助手勤務を經たものでなくてはならぬことにした。右加入者は目下二千萬に上つてゐるので、これを取扱はなくては營業が成り立たぬのである。

Maria Montessori. ロオマでカザ・デイ・バムビニと云ふ小兒あづかり所を立てて、拘束を加へざる小學教授法を實施してゐる。

下女の教育　ベルリンでは下女の職業講習會が出來た。毎週一回午後七時三十分から九時三十分まで授業する。

女子職業問合所　一九一二年以來ベルリンに出來てゐる。各職業の現況が取調べてある。所長は Josefine Levy-Rathenau である

女子大學　ライプチヒに Henriette Goldschmidt の起してゐる女子大學(ホツホシユヴレ・フユウル・フラウエン)には目下學生六十七名、聽講生五百九十八名がゐる。校長はプリユウフエルで、顧問にはヨハンネス・フオルケルドがなつてゐる。

女子參政權の結果。フインランドでは庶子の財産相續權、小兒虐待防遏、妻の權利伸張、町村産婆の任命等が有利に規定せられた。ニユウジイランド(二十年來女子參政を實施してゐる)では禁酒のために犯罪を減じた。濠洲では女子勞働期の短縮、賃銀役所の設立、賭博所の閉鎖等が行はれた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（ブロオダ報告）

ロシアの女子參政問題　ロシアの國會（ドユマ）議員に女子參政權に對する賛否を問うた所が、大多數は冷澹で、十人程明白に反對した。（國會議員數は四百三十九人である。）

學制研究會　キヨオニヒスベルヒの學制研究會は Maria Krause を名譽會員に推した。女學校長をした人である。

女獸醫　ハンノオヱルの獸醫學校には女助手が出來た。年俸千二百乃至千六百五十マルク。

女の鐵道技師　モスクワの鐵道廳では女の技師を置くことを許された。

リラの香

八木さわ子

一

夕暮のものゝたはれに
色赤き草のはなゝざ
白紙にすりも染めしか
われとわがおさな心の
夕暮の物のたはれに。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

二

あはれ物思ふさまに
うるほへる君が瞳よ
あはれ君
見も果てぬきのふの夢の
ゆくへや追ふと。

三

君がうたふ
たへなるカンチックのひゞきは
聖堂の白壁(かべ)にこだまし
こがねなす金色(こんじき)の向日葵
かゞやきてつとかへりぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

四

あはれ我かくもさびしく
君を思ひ泣きてある時
あはれ君一人尊く
聖堂に祈りてあらむ。

五

君はかの梔子の
いと甘き香をば好むや
夕闇の、夕闇の
うす明る物のかげより
ほのかにも映えにほふ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

その花の甘き香を。

六

君が言葉はかのベルモットの酒の
いと甘き口ざはりにも似て
こゝろよくわが耳にひゞきぬ。

あまつさへ
そはいとたかき
愛のしらべなれば
且はなつかしく
わが心にふれぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

七

君は
いと妙（たへ）なるリラの香を
又なくもめでたまひき
あはれかのリラの香に似て
つゝましき君にませば
そのはなの清き香を
又なくもめでたまひぬ。

八

泡だてるビールよあはれ
わがこひはかく苦がからず、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

香よきリキウルの酒よ
わがこひはかく甘からず。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

免職の日迄

菅原初

一

かあん、かあん、か…あ…ん…鐵を叩く二つの槌の音が桑畑一つ隔てゝ向ふから聞える。その一ツは小さい冴えた音、もう一つは合槌の大きな音であつた。漸く新らしい芽を吹き初めた桑の梢を透して、そこには亞鉛垣した蹄鐵工場があつた。音はそこから聞えてくる。この音は幾がここの街にきて、初めてこゝの二階に明したその朝から毎日聞いた響であつた。このとき幾の眼には薄暗い壁の裾から赤い火花の飛び散る樣が鮮かに見え出した。そしてこの暗い春景の前は重い鐵槌を振つて、一生懸

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

命、粗鐵を叩いている中年者の青い顔が浮き出した。

よくその工場の前を通ると、そこには黒毛や、褐毛の馬が烈しい勞働に、鮮かに肋骨の枚數も讀めるような瘠せたのが屹度二三頭は繋がれてあつた。 その奥の方でいつも同じやうな表情で青い顔はいつでも根氣よく鐵を叩いている。

幾は朝夕にこの音を聞いた。かなり長い間、この響を聞いて暮した。 もうこの頃ではその青い顔が叩くその音の調子までですつかり覺えてしまつた。そして近頃は幾の生活の背景に、この青い顔が頼りのない眼つきをして始終見詰めてゐるような氣がしてならない。 かれこれ三月餘りもこの響を聞いてきた自分も、毎日々々同じように、無暗と叩くこの男のように、自分も毎日毎日、生活の粗鐵を叩いてきた。

それが突然、けさ起きがけに聞いたその響は、その調子はいつものそれとは違つていた。 幾は妙に物足らぬ感じがした。そして人が變つたのだなと感付いたときには妙に寂しい思ひがして、青い顔の中年者のその運命を哀しく思はれた。

幾はふと思浮べた。それはこの頃、薄々同僚間の話題に上つている『例の件』のことであつた。

これ迄、この女學校の生徒で本科の程度を卒へて後、更に進んで補習科への志望者はごく僅であつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

た。そのため經濟上の方面と、それに教授上の都合も手傳つてこの學期限り、廢止せらるゝことになつた。それがまた職員の員數にも影響して技藝員の一人に餘りができた。職員間にはいろんな噂が出た。或者は言つた。技藝員のひとりは退せらるゝであろう若しもそうだとすれば誰がこの運命を握るだらう。或る者は云つた。まさか休職にはならないだろう、學校は轉任の運動を執るだろう、こう考へて強いて安心らしい顏をした。説はまちまちであつた。噂は徒らに噂を生んだ。

控所には穩かならぬ、さゞめきが起つた。人々の肩の間にはそれとなく不安らしい色が見えてきた。静かでなくなつてきた。それは安心の光を倫理のページに見出さずして貯金帳の上に悟つた、切り詰められた生活の苦しい波動であつた。

翌日學校に出て見ると、山田も出てゐる。竹村も出てゐる。藤本も、野田も、谷口も、そして皆、眞面目そうに、すばしこく、小まめに働いてゐる。誰を見ても、どの顏を見ても透間のない、利口そうな顏をしてゐる。山田が甘く一座の話をとり持つ。谷口がそれに調子を合せる。竹村が樣子よく茶を入れる。そして、それ等がみんなその場の空氣に融和してゐるらしく見える。こんな光景を不思議そうに、また興味らしい眼で觀ているのは幾であつた。腦裡にかなり蕃殖力の強い或る者を植え付けてゐる彼女はいつも空想と事實とを結び付けては他の思ひも寄らぬところへ自分の世界を作つて與がる妙

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

な神經の所有者であつた。

彼女はまた、みんなと同じように茶を飲み乍ら、同じような話しをしてゐる間にも、恰度音樂家が奏樂に先だち、一つ一つの糸に就て詳しきしらべをするやうに、彼女の同僚の一人、一人に就て、その生命の糸から流れ出る音色を興味の手にて調べて見た。その音は全體を通じてよく似通つていた。その一つ、一つを一時に鳴らしてよく調子は合つた。そして低いながら調和して見えた。その中に、たつた一本どうしても合はない、狂つた音を見出した。その糸は幾自身であつた。自分にとつては、不調和な空氣の裡に朝夕を送迎してゆく幾は、この間から薄々問題になつている『例の件』のことに就て思ふともなし考へた。若しか幾が圖書の擔任でなくして、手藝の方だとしたならば、何の問題にも成らないで直ちにその運命は自分の上に來るであろう。當局者はこの機會を利用して體よく免職の宣言をするであろう。幾自身もまたそれが當然だとも思へた。多くの教師の中で、この場の空氣の裡に最も融和しない、不調和な自分の影を明かに見ることの出來た幾は、それに最も適當した、多くの資格を具へていることを彼女自らも意識して居たからである。

幾はまた職を放たれた後の自分を一寸、想像して見た。

只單に幾自身のみの立場から觀れば、免職はさして恐いものとは思はなかつた。只、それに連鎖し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て起つてくる影響が少々面倒に思へた。無論、物質の方面にも困るけれど、この不足を補ふために、他に轉任先を探せば無いとは限らないけれど、こゝで苦い經驗をした頁(ページ)を、亦他の學校で再び繰り返そうとは思はなかつた。自分に不得手な仕事を、無理にしようとは思なんだ。若しものことがあつたならそのときは東京に出ようと考へた。然し出るにしてもさし當り困るのは生活費の出所である。三年前、父を失つた彼女の一家は、それから、いろんなことが起つて、いろんなことに散財して近頃は妙に不幸になつた。恩給や二三軒の貸家や、多くもあらぬ遺産によつて生きている母を思ふと、もうそこに物質の供給を仰ぐ勇氣はなかつた。

　六年前東京に出て、繪をやることになつてその道の專門學校を出てから三年近くなるけれど、何一つ思ふ半もかけない自分の腕を思ふと、繪によつて生計の道を立てゝ行くといふことは、たとひ生活の重荷に降伏して、俗流に墜落して、自分を嘲り乍らも繪を賣るような、そのような仕草に出ても、それによつて物質の供給の道を得るといふことは六ケ敷いものと思つた。

　幾は思つた。自分は、自分の世界を作つて自ら築き上げた、その國に遊んで居るより他には何にも能のない人間だと思つた。凡俗のする田舍敎師の職にすら、安全な椅子は得られないと思ふと、全く自分は世間的に迂遠(うゑん)な人間であると、つくづくそう思つた。また幾自身の平生から推して見ても解る、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

決して生活の急流にも拔手を切つてゆける人間じやない。そこへ行くと西などは偉い者だと思つた。幾の同期の友達に西といふのがあつた。この友達は、卒業すると、敎師になつて地方へ行くのはいやだから、斷然東京に居て繪をかくと言張つて、學校から廻された口も、わざわざ斷つて、一生懸命かいているが、今だに名も上らず、雜誌の口繪をかいたり、繪を賣たりして、二階住居を續けてゐるが、若しも幾がこの境遇になつたとしたならば、果して、どれ丈の仕事に耐へられるであらう、こう思つて見ると、この友が自分の藝術のために、生活と戰つているその姿が誠に勇ましくも見え出した。

けれども幾は、それがために、自分を情けない人間だとも思はなかつた。幾の輪廓だけを見ると恰も、世の中から追放せられた、敗北者とも見へた。けれど幾自身では世から放たれた人間とも、追はれた敗殘者とも思はなかつた。然したゞ敗殘の意味を、一般とは少々、その解釋を異にしていたが。

職を捨てゝ、懷手したまゝ、生活に無能の者が、日本國中、最も世智辛い、東京に出たなら、干物になるより外にあるまい。ミイラと成るか、それとも降伏して避難所に逃込むか、他に道はあるまい。

こう考へて來ると、母の懷に逃げてゆくより他にない、自分の古巣へ逃れるよりほかにはゆき所も無い。けれどもその最後の避難所と考へた故鄕(ふるさと)すら、今ではもう唯一の避難所として、安心して、急いでゆくような、所でもなくなつてしまつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之迄、幾の一家に對して、羨望の眼で觀ていた、妬からして、一種の反感を引ずつていた親族の或者は、幾の一家に對して、私かに呪つていた。わけの解らない、淺間敷い人達の裡に歸つてゆく、自分を一寸想像して見た。そして、免職の二字が、どんな風に、それ等の人達の頭に響くかを思つてみた。そして、この出來事に對しても、世間的に解釋し、判斷し、そして容易に不名譽を冠せてしまう人達を思つて見た。そして終に、日頃の反感からして、そこに復讐の、あさましい愉快を叫ぶに相違ない。

自分に對する何の理解も持たない人達に、事の眞相を知つてもろはうとは無論、思つて居ないけれどそのような冷たい、厭な、視線の亂射の裡に歸つてゆくのは不愉快に思つた。そんな人達から成立つている近處近邊の人々のおもはくや、冷嘲や、侮辱は、どうでもいゝとしても、何にも知らない、たつた一人の母の涙を見るのは辛かつた。心からつらいと思つた。

父の死後からしていろんな苦勞をかけた母に、またこの上に、しかも自分の事で憂を見せるのに、幾として心苦しく思つた。こんなことで故郷にもうつかりは歸れない。考へて見ると幾が最後に望を屬した唯一の避難所さへも、誠に頼りない地盤であつた。

もうこうなれば、幾にとつては、何處にも安かに身を寄す處もない、日本國中、どの面をのぞいて見ても、輝いた面を見出すことは出來ない、幾は急に世の中が挾くなりだしたような氣がした。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

僕はまた考へた。

何處に行つたつて同じことなら、自分には安心の光の射す國が無いとしたら、一そうのことに東京に行かうと思つた。何の職をも持たないで、懷手してゆく無方さは、好んでミイラに成りにゆくようなもんだ。僕は亦考へた。――そう容易に人間は餓死するもんじやない、そして僕自身の日頃の性格に徴して見ても、今日、パンに困るような事があつても、そんな方面には割合に、無頓着に、呑氣にゆけると考へた。そして僕はこの運命を比較的に氣樂に豫想した。そして、其時には東京に出よう、若しもの時には東京に行かうと決心した。肉體の苦痛は友達に慰めてもらおう、東京には僕にとつて、大切な友が居る。その東京に行かう。

行かう。行かう。

東京に行かう。

二

舊二月十日にはこの街では例年市があつた。その前日當りからは、植木を載せた馬車や、野菜を、山と積んだ車、馱馬の群が街道を、ぞろぞろ市場指して集つて來る。在の人達は所謂、お城のこの町に買

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

物に出掛けてくる。町の者で在に知人、縁者をもつ者は、この日は案内狀して、酒肴で迎ふるのがならはしとして居た。

夕食のため階下に降りた幾はそのまゝ縁端に出て。前庭を眺め入つた。梅と松とを狹く植へられた庭は、僅か一間許りを殘してあとは直ぐ池に落ちてゐる。池の水の盡くる向ふは桑畑に續いて梢の間から、馬蹄工場の亞鉛の塀がちらついて見えた。

池の水がけふも、鈍い灰色に光つている。

幾がこの間、日向の中で爪を截る鋏をかちやつかせ乍ら、雑巾刺してゐる宿のお婆さんに『どうです、ちと蓮でも植えて花でも咲かして見たら、何だか少し淋しいようじやありませんか』と云つたら、お婆さんは、眞面目な顔で『いいえ、あなた、蓮なぞ植えたら罪が當ります』と云つた。何故でと聞いたら、『昔、殿様のお堀でしたからね』と云つた。然し何故、殿樣のお堀へ蓮を植へるのがいけないか、それは解らなかつたけれども、蓮の代りに、お婆さんは、鯉を入れていた。暗い藍を透して、黒い魚の影が、幾つも、いくつも動いてゐる所を見ると、隨分這入つているに違ない。

けふも幾は、夢のように動く、水底の黒い影と、薄赤い影とを眺め乍ら、單純な信仰と幼稚な自信の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

中にしかも安心の光を見出して活きてゆくことの出來る人の上を思ふて、ぼんやりした。

考へて見ると四五年前の自分も、このように單純で、無邪氣であつたと思つた。女學校卒業の後、東京に出て、繪をかくようになつてから、少くとも自分を考へ初めた。その頃からして、ちよいちよい世の中の斷片が見え出したが、父の死からして、考へねばならないように自然と、よん所なくせられた。殊にその頃から、いろんな世の中の姿か、いろんな姿をして幾の前に現れてきた。そのいろんな世の象が幾の心をどんなに變へさせたことだらう。今でも昔面の往復丈けはしてゐる。山の家の從姉のことを思ふ毎に、小供であつた時の幾のことが、しみじみと懷しく思出される。昔ては、同じ道を歩調を合せて歩んできた從姉とは、僅か四五年の間に 二人は全く、別々の世界に呼吸づいてゐるかのように遠くなつてしまつた。昔ては、心と心とが抱合つて、自分の爲めに泣いてくれた從姉も、もう今では幾のほんとうの心持を解く事は出來ない。今の幾の心持を、赤裸々に從姉の前に投げ出したら、從姉は驚くだろうか。それとも或はそれを意識する丈の神經さへ無くて、感違ひの讚詞を云ふかも知れない。

とに角、父の死後からして、その刺戟や、周圍の事情からして幾の心は少からぬ變り樣をした。一家の長女として周圍から强ひられた責任、――幾を中心にして打寄せてくる、女浪、男浪の象を、幾は只

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

じつと見詰めた。

打よする浪を苦しく意識し乍らも、幾はどうしても、思切つて俗物に、全く落ちてゆくことは出來なかつた。

けれども時にはこう思んでもなかつた。自分が思切つて無智であつたなら、何にも知らないでそれで濟んだかも知れない。反つて幸福であつたかも知れない。山の家の従姉と等しく、普通の一遍の女性として、自らお目出度い劇を作つて、五十年を喜劇の幕に降してゆかれたかも知れなかつたけれど。

幾はうつら、うつら、うつらと自分の土をたどつた。

そこへ、同僚の竹村が、夕暮のような色した、縞セルのコートを細長く着流してきた。そして之から、散歩がてらに市見物に行かうと誘つた。

竹村はよく幾のとこへ遊びに來る友達である。幾が初めての當直の折なぞは、わざわざ幾の爲めに殘つて居て一所に見廻つて呉れたりした。未だここに來てから日の薄い、この邊の消息に慴れぬ幾のために、小まめに働いて呉れる竹村が甚だ重寶だつた。二人は心の底から打解けたとはゆかない迄も、互に氣兼しない、遠慮のない友達同志になつた。

幾の國の熊本からは、よく名産の朝鮮飴や、肥後米の燒米なぞ送つてきた。當直の折などは、同僚の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

野田を呼んで、三人して飴をつゝき乍ら、その日の不平だつたことや、教授上の失敗談などよくした。

『風を引くといけないから、もう一枚重ねてから、とに角、二階にお上んなさい』

こう云つても、竹村は『えゝ』といつて、やつぱり縁端に腰かけて待つていた。

恰度野田の下宿の前を通つたので、ついでに誘つて、三人して歩いた。

二月も終りと云つても、こゝの朝晩はうそ寒かつた。野田は白いショールの中に首を埋めて歩いた。

市はこゝの目抜の街、大通りで開かれた。

街の兩側に並んだ店、それは色々、種々であつた。雑誌講談物を擴げた店、植木を賣る店、農具や、野菜を積んだ店、小間物を飾つた店、刄物を並べた店、風車、起上り達摩を賣る店、店はそれからそれへと續いた。安石油の鼻ぐるカンテラの炎は四方の空氣を赤く爛かして、油煙の臭ひは市場一ぱいに漲つた。

角で原料も知れない天麩羅を燒いていると、向ふで、士（さむらひ）が銀の刄を振つて、赤い振袖の女を斬らうとしてゐる繪看板を掲げた、のぞき眼鏡が調子のいゝ小唄に幼い群を集めてゐる。と四辻では、蝦蟇の形を染め拔いた幕を脊景に、蝦蟇の膩賣の居合師が、今腕を斬うと身がまへした姿が群集の頭の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

上から見えた。カンテラの光に照された赭ら顔が凄く見えた。蝦蟇の膩の効能は、切り傷、火傷に、噛の痛み、……地の底からでもするような、不思議な、饒舌が、憂欝な渦を巻いて、氣味惡く人を追掛けるように聞えて來る。暫の後、刃渡り二尺が寒く腕の上で凄く光つた、血……二人は恰も物の化に襲れたように、あわてゝその前を去つた。

夜に這入つて人出は益々密になつた。雨後の路は惡かつた。所々の凹みの水溜りには灯の光が映つてゐる。幾は足元に許り氣をとられてごちやごちやした中を夢心地で歩いた。次の十字街路に出る迄に、すつかり二人とも醉つたように疲れてしまつた。

そこからは竹村の下宿は遠くはなかつた。竹村は、何とか彼とか云つて二人を連れて行かうとした幾も疲れているので、竹村の言ふがまゝについて行つた。

二階では同宿の山田が竹村の留守を幸に、ヴアイオリンをきいきい鳴らしていたが梯子に足音がしたので直ぐ止めてしまつた。

山田と思つたのは、それは英語の藤本であつた。『ダニーユブ河の小波』と云ふ譜が擴げてあつた。傍には茶器や、餅菓子などが置かれてあつた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

三人が這入つてから室内は一層賑かになつた。

『あゝ、すつかり疲れてしまつた』

こう云つて竹村はぺつたりそこに座つた。

『何にも見るようなものは無いでしよう。私も去年いつて、凝々したわ——起上りに風車ですが、あの賣聲が甘い調子にいつているんですね、——オテヤがりに風車、々々々々々々々……』

と音樂の山田は甘い具合に眞似た。

『藤本さん、何か聞かして下さらない』

こう云つて野田は茶碗を口にげた。

『ほーら山田さん、何か聞かして下さいですこ』

藤本が云ふのを、山田は『えゝ』といつたぎり、やつぱり別なことを饒舌つていた。

『本田さん、近頃生徒がみなさんのことを歌に作つてうたつてゐることを知ていらして』

『いゝえ、知りませんよ』

『へえ、未だご存じないの、三年なんかでは随分盛んですつて』

『うたつて、どんなうたです』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と野田が云つた。

『ねえ、こんな文句なの、そらあの『はじめに人は酒を呑む』つていふのがあるでしよう、あの譜でうたうんですつて、そりや皮肉なの……一ッ貧血清水さん、二ッ膨れの下川さん、三ッ見事の眼鏡さん……』

と云かけたとき、竹村は、

『それは藤本さんのことでしよう』

と笑つた

『まあ聞いていらしやい、まだあとがあるから……そしてねそこん所へ、ひかり、ひかり……て云ふ文句を入れるんですつて。それから、四ッよごれの野田先生……』

『まあ、ひどい生徒ですこと』

こう云つて野田は笑つた。みんな笑つた。

『五ッ怒りの花林糖(カリント)さん……』

『その花林糖(カリント)はきつと私のことよ』

と竹村がいつた。すると山田は、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

『私のことですよ、私はどしん、どしん叱りつけるんだから』
『六ッむつかし唐變木。七つ情けの安達さん。八つ優しき谷口さん。九つこまいが井上さん。ちよろり、ちよろり……』
『へえ、どうも驚いた、何でしたつけね、そう、六ッ六ケ敷しさいふのは私のことなんでしよう、……唐變木、！へえどうも驚いた』
僕は少からず驚いた調子で云つた。竹村は
『まあ、ひどい生徒ですねえ』
こう云つて山田の方を見た。がまた
『第一、先生のことなぞ歌作つて唄うなんていけないことね、隨分な生徒ですね』
と少しおこつた調子でこういつた。
『今度の三年は隨分やるんですからね、それに第一、淺井とか、橋本なんてやり手が揃つてゐるんですから適ひませんよ』
山田がこう云ふ後について直ぐ野田は云つた。
『どうしてあの組はあんなでしよう、私の授業のときなんか騷いで仕樣がありませんよ、ほんとに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

困つちまう』
『そうですね、みんなちやきちやきして居るんですね、然し何ですね、あの級(クラス)は、おきやんの代りに敎へては、一番敎へがいはあるようですね、英語の時なんか質問は一番出ますようですよ、發音なんぞも一番はつきりしているようです』
と藤本がいつた。
『今度いつたら、うんと叱つてやりませう』
と山田が云つた。
『でもいゝですね、あんな歌なんかうたつていられるうちは』
こう云つて幾は冷かゝつた茶を啜つた。
九時の聲を聞いて幾は、藤本と、野田と一所に連立つて出た。
下宿に歸つて見ると、市の客で酒が出て、うち中は賑かであつた。お神は赤くなつていたが、幾の歸つてきた姿を見るといきなり、
『もう本田さア、お歸りになつたす、大變お早ですな、風車はお買ひになつたす』
『いゝえ、何にも』

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こう言つてとんとん二階へ上つていつた。

三

その日は第一の水曜日なので例の講演會で晩くなつた。退け際に竹村は幾の机の傍にきて

『けふ夕方からいらつしやい、山田さんもいらつしやらないから』

『だつて山田さんは病氣じやなくて』

幾は朝の掲示板の白墨文字を思出してこう言つた。

『いゝご病氣なのよ』

やゝ笑かけた口元を幾の耳近く持つてきて

『お留守なのよ』

と云つた。幾は一寸變に思つた。そして何か聞こうとしたとき、そこへ書記の山中が來て

『本田さんに教科書のことで本屋から電話です』

幾はとうとう要領を得ずに別れてしまつた。

竹村の下宿に行くのに同宿の山田に多少氣を置いていた幾はその夕は晩食をすますと直ぐ出掛け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ていつた。
幾が梯子の上り口に立つた時竹村は火燵の櫓の上で裁縫のノートに眼を露していたが幾が這入つて來るのを見ると、ぱつたり頁をふせた。そしてにつこりした。
『待つていたのよ』
竹村は座蒲團を幾の方に押しやつた。
『さつきは眠たかつたでしよう』
『講話會のとき？』
『えゝ』
竹村は幾が會場でした欠伸を數へていた。
『時に山田さんはどうなさいました』
幾は思出したよもに聞いた。
竹村はにやにや笑つた。山田は病氣ではなかつた。竹村の話では昨夜東京から山田の夫が來て、それで二人は近所の町の温泉の宿に出掛けていつたそうであつた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

『いゝご病氣なのよ』

こう云つて竹村はまた笑つた。

『どうりで、けふの病缺は可笑しいと思つた』

儂も笑ひかけた。

『そしてねもうこの間からそのようなお話で持ち切りなのよ、そりあもう可笑しい位なの私、耳にたこの出來る位きかされたわ』

『私ならもつと話さしてあげるけれど』

『だけど隨分聞きつらいことよ』

『そんなもんでしようか』

『そんなもんでしようかつて、まあいゝから聞いていらつしやい、てね、三田の學校を卒業なすつた方ですつて、……そう偉くもないわね、でね私がいゝ加減に聞いているのに眞面目になつて一生懸命にお話なさるのよ。そしてこの春ぎり山田さんもおよしになつてご一所に東京にお住居になるような事を云つていらしたの。やつはし何でしようね、あんなことは誰にも話したくて仕方がないもんでしようね』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

『するとわれわれはまた時間の補缺が廻つて來るんですね』
こう云つて幾は笑つた。
山田の机の上には灰色の毛糸でシャツを編みかけたのが乘けてあつた。その編針の一本は幾の座つている疊近く轉げてゐた。
竹村は拾ひ上げ乍ら
『あんまり急いでお出なので、出しつ放しにいつちまつたわ。おや珠が離れてる。またおこられるといけない』
こう云つて、さも大事そうに机の上に上げた。
『この頃もやるんですか』
『やるつて、えゝ、ちつとも面白かないわ、それもさつぱりとやるのならいゝけれどお互いに心の中ですることなのだからなほ氣持がよかないわ』
『出ておしまいになつたらどう』
『そうされて、それもあなたならいゝでしようけれど、私にはとても駄目ですわ』
幾は少々竹村が氣の毒になつた。幾は默て向ふの唐紙を見た。そこには竹村の机が薄暗く、うづくま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つてゐる。こちらの光線の豐富に落ちてくる窓側には山田の机が大きく据へられて、十分に强者の位置を說明してゐる。

けれども負け厭な竹村はいつも勝氣な眉をぴくつかせていた。

彼女は妙に不幸であつた。

彼女自らも自分の實力がどの位のものか、それを知らないではなかつたけれども、强い彼女の自尊心は兎角その實力以上の所へ飛越て行きたがつた。彼女はまたどんな時でも負ける事はいやだつた。負けて居たくなかつた。自分の短所を見られまい、缺所を衝かれまいとした。そんなところからして周圍から笑はれまいとする、殆ど反抗に近い瘦我慢の苦しい努力を續けていた。斯うした彼女の負嫌な、その哀しい努力に依て支へられていた彼女の才智なり、實力なりが、何事か不意の出來事のある度每に暴露してゆく時、かゝる時自分のその醜い影を隱さんとして、そこに儚い苦闘を續けてゐた。

彼女は妙に不幸であつた。

嘗て他からとや斯、評されたとき、いつ迄もその不愉快が頭から消えなかつたいつ迄も忘れてしまうことが出來ぬ人知れぬ苦痛な神經を持つていた。

僕は竹村のことを考へ乍ら又、尖つた神經を持つ山田の性格を思つた。そして暗がりで火花を散ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

して切り結んでいる二人の姿を一寸想像して見た。……二人は同じ室に、然も別々に生き別々なことを考へてゐる。ありふれた、女同志の氣まづい感情を表面丈、美しい眞綿に包んで、互に不愉快な日送りをしてゐるのだ。そして相互を知れば知る程に不幸である。僕はこのふたりが大變氣の毒に思つた。

僕はふと學生時代の寄宿舍生活の當時を思出した。ついこゝに來る前、川瀨といふ友達と二人で二學期間ばかり、舍の六疊に過したことがあつた。僕はこの川瀨を好いていた。ごく氣の置けない、その淡白な感じが大變僕にはなつかしいものに思つた。そしてどんな時でも二人の感情は融和せられ、美しい情緒は流れていた。そして當時のふたりは境とか、區域とか、こんな字を用ふことをひどく嫌つたもんだ。日用品などはごつちやにして二人して使つた。自然室内は亂雜を極めた。そのため舍監との交渉は他の室より多かつた。又それが反つて得意であつた。終ひに川瀨はこんなことを云出した。『温い室程室内は亂雜なものだ。又感情の解け合はない室程整頓してゆくもんだ。何故つて氣が合はないと自分々々の机の廻り許り片付けてゆくようになつてゆくからね』終ひに川瀨は『亂雜の美』など云つて舍の者を煙に卷いて喜んでいた。

その整頓しない亂雜な室が大變懷しい、いゝものに見え出した。そしてその對象の川瀨の人となり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が甚だ懐しく思はれた。

竹村は起つて手箱から寫眞を取出して見せた。そこにはふだんよく『兄さん』といつている男の半身のもあつた。眼尻の稍、昴り氣味な所は、竹村の兄と思はせるけれども、顔の輪廓は似もつかなかつた。竹村の鋭く尖つて見ゆる顎に對し、之はむしろ圓く見せた。幾はこの影を眺め乍ら、二人の間に血が流れた兄妹とはどうしても思へなかつた。幾は竹村が言ふ、『兄さん』の意味解した。そしてそこに興味をもちかけた。

そこには又、山田のもあつた。

山田の茶色がかつた大きな眼、よく物を見詰めるとき、自然瞳が坐つてきて、何處かに神經質な輝きが具つてくる眼と、少し縮では居るが黒漆のような髪が白い額に殊に黒く見する前髪と、蝦蟇口の金具のように冷たく結んだ薄い唇とが幾の前に浮んできた。

四

どこへ行つたつて面白いことはないが、けふは竹村の當直なので、せめてぼんやり遊ぶつもりで學

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

校へ出掛けていつた。

當直室の厚い扉を叩くと、暫くして内から『いらつしやい』と幽かな聲がした。

『おや、あなただつたの、どなたか知らと思つたら』

『驚かしてすまなかつたわね……髪洗つたの』

『ええ』

『校長に見つかつたら後がめんどうでしよう』

『なに、皆さんがなさるのよ。どうせ何にもすることはないから』

頭痛がしていけないと云つて竹村は傍の椿油の瓶をとり上げた。頭痛持ちの竹村は、髪洗つた後、まだ生干（なまかはき）のうちに油を注さないと頭が痛むくせがあつた。

竹村はエメラルド色した液を白い。薄い掌の上に垂らした。フンと強い香が鼻を衝く。

『本田さん、一寸失禮しますわ』

こう云つて竹村に櫛をとり上げた。

『えゝ、ごゆつくり』

幾は傍にあつた地方新聞をとり上げた。何にも眼にとまる記事は一つもなかつた。幾は寂しいその

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

頁から眼を離して鏡の底に動く、竹村の白い手と、面白い程自由になる柔かな前髪とに見入つた。竹村の髪は黒い方ではないが、それでも新しく油を注いだ所を見ると澤々して美しかつた眼はごちうかと云へば、細長いきれの長い方で稍眼尻は昂つて見えた。それが兩手を頭の上に廻して、前髪を結ぶ時には一層昂つて見えた。

『本田さんはいゝですね、いつもゆつたりとして居らして、私なんか、毎日毎日仕事に追はれてつまらないわ』

『あなたが羨む程呑氣でもないけれども、仕事したつて、つまらないから、かうして遊んでゐるの』

『全くつまらないわ、この夏こそは私も勉强しますわ、何でも早く文部の撿定がなくつては、だめなんですからね』

『もう少し、自分の時間があるといゝけれども、かうすつかり勢力をとられてしまつては落付いて眞面目に考へてることなんぞ出來はしない、自分のことは元よりだが、他のことなぞ考へている時間はてんでありませんからね考へて見ると落付きのない、つまらないことばかりです』

『でも、いいじやありませんか、あなたなんか、ちやんと資格がおありですもの……』

幾は何か云はうとして口を窄めたとき、竹村の受持の生徒が大きな包をもつて這入つてきた。縫方

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に惡いところがあつたので見てもろうためである。

幾は初め遊ぶつもりでやつてきたが、來て見ると、こゝでこうして居ても別に面白いこともないしつまらないような氣がした。生徒がきてから自分を急ぎ立てゝ促すような感がしきりにした。幾はつまらなさと、物足りなさと心一ぱいに感じた。けれどもこの室を出て、他へ行く氣にもなれなかつた。けふの日曜を朝から、つまらなく過して來た惰力が、けふ一日を指配しているようで、下宿に歸つても、そのつまらなさが眼に見へる。この上に他の同僚を訪ねる氣にはなほなれなかつた。

幾は、じつと苦しい沈默を守つていた。

『どうも可笑しいですね、こう下へ置いて見ると何ともないのに、掛けて見ると、表が大變弛んで見える、變だこと』

幾は裏の紅絹の上に、やたらに動く竹村の白い指を夢心地で見つめていた。

『あゝ、やつと解りました、こゝん所がこんなになつているんですもの』

竹村は初めて笑つた。

生徒も辱しそうに、さし俯き乍ら笑つた。

『さあ、之でいゝでしよう』

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ふたりの生徒は感謝の色をした。

『川合さん、ピンポンしなくつて、吉田さんも』

ふたりは顔見合せて何やら頷いていた。竹村は立つて控所から、ラケットとボールとを持つてきた。

『ふたりで、勝負して居て、いらつしやい、今に私達も來ますから』

生徒はおじきをして出ていつた。

『追拂つてやつたの』

こう云つて竹村は、ずるい笑方をした。

竹村が止めるのを無理に幾は當直室を出た。午に近い太陽は曇つた空に薄ぼんやり照つてゐる。幾は、煮切らぬ日の中を足に任せて歩いた。

五

『私ね眞面目に話すのだからそのつもりで、終ひ迄、聞いて下さいよ、無論この場限りの話なんですよ』

『はあ、ようございます』

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

『それでは話します』と云つて竹村は、話の糸口を切つた。

『あなたが、いつも只の兄さんじや無いつてあげ足をとつて居た道尾のことね、やつはし、あなたのご感想の通りなんです』

『それごらんなさい』といふように幾の眼が少し笑ひかけた。

『あなたは未だ本當に聞いていらつしやらないのね』

『本當に聞いていますよ』

『何だか茶化していらつしやるのね』

『これが、私の眞面目なんですよ』

『そう、じや話しますが』と念を押して竹村は昔のことから、今日迄、兄との關係を順を追つて話し出した。

竹村の話ではその人とは小さい時からの約束であつた。彼女の父母は日本在來の習慣の下に、竹村も、道尾も幼い時、幼い者の上に運命の糸を結んでしまつた。彼女の兩親は、不幸福だつたと思ふ自分の經驗をまた、彼等の上に應用して、それで幸福だと思つた。

竹村の話を押すと、ふたりは幼い時分からよく一所に遊んだらしい、そして竹村が女學校に這入つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

てからも道尾からは、よくリーダを教はつたりしたらしい。その親しさはまるでほんとうの兄弟のようであつた。と竹村は云つた。

道尾が勉强の爲めといつて一時小石川の表町に下宿したことがあつたが、竹村はその下宿にもよく尋ねていつた。竹村の母は之に干渉しないのみか、むしろ二人を接近させた方であつた。その内に道尾は下宿のお神の妹と戀に落ちてしまつたそうである。竹村の話がこゝ迄進行したとき竹村は幾から質問を受けた。

『どんな女つて？　決して美しいといふ程じやない、まあ、十人並でしようよ、けれどハイカラな所があります、私も會つたことがありますがね、決して人をそらさない、私も話している内に好きになりました』

と云つた。そしてまた、

『道尾のあゝ迄迷つたのも、その女が思切つた氣象のはきはきした女であつた爲、男の爲めに力一ぱい押して出た、つきつめたその力が男の心を動かしたんじやなかろうか』と云つた。その女は大そうに賢い女であつたそうである。その賢い心の反映がその女をどんなに美しく見せたであろうそれ等のことがその女の魅力（チャート）の大なる原因じやなかろうかと竹村は自分の感想を述べた。竹村はな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ほ云つた。道尾があゝなつたのは私にもその責任はあるんです、私がほんとうに惡かつたんです、つまり私があゝさせたのも同じことなんです。

道尾は、戯談にこんなことを云つたことがあるんです『多少は生意氣でも、氣の利いた話せる女がいゝ、洒落の一つ位云うような氣輕な所があつてほしい。洒落を説明してやる位、不愉快なことはないつて云つていました。私はむしろ嚴格な、家庭に呼吸づいていました。私の母は、私に處生上の智識と、女として必要な一通りのことを敎へました。母は普通の女に只必要なことに意を注いだ丈で、その他の趣味の敎育には餘りに冷淡であつたのです。私が小説を讀むのを見るのさへ喜びませんでした。萬、經濟的に出來上つていた母を朝夕に見慣れた爲めか、私もだんだんこの母に似通つてきたんです。兄は常から私に物足りなく思つていたんですが、こんなところは殊にも喜びませんでした。今私が袴をつけてこんな生活をしているのも決して兄は喜んではいないのです。私はこの頃、兄の私に對するその物足りない感じその心持が解つて參りました。あの時分せめて今位に考があつたなら、兄にもあした氣まぐれな心を起させなくともすんだかも知れません。兄を救助することが出來たかも知れません。兄にはほんとうに氣の毒でした。考へて見ると皆私が惡かつたんです。私は心から兄にわびをして居ます。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

竹村は初めの内こそ控へ目な、憶病な調子であつたが、胸の底からこみ上げてくる、自然の恐しい力は何物をも押退けて突進む勢を示してきた。

初め幾は竹村からこんな調子で、こんな話を聞かうとは思はなかつた。多少西洋の小説にも親んできた彼女は普通一編の經路をとつた多くの戀愛、斯くして初まり、斯くして終る常套的な愛に對しては、彼女の頭は餘りに冷淡であつた。亦世間一般の人達が愛人に對して用ゆる、ありふれた態度と、使ひ古した臺詞に對しても餘り興味を引かなかつた程に一面に於ては、或意味での困憊していた。

幾は竹村の話に對しても決して好奇心の心を尖らしてはゐなかつた。けれどいつになく竹村に對して或同情の念を引起した。ふだん勝氣味な竹村のムードに對して、餘りいゝ氣持をもたなかつたのだが、此時は妙に竹村が大變優しく見え出した。そしてその心の何處やらには、女性の弱々しい、美しいものを見出した。やつぱり女は美しい、優しいものだと思つた。殊に吾が愛する男に前に泣く時の女の心、それは筆ぶに忍び得ない程に優しいものだと思つた。幾はいつになく竹村の纖弱なその胸を抱きしめてやりたいような氣がした。幾は竹村の話を、もう一度、自分で敷衍して見た。そしてその言葉の端まで詳しく解剖して見た。それから今度は、竹村と道尾との幼い昔のページに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

逆つて見た。可なり想像に蕃殖力の强いものを頭に植付けている幾は、自ら作り上げた劇の、初の頁から、その一枚一枚を丁寧に翫味して見た。幾はふと。

『私共は幼い時からの仲好でしたのに、そして二人とも安心し切つていたんですのに』

こう云つた竹村の言葉を見出した。それが不思議にも、この劇しい、壓卷の名聞のように幾の頭に響いた。

幾は短かいこの言葉を敷衍し乍ら考へた。

彼等ふたりは幼いときから一所に兄妹のようにしてきた、その惰力は、その成長の後迄も續いていた。その情味は全くほんとうの兄妹的のものと異らなかつた。彼等は益々接近し、益々接近して親しかつた。けれ共、同時に又、お互を餘りに知り過ぎてしまつた。その親しさは互に安心し切つた親しさであつて愛の生活に、最も必要な性の引力はだんだん彼等を遠退いてしまつた。馴るれば馴るゝ程に性の感覺は失はれた。戀情的の衝動の血はだんだん彼等の胸を遠退いた。道尾の眼に映る竹村は、愛人としての女でなく、妹としての女であつた。竹村の眼に映る道尾は愛人としての道尾でなく、兄としての道尾であつた。戀情的のチャームは日々に互に失はれて行つた。彼等の面會の時一度も心臟の皷動を高くして會つたことは嘗てなかつた。ふたりは接近すればする程愛の生活

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に於ては不幸なのである。それだのに、彼女の母は反つて之を接近させた。母はそうすることが幸福だと考へた。その衷に矛盾のあることには思及ばなかつた。この哀しい矛盾が、この悲劇を作つた因じやなからうかと幾は考へた。

道尾と、竹村は長い間、この冷たい脊景の中で、いつ迄もいつ迄も同じことを繰り返して。こゝで幾は自ら築き上げた舞臺を廻して見た。變つた舞臺に華々しい今迄にない、春の舞臺であつた。春の舞臺を初めて踏んだ道尾は初めて華かな世界に眼をまたゝいた。新らしく展げられた春の自然に心身を醉はした。

恰度そこに、第二の女が登場した。第一の女の冷たい衣を着いいたのに變つてこの女は華々しい衣服をつけていた。そしてその眼に寶そうに輝いている。

幾の頭がこゝ迄考へてきたとき、幾の眼には。道尾と、第二の女とが抱擁してゐるシーンを明かに浮べた。そして考へた。

道尾が長い間、竹村に求めて、之を竹村に求め得なかつた氣分を、この第二の女に於て初めて見出して相愛するようになつたんじやなからうか。こう思及んだとき、そこには無理もない、最も自然の力だと幾の頭に認識した。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

幾は道尾に同情した。また一面に於て竹村を氣の毒に思つた。幾が竹村に對して交渉をつけていた全體を通してこの時程痛ましく眺めたことはなかつた、跡で彼女か免職になつたことを聞いた時よりも、より多く、氣の毒に思つた。幾は大變竹村が氣の毒になつたのでこう云つた。

『竹村さん、あなたの今の心のまゝを、兄さんにお話しになつたら、兄さんはあなたに對して、或良心をよび起くになるに違ない』

『でも』

と竹村は小さい聲で云つた。

幾は又云つた。

『そして、もう一所になる氣はないんですか。』

『…………』

『もう、すべて撤回してありますか』

『母があんな者は駄目だつてそう云ます』

「あなたのお心がです』

『私……』と云かけて、暫く斷句していたが、軈て、突切るように。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

『もう、ひとりでいますわ』

とつぶやくように竹村は云つた。

六

近頃幾は心の中に渦巻を感じ初めた。何をしても、何を見てもいらいらしてくる。幾は今自分は落付いてゐないと思つた、そして强いて落付こうと努めた。けれども中衡を失つた心は始終矛盾がにらめつこをしているような、そんな氣がしてならなかつた。何だか身體中にそんな不安な血が循つて居るようでならない。幾自身はこの變調を生活の變化からきた低氣壓とも思へた。この苦しい矛盾の裡に自分の影を明かに認めた。

けふの日曜も、朝からこんなことで有邪、無邪の裡に逝つてしまいそうである。

幾は起つて窓の所に立つた。直ぐその下には、濃い葛湯のそれのように、ちつとも動かない池の水はたゞ重たく湛へてゐる。鉛色した水の面の眞中には午に近い太陽が、ぼんやり映つている。幾は一種やる瀬ないような氣持でこの水面を眺めた。

午近くなつて野田が、敎授上の要件をもつてきた。用談をすまして幾は、どこぞに遊びに行きた

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いと言つた。すると野田は相變らず『そうですね』と煮切らぬ答をした。野田はいつもこのような返事をする人であつた。

『じやこゝで話をしましようけふはゆつくりいゝでしよう』

『そう遊んでも居られないけれども』

こう云ひ乍らも、それでも小一時間許り、話込んでいつた。野田の話は例によつて散漫な平凡なものであつた。竹村の話の角々に或る反感を感じながらも話としてはやつぱり竹村の方に面白味はあつた。けれども野田に對しては、竹村に求めてとても得られない、好い所があつた。野田と話すときには心の弦を弛めて話してゆくことが出來た。——恰度、ひさしの深い窓で、ふたりの閑人が、呑氣な茶を入れて話している、ゆつたりしたその態度を傍から見ているような心持………野田と話して幾はいつもそんな感がしてならなかつた。野田對、幾の話にいつも落付いた、ゆつくりした、話が出來た。實に平凡でいゝ、この平凡が幾には有難かつた。

幾は、けふも野田の話を聞いている内に、二三ケ所新らしい事柄を見付け出した。それは近頃目立つて、校長室と、縣廳との書面の往復が烈しくなつてきたといふことゝ、この間裁縫の打合の會上で、竹村が敎授上の過失………それは、取上げて云べき程でもないとるに足らんことであり乍ら

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

わざわざ、その席上に持出されたといふ事、それから引いて裁縫科の同僚間に、不穩な雲がかゝつているといふ。とに角、何か事實の前兆が眼の前に擴げられんとしているといことであつた。

下で午餐の燒魚しているらしく、膩の燃ゆる音と、肉の燒ける臭とが一所になつて、梯子を傳ふて二階に昇つてきた。野田はこの臭を嗅ぐと、急に思出したように歸つて行つた。野田の歸つた二階で幾は獨り考へた。竹村のことを考へた。

野田から話を聞いた時、下らないと思つたが今考へて見るとそこには何か魂膽があるように思へる、あれ位のことでわざわざ打合せの席上に持出すにも當らないと思れたのは、それは方便であつた。わざわざ問題を作るその方便であつた。それは竹村が敏捷と迄はない迄も、小まめに働き得る竹村、技術に於ても一人前の竹村であつたから故意に問題を作つて、免職の運びを竹村に依て解決してしまふ、その準備らしく幾にはそう受とれた。そして、どこ迄も、けちを付けたがる人間の最も不愉快な缺點を見せつけられたようで甚だそれが不快に思へた。

幾は豫め想つた。來たらんとする事件のすぐ前に擴げられんとしてゐるのを知つた。そして、將に來らんとする運命の絡を握らんとしてゐる竹村を甚だ氣の毒に思つた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

七

卒業式も愈々あすと迄押し詰つてきた。職員の廊下を走るようにして歩いている樣は、いかにも忙しさうに見えた。

裝飾の方に監督していた幾は、そのあら方をしまつて控所に行つた。そして疲れて、ぼんやり食後の椅子に寄つている後から『ちよつと』肩を突かれて、振り返つて封筒持つて立つている竹村を見た。只事でない竹村の樣子を幾の神經はすぐ肯つた。

『今ね、私の母校からこんなことを云つてきたの』

竹村の言葉は急であつた。

手紙の意味は、今度、あなたの學校には補習科がなくなるようだが就ては少し相談したいことがあるから至急歸國してくれといつている。幾は用箋の文字をしげしげと見ている内に、甚だ竹村に對して氣の毒に思つた。心を暗くした幾は一寸返事に困つた。竹村の顏は、返事を待たさるれば待さるゝ程、不安の色が見えてきた。

竹村は幾を促すように

『つまりこゝに在る必がなくなるから、歸つて來いといふことなんでしよう』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「そ丶、そうですね、そして母校の方からどこかに、また起任地を世話するといふ意味なんですね」
『だつて、おかしいじやありませんか、母校の方からこんなことを私に云つてくるなんて』
幾はこの裏面にきつと何があると思つた。こちらの學校から、竹村の母校に頼んで間接に宣言してもらつたと思へば思はれんでもないけれど幾は迷つた。そこへ山田が來合せたので
『山田さんにも伺つてごらんなさい、他に解釋もあるかも知れないから』
竹村は山田を誘つて隣りの圖書室に這入つた。
式場の飾付をもう一遍見廻つて又控所に歸つたが竹村のことが氣になつて妙に落付かれなかつた。幾は立ち上つて圖書室の前の廊下を通つた。南窓の硝子戸より落ちてくる午後の光線は。半透明な硝子障子を透して、山田と、竹村との二人の影を朧乍らも映出した。そして山田の前にうなだれて泣いている竹村の姿が、はつきり見え出した。幾はいきなり飛込たかつた、けれどまた躇つたこの場合この會話の最中に、突然飛込んでい丶ものか、一寸迷つた、硝子戸の握手に、手を掛け乍らも躊巡した。
午後の控室の空氣は穩かでなかつた。竹村を圍んだ一群、こつちにも一群と輪を作つて何かを話

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

してゐる女敎師達の態度が、男敎師の眼には、穩かならず見えた。
軈て竹村は、校長室に呼ばれた。
五分間許りの後、竹村は校長室を出てきた、竹村は何とも答へなかつた。さつき迄涙に濡れてゐた眼は、干切つて、きちつとしてゐる瞳も動かさないで、たゞ無念さうに前方を烈しく見つめてゐる。顏面の凡ての筋肉は緊張し、口は堅く結んでゐる。
他の顏の或る者は、氣づかはしげにはらはらしてゐる。或るものゝ顏は自分がその運命をつかんだやうに恐に慄へてゐる。然しそれは瞬間であつた、竹村の强い烈しい表情が漸く和いできたと見るまに、前に折られたやうに首を曲げたと同時に、今迄張りつめてゐた感情が一時に涙管の關を越えてぼたぼたと、紫紺の袴の上にこぼれた。
竹村はヒステリーの發作のやうに泣いた。
『私、ほんとうにどうしましよう……母に……母に……』
斷へ、斷へな句が涙の暇を綴つて聞える。
十分の同情は持ち乍らも、何と慰めやうもなさに人々は顏見合せて、氣の毒さうな色をした。竹村はなほ泣いた。人々は竹村の發作の靜るを待つより外になかつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

『みんな私が惡かつたんです、足らなかつたからなんです』
こう云つてなほ泣いた。
この時一番年長者の谷口は言つた。
『決してそんなことはないんですよ……學校の方でも、あなたが一番さしつかへのない境遇だからこそ、お考へになつたから、きつとさうなさつたんでしよう。そして母校の方では、あなたを世話するといふんじやありませんかね、きつと、どこかに世話して下さるに違ない、惡かつたとか、好かつたとかそんなことはない。また、あなただつて何にも過があつた覺えはなし、そんな譯はちつともないから、安心していゝでしよう』
竹村はなほ眼からハンカチを離さなかつた。野田は慰め顔に、後から髮のほつれを、かき上げてやつた。
谷口は又、老巧な句調で云つた。
『とに角、宿へお歸りになつたらいゝでしよう、もう何にもすることもないのだから、そしてお家にも電報うつて置きになつたらいゝでしよう、そして、手紙ででもよく云つてお上げなさい、過ちがあつて退せらるゝのとは違ふから、不名譽でも、何でもないんですからね、ようく、そこん處を言つてお

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

上げなさい。――山田さんも、どうです、ご一所にお歸りになつては』

山田は竹村と一所に歸つていつた。

八

その翌日は卒業式で一日ごたごたした。

山田は幾の顏を見るとすぐ

『昨夜は、失禮しましたね、折角いらして下さつたのに。恰度、竹村さんと二人で長さんのところへ行つたもんですからね――けれど竹村さんは大變嬉んでいらつしやいましたよ』

山田は何か話したいやうに見へたが、ごた、ごたで落付けなかつた。飾付けた製作品の後始末や記念の撮影をして、凡てを終つた頃もう午後三時に近い、太陽は旣に西へ傾いてゐた。

退け際に山田はこんなことを話した。昨夜あれから校長と、首席とを尋ねて、駄目を押し乍らも、もう一度留任を願つて見た。無論之には初から望をもたなかつたけれど、それが出來なければ、どこぞへ轉任をお願して見た。けれども之は不得要領に終つてしまつた。もうすべてこゝではだめだらうと悄然と言つた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

『ア、それから昨日校長室でのお話ね、まあこうなんですつて………お噂では今度お退きになるさうなんですが………ですつて、ね、随分ひどいではありませんか』

こう云つて山田は神經質な濃い眉を、迫つた額にびくつかせた。

『へえ………』

『でもこゝの學校から、さう云つておやりになつたんじやありませんか、ちやんとご存じじやありませんか』

『えゝ、そこん所がですよ、ねえ、學校の都合が惡いから、こんな事情でと、正面からお話しになつたらいゝじやありませんか、それを母校の方に頼んで、あちらの校長に云はしてそんなことを云はれちやね、誰だつていゝ氣持はしませんからね、あれが若しか男同志であつてごらんなさい、直ぐその場で喧嘩ですわ』

『何にしても面白かありませんね、やり方が、それに今度のことはずーツと前から知れてる事なんでしよう、ですからこんなことなら竹村さんにも話して置きになつた方が竹村さんだつて都合もおありでしようよ、話して置いたつて別に差つかへることもないやうぢやありませんか。その代り學校の方でも出來る丈の運動もして見樣、こう云はるればね、同じ出るにしても、ゆく方だつて快よく出

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て行くじやありませんか。それにこんなに切迫してから、突然言渡されると實際まごつきますから
ね』
こう藤本も云つた。
『全てゆく方の心持に對して、同情が少ないですね』
叢もこう云つた。
この處致に對して、無論、反感と、憎惡と有り乍らも心から、眞劍になつて憤つたといふのではない
けれども、誘はるゝやうに唆かさるゝやうに、恰度けしかけられた、藝づいた犬のそれのやうに一種
の調子づいてきた。
『一體竹村さんに限らずです、退せらるゝときにはみんなあんな風なんでしよう』
調子に乘つたやうにして云つてしまつた山田の話を追かけて、
『冷たいもんですね、私共だつて安心してはゐられませんわ、いつどんなに間違かも知れませんか
らね』
藤本は皮肉な口を切つた。
『情ない話です』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

こう云つて山田はさし俯いた。

若い連中が餘り激するので谷口は云つた。

『けふ首席の先生のお話では、新學期から、補習科がなくなることになつたので、自然職員の方にも一人餘りがくる。それで學校の方でも隨分と運動もして見なすつたんですつて、だけど、みんな口が塞つてゐたさうなんですよ。何にしても一人は泣せなければならないんですからね、考へて見ると校長さんだつて實際おつらいでしようよ………なに、きのふ校長室でのお話、………そのときには校長さんも蟲の置所をどうかなすつていらつしやつたんでしようよ。まあ、考へてご覧なさい、こんな時上に立つ方は隨分とおつらいでしようよ』

九

歸路をたどり乍ら、幾は不愉快でならなかつた。折角慕つてきた、山の國の、小さいこの街にも、やつぱり人間社會の煩しさが渦をまいてゐる。幾はやつと第一の渦から拔けるよりも早く、第二の渦に卷込まれたかのやうな氣がした。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

竹村が愈々、立つといふその日、用達に外出して歸つて來ると、宿のお神は、留守に、清水といふ同僚が尋ねてきたといふことを話した。何か用事でもあつたのかと尋ねたらそこははつきりしなかつた『それじや、また、いらつしやるんですね』と念を押した。

『えゝ、歸りさあ、亦、お寄りになるとのことでした』

幾は二階へ上つた。

この清水といふ同僚は、いつも一番奥まつた、理化の準備室に、大きなテーブルを据へて北窓から落ちてくる、物靜かな白い光線を眞面から受けて、よく敎材の掛圖をかいてゐるのが常であつた。空時間の時でも控所の清水の椅子丈けは空いてゐる事が多かつた。清水は控所での笑話や、同僚間の交際などには、餘り頓着しなかつた。で或者は冷淡だとも評した。或者は彼女がクリスチヤンなるがためだとも云つた。清水がチヤーチに出入するのは事實であつた。けれども、それがために控所の空氣と融和しなかつたとは思へなかつた。幾に云はせると、冷淡、無頓着と云はんよりむしろ同僚間です る笑話に、餘り興味をもつて居なかつたやうに幾には清水の態度がさうとれた。

よく理化室の前を通ることがあるが、KATIN, KATIN 試驗管のかち合ふ音や、玻璃の器で、藥品

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

をすりつぶす KOSHIN, KOSHIN いふ音が、窓の曇り硝子を透して聞えた。
僕が時おりのぞく折があるが、いつも閑靜な色の着物をきた淸水は、名も知られぬ、黄色い藥品や、水色の藥を、玻璃の器に入れてじつと見つめていたりした。そしてちつとも俗惡のない氣分が僕にはうれしかつた。いつとはなしにこの敎室が好いものになつた。頭がくさくさすると、こゝに這入つて青灰色の壁に對して十分間もゐると妙に心が靜かになつてくる。僕は妙な所に靈の避難所を見付け出した。
僕はよくこの敎室に這入つた。淸水は別に話しといふ話はしなかつたけれども、快よく僕を迎へてくれた。それでも時とすると、僕には想像もつかない不可思議な力をもつ科學(サイエンス)の話をして煙に卷いたりした。僕には又、それが耳新らしく、物珍らしかつた。
淸水が理化に要する掛圖などかいてゐる所へ來合することがあると、『少し加勢おし』などゝ云つた。そして淸水はよく云つた。
『本田さんがかくと理科の說明圖でも、繪になつてしまうんですね』
など云つた。
僕は淸水のことを思浮べ乍ら、心まちに、待たれた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

儂はけふ初めて、南の窓に早咲きの白椿の小さな、蕾を見つけた。もう一週間もしたら、白い花が開くに相違ない。儂はその白い花が美しく咲くときを思つて見た。竹村の去つた後で開くこの花を思つて見た。そしてこの椿咲く窓で、しんみりと考へて見様、こう思つてぼんやりしてゐる所へ、清水は再び尋ねてきた。

『いゝ二階ですね』

清水は一寸見廻した。柱や、敷居や、天井は舊い乍らも、宿のお神は閑に任せて、毎日澤雑巾をかけるので澤々光つて見えた。

『毎朝、澤雑巾迄かけますので、梯子の段なんな、つるつるして危いんですよ』

之を聞くと清水はさも愉快さうに笑つた。そして暫くして後、眞面目な顔でこう云つた。

『竹村さんも、愈々、今晩ですね』

『えゝ、愈々』

『私だつて、いつそんなことがあるかも知れませんよ』

『まさか』と儂は否定した。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

『さう見えませんか』

『ないだらうと思ますか』

『えゝ、滅多なことはないでしようけれども』

といつて淸水は、之迄、自分の關係した、二三の學校に就て、知つた經驗や、事實を、例をあげて話し出した。

幾は淸水の話を聞いてゐる內に、果してこんなことが在り得べきかと迄、思ふやうな所が話の節々に見出された。そんなものが現代の敎育界かと迄疑はれた。敎育家かと疑はれた。それは根本に於て何の一般と撰ぶ所もない、俗流の水線を浮きつ、沈つしてゐる子子に異らなかつた。のみならず、敎育といふ淸淨な面を虛榮に被つてゐる丈に、なほ厭であつた。これらの人々の虛僞の手で祭りあげられた偶像………舊道德の影には恰度、襲踏的の油繪に見るやうな、氣味の惡い影がつきまとつてゐる。幾はまたこゝで醜なる一面を見せつけられた。淸水の話の悉くが事實でないにもせよ、敎育界の裏面を縫ふて流るゝ濁水を心私かに疑ずには居られなかつた。幾はこの沿岸を沿ふて流るゝ水の彼岸に起る反響を苦しくかつ痛ましく思つた。そしてこんな流れに跨つてゐる、現代の敎育界に危急の間に呻吟しつゝある樣を想像して見た。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

清水はなほ云つた。

『きのふ、竹村さんが荷を括つていらしたのを見乍らも、しきりとこんなことを思たんですよ、私の荷を括るようになるのも、近い内だか知れない、何だかそんな氣がしたんです』

幾は默つて清水の顔を見た。

『私は今からそんなことが思つて仕方がないんですよ………皮肉じやない、ほんとうにそんな氣がしてならないのです。本田さん私も近い内に行李を括るやうになるかも知ませんよ』

幾は、なほ默つてゐた。清水も暫く何とも云はなかつた。

この時下の、上り口の所で、誰やらが傘をたゝむ音がした。

『おや、雨ですか』

『えゝ、とうとう降つてきました』

幾は半ば開きかけた障子をぱつたり閉めた。

誰やら梯子を上つて來るものがあつた。それは竹村であつた。

『先刻、いらしたさうですが、失禮しました』

こう云つて竹村は幾を見た。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

『荷物は、すつかり形付いたんですか』
『えゝ、みんなもう、停車場の方へやつてしまいました』
『みなさんとこへも、お廻りなすつたんでしよう』
『えゝ』
『私のとこへもお出になつたんですか、遠い所を大變でしたわね、失禮しましたのね、だけどこゝでお目にかゝられたのだから、よかつたんですね』
と清水も云つた。
『愈々、お別れですね』
竹村は默つて俯いた、
『お母さんから何とか云つてきましたか』
『えゝ、早く歸つて來いと云つてきました』
沈默が續いた。雨は音をたてゝ降つてきた。
『アヽよく降りますこと』
『お別れの雨でしよう』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と小さい聲で清水がいつた。
また、沈默が續いた。
この時、清水は力の籠つた、そしてはつきりした聲で云つた。
『決して氣後れするには當りませんよ、まあ今度のことを興奮劑にして、ひと勉强しますさ、文部の檢定さへとつて置くとどんな所だつて行かれますからね。そんなにまたお若いじやありませんか』
勵ますように云つて、靜かに首を廻して、窓の外を眺めた。そこには大きな池が純い色に光つてゐた。
『よく降りますね』
『えゝ、よく降りますこと』
銀の雨は、灰色の水面一ぱいに降りしきつた。

十

夜に入つて、雨は益々密になつた。
雨に濡れたレールには、薄紫のアーク燈の光が悲しく垂れてゐた。まだ時間に早い待合室には人數

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

もまばらであつた。しようことなしに、そこらを歩いてゐる赤帽の靴の音が物靜かな音に響く。幾は停車場の太い柱にもたれ乍ら、構内を往來する鐵車の響や、笛の音を聞きつゝ心にある緊張を感じつゝ、只管に竹村が待たれた。軈て、丈の高い影が幾の傍に近付いてきた。それは清水であつた。

『まだ、どなたもお見になりませんか』

『えゝ、どなたも』

『今夜は机の前に座つて、私の室からお送するつもりでしたけれども、とうとう來ました』

こう云つて清水は寂しく笑つた。

『先刻あれから、まだお談になつたんですか』

『お母さんのお話を聞いてすつかり泣かされてしまいました。ほんとうに竹村さんは、お氣の毒なんです』

『お家の事情なんですか』

『えゝ、お母さんのことなんですがね、お母さんはなんですか大變竹村さんのことには心を遣つていらつしやるさうなんです、そして手紙には務は大事にしてくれと、いつもいつも云つてくるさうなんです、それに今度のことが起つたんですからね、竹村さんも心からお母さんに對しては泣いていら

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

つしやるのです』

云ひ終つて清水は銀側をぱちんと幾の頭の上で鳴らした。

そこへ藤本さ、山田さ、野田さが這入つてきた。續いて谷口も見えた。

『また竹村さんはいらつしやいませんか、七時の汽車なんでしよう』

谷口は前面の大きな時計を見乍ら言つた。

軈て、竹村は見えた。竹村は一人一人に丁寧におじぎをして廻つた。幾はもう一度、親しい言葉を交換して別れたかつたけれども、竹村は落付いて話をしてゐる餘裕はなかつた。その内に、改札口では切符を截り初めてしまつた。

汽車の窓に立つた竹村はともすれば俯き勝ちであつた。幾は竹村と對してプラットホームに立つた。そして斯して歸りゆく竹村の上を思ふた。哀しき運命を乘せて東へ走る汽車を思ふた。雨の夜を衝いてゆく車を思ふた。それから彼女をとり卷く、凡ての人々を思ふて見た、父を思ふた。母を思ふた兄の道尾を思ふて見た………そして將たこゝを離れんとしてゐる汽車を眺めた。竹村を眺めた。刹那後の方で最後のベルが鋭く鳴つた。　刹那プラットホーム全體に最も緊張した沈默が電流のように傳つた。刹那、車は搖き出した。刹那倒るゝように突俯しになつた竹村の姿を見た。刹那汽車は過ぎてし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

まつた。とこしへに、運命の車は、過ぎてしまつた。

『竹村さんとも、遂々お別れになつてしまいましたね』

改札口を出た谷口は、獨言のやうにこう言つて、蜿の目を黑く擴げた、

『ア、行つてしまつた』

僕はこう胸に叫びつゝ、次第、遠退いてゆく汽車のカダンスを聞きながら、皆の跡を追掛けるやうに改札口の方へ歩いた。（完）

一九一四・六・一二

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

C夫人の或る朝

八木麗

何時も定つた朝の仕事がすむと、C夫人は外出の裝ひをして二階の私室から降りて來た。透き通るやうな蒼白な細おもてに、うるみをもつたはつきりした大きな眼が、もの優しい夫人の全てを、一層なつかしいものにしてゐる。前髮を眞中から二つに分けて無雜作に束ねたかみ、輕らかな水色絹の衣服がすんなりした細長い身體にしつくりとよく似合つてゐる。米國の婦人にしては稀らしいほどしとやかな、寂しみのかつた人である。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

夫人はしづかに客間に歩み入つた。客間は何時ものやうにキチンと片附いてゐた。眞白い紗のカーテンを通して、爽やかな朝の微風がサラ〳〵と忍び込む。マホガニーの小卓には、大きなパイプルがどつしりと載つてゐる。可愛らしい天使が二人で、兩方から抱きあつて捧げてゐる時計は、カチ〳〵と休みなく過ぎゆく時の歌をかなでゝゐる。長椅子の上のクッションの置き方も、椅子の並べ方も、何時もとちつとも異つてはゐない。

夫人は滿足氣に首肯いて次の室に移らうとした。と高く壁に掲げたマドンナに、ふと夫人の眼がとまつた。聖母の顏には、何時もと異つた何かゞあるらしく夫人の瞳に映つた。

『聖母は何かを私に語つてゐる、あの優しい眼が、悲しく光つてゐた、あの優しい口が、悲しく慄えてゐた。』

隔てのとばりをかゝげて次の室に歩をうつしながら、夫人は悲しくさう思つた。何故さう思つたのだかははつきり解らなかつた。

次の室は食堂である。何時ものくせの、瞳を伏せて手を後ろに組みながら、夫人は眞中に据えたテーブルに沿ふて室を半周して、向ふの隅に置かれた寫字臺のところにいつてソッと腰を下した。臺の上には、昨日生徒の一人の林さんがもつて來てくれた黑と白との大輪のダリヤが二つ、ぐつた

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

りと疲れたやうに息吐いてゐた。ヴエランダにはアスパラガスの鉢植ゑが一つと、薔薇が二鉢、ゼラニユームが五鉢ばかり並べてあつた。

夫人はダリヤの花をとつて顔の前にもつて來た、そしてちよつと首を振るとそれを元にかへして此度はヴエランダに眼をやつた、そして少時うつとりと眼をみはつて、赤や青やの强い色彩を瞳にあつめてゐた。蚊が一つ、ブーンと微かな羽音を立てゝ飛んで來て、夫人の眞白な腕に止つた。

『幼稚園に行つて、私の小さな小供たちを見てやりませう。それから病氣の坂田さんを見舞つてあげて、お午からは婦人會の司會をしなくてはならない。』

夫人は今日一日の日課を思ひ出した。と急に懷しい氣持ちになつて、後ろから追ひかけられるやうに氣がせかれた。

『八時四十分………』

十時までに婦人會で話しするために書き拔きを作らねばならない、それから手紙を二三本は如何しても書いておかねばならない。

『急がなければいけない』

さう思つて夫人は無意識にバイブルを引き寄せた。すると未だ何を話さうとも定めてなかつたこ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とを思つて、あんまりのんきな自分が責められた。そして自分には仕事が餘計にあり過ぎるのではないかと思つた。

夫人はまづ感話の題目を定めなければならないと思つた。そこで少時瞑目して思ひに耽つてゐた。

『さうだ、友情(フレンドシツプ)といふ題で、主の愛を説くことにしやう』

然う定めると直ぐバイブルをとつて、パラ〳〵とページを繰りはじめた。

白紙にすべるペンの響きと、蠅の羽音とばかりが少時室内を領してゐた。

『リ……………リ、ン』

鋭どいベルの音が、四周の靜寂をやぶつてけたゝましく耳を刺した。コト〳〵と覺束ない歩調で、クックのおけいさんが玄關に急いでいつたらしい。

『おはやうございます』

汗をふき〳〵たまきさんの元氣らしい眞赤な顔が、夫人の面前に立つた。

『おはやう、たまきさん』

優しく言つて夫人はたまきさんの肩に手をかけた。背の高い夫人は腰かけてゐても、立つてゐるたまきさんと、顔と顔とを並べられるくらゐだ。たまきさんは日本の女のうちでも背の低い方であ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つた。

『何か御用は？』

椅子を引き寄せて夫人と對座したたまきさんの愛嬌のある眼は恁う訊いてゐた。

『これを讀んで返事をやつて下さい。これはわたしの、こつちは旦那に來たのでせう？』

夫人は側の狀さしから手紙を二本とはがきを四枚引き出してたまきさんの手に渡した。

たまきさんは夫人の助手（ヘルパー）である。もう三年前の二月から、たまきさんは朝に晩に夫人と一緒にゐて、夫人が何處に行くにも、何をするにも、何時も夫人に伴つてその半身となつて働いて來た、夫人の仕事――生活になくてはならぬ大切な人である。いくら日本語がたつしやであるとはいへ、日本の風俗習慣になれ切つてゐるとはいへ、もと〳〵外國人である夫人のために、その目とも耳とも口ともなつて飽かず努めてゐる忠實なたまきさんを、夫人はほんとにたのもしいものに思つてゐた。

『これはわたしの娘です』

よく恁う言つて夫人はたまきさんを其友人に紹介したりした。

やがて與へられた用事を果たすと、一足先きに幼稚園に行くからといつて、何時もの氣持ちの好い笑顏を殘してたまきさんは威勢よくさつ〳〵と出かけていつた。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

夫人はまた一人になつた。

夫人はもうバイブルに手を觸れなかつた。自分にはもつと大切な仕事があるらしく思つた、考へねばならぬ事があるらしく思つた。と瞑目した夫人の目の前に、何か自分を非難するらしく、又してもさつきの悲しい聖母のおもかげがスッと浮んで消えた。

夫人はつと立つて寫字臺を離れると、やゝ隔たつた籐椅子に倒れるやうに身を投げた。

『一體何のために自分は働いてゐるのだらう』

思ひ沈んだ夫人の心の面に、かうしたかげが黯くさした。

『そんなことは言ふまでもないことだ。神のため、主のため、人のためでなくて何であらう?』

然う思つて、信じてゐたればこそ、恁うして永い年月を故國を離れて、寂びしいとも厭はしいとも思はずに、專念布敎に從事しても來られたのだ。けれども今の夫人の心には、何の憚るところも省みるところもなく、一口に恁う言つてしまふことの出來ない或るものがあつた。

夫人がミスターCと倶に此國に來て傳道するやうになつたのは、今から既に十七年前、新婚後一ケ月半の、夫人が二十一才の時であつた。それが二人の實生活に踏み出した第一歩であつたのだ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

若い二人は、希望に輝く前途を夢みて、どんなに樂しく歡ばしく、此國に渡つて來たことだらう。彼等の前途には、光明があつた。希望があつた、成効が待つてゐるらしく見えた、而して彼等は二人とも若さをもつてゐた。熱い血潮に燃えた二人の若い心は、神のみ國――地上に天國を建設する光榮を思ふて、淚ぐましい歡喜に溢れた瞳を合せて、どんなに力强く働いて來たことだらう。

かくて五年經つた、十年經つた、十五年經つた、やがて二十年と數へる時も間近く迫つて來てゐるのだ。其間に彼等二人は、愛する母國を見舞ふために、僅か一年の休暇を得てたゞ一度歸省したのみであつた。

彼等は最初仙臺のミツシヨン・スクールの敎師として赴任した。次には盛岡に移つた、それから姬路にも行つた。東京に來て、日本に於ける其派の本部であるところの中央敎會の宣敎師となつてからさへもう八年にもなる。日曜日の禮拜說敎を司つたり、傳道說敎會を開いたり、バイブル・クラスの講義をしたり、個人傳道を試みたり、夜學校を敎へたり、そんな事を繰りかへし繰り返してゐるうちに、長い〳〵十七年の時が經つていつてしまつたのだ、取りかへしのつかない時が經つていつてしまつたのだ。そして彼等の若さが耗り減らされてしまつたのだ。

『自分は何をしたら宜いのだらう? 今までに一體何を仕おほせたのだらう?』

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

夫人の心に、恁うした疑問がふと浮び出て、さながら眞蒼な空に夕立雲が擴がつて、見る〳〵間に空一面を鼠いろに塗りつぶしてしまふやうに、昏い影を漲らせるやうになつたのは、このごろのことであつた。

さうした夫人の心には、今までの自分たちの努力――長い〳〵十七年間の努力が、甚だ無意味に空虚なものであるかのやうに思ひ做されるのであつた。そしてしみ〴〵と今までかゝつて歩いて來た長い足跡を、振りかへつてみずにはゐられなかつた。

夫人には子がなかつた。日本の風土が合はないと見えて、ミスターCの健康は何時もあまり勝れない方であつた。よく病氣をしては方々轉地をして歩かねばならなかつた。輕井澤に質素なヴキラを建てゝ、夏の二三ヶ月はいつも其處で暮すことにしてから、數年が經つてゐた。

『もう二週間經てば輕井澤に行くのだ』

然う思ふことは、夫人にとつて大きな喜悦であつた。

其處では盛夏の太陽もさまで烈しくは炎えない。肌觸りのいゝ微風が何時もサラ〳〵と吹いてゐる、見渡すかぎりの蒼い山と翠の野、しをらしい野の花が咲き亂れて、閑古鳥も啼けば夏鶯も歌ふ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

朝夕の逍遥、書間の讀書、忙しいまゝに平生は音信もせぬ故國の親戚朋友に手紙を書くことも、大きな愉悦の一つである。

又其處には、日本國中のみか、遠く朝鮮や支那などからも同國人がぞし〳〵集つて來て、長く相見なかつた知友と相會ふことも出來る、途で遇ふ人の一人〳〵にも、全て親しみをもつてゐる、さながら故國に在るが如くにも思はれるのだ。ラケット振つてテニスするのも、馬を驅つて峠を越すのも、やつぱり此處にゐるうちのことだ。自分がほんとの自分にかへるのは、自分の生活を、ほんとに生活するのは、此處に在る時のみのやうにも思はれる。

夫人は樂しかつた一昨年の七月のことをふと烈しく思つた。そして此一年間夢にのみ視てゐた潔子さんの顏を、耐へられぬなつかしさにはつきりと想ひ描いた。

夫人の周圍には何時も澤山の若い女がゐた。潔子さんもその中の一人であつた。潔子さんは最初夫人に英語を敎はりに來た。やがて段々にバイブル・クラスに出席するやうになつた、敎會にも出入するやうになつた。夫人のバイブル・クラスには何時も七八人から十人位の出席者があつた、其中で最もよく眞に聖書の敎義を解し、敎理の中心生命を摑んでゐるものは彼女であると夫人は信じてゐた。靜かな夫人は靜かな彼女のものごしを又なく愛でた。夫人は彼女を非常に愛した、彼女も夫人を非

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

常に慕つた、目に見えぬもの丶力が、何時とはなしに彼等二人をしつかりと結びつけてゐるのであつた。夫人ははじめの頃よく彼女に受洗をすゝめた、けれども彼女は肯かなかつた、自分がほんとに解つて心からそれを望むやうになるまで、默つて待つてゐてくれと、何時も彼女は言つてゐた。

斯くして二年の後、待たれた其時が來たのであつた。彼女は自ら受洗を請ふに至つた。嚴冬一月彼女はその全身を水底に沈めて神の國に甦ることを誓つた。夫人はかつて此時ほど大きな喜悦と滿足とを味はつたことはなかつた。夫人は彼女を"daughter"と謂ひ"my dear"と呼んだ。彼女は夫人を"mother"と呼んだ。其後の彼女は模範的信者として。教會のために熱心に働くことに努めた。彼女は夫人の「ほこり」であつた。そして夫人は彼女の「光明」であつた。

其年の夏——一昨年の夏——夫人は彼女を輕井澤に伴つて行つた。夫人は彼女をバイブル・ウーマンとして、自分の片腕として、倶に傳道したいと望んでゐたのであつた。彼女自らも甚だしくそれを望んでゐたのであつた。けれどもこの二人の願望は竟に聽かれなかつた。

あの時の潔子さんのベッド、潔子さんの椅子、二人で手を組んで歩いた野や山、それを見るのは耐らないと夫人は思つた。樂しい思ひ出が、どんなに自分のハートを緊めつけるだらうと、さう思ふにさへ耐へなかつた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

早天の祈禱會におそくならないやうにと、夫人がソッと潔子さんの寢室のドアをノックして開けてみた時、潔子さんは白い寢衣を着てベッドの上に端座してゐた、そして髮をあみさげにして寢衣のまゝな夫人の姿を見ると、默つてうなづいてさも嬉し相に微笑んだ。

夜になつても燈火もつけないで一人ひざまづいて默想してゐる潔子さんを見出して、暗黑の中で感激に慄える聲をあはせて、二人讃美歌を歌ひつれた時のこともはつきりと思ひ出された。

なつかしい追憶がきりもなく湧いて出た。

夫人はもう丁度一年間彼女を見ないで過した　去年夫人が輕井澤に行つてから、何時も離れてゐる時には一週に二度はきつと屆いた潔子さんの手紙が、いくら待つてもまつても竟に一度も夫人をおとづれなかつた。夫人の方から書いてやつても一言の返事さへ來なかつた。夫人はほんとに寂しかつた、樂しい夏の山住ひもいつものやうに彼女の心を慰めなかつた。

『如何したのだらう?』

たゞさう思ふばかりで、いくら心配しても夫人には如何しやうもなかつた。

九月の中旬夫人は又忙しい職務にかへつて來た。歸京した夫人は潔子さんが其後ちつとも敎會に顏を見せないといふ思ひもよらない報告をうけとつた。それのみかもう敎會に出席することが出來

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ないと言つて、その理由を細々と記した手紙を教會に送つて來たといふことも知つた。

其時の夫人の驚愕、それは今思つても凄まじいばかりであつた。夫人は唯一人味方と賴んだものに裏切られたやうな果敢なさ腹立しさを感じた、そして教會の人たちにも、友だちにも自分の面目を喪ふことを悲しんだが、やつぱりそれをほんとのことゝは如何してゝも思へなかつた。

『潔子さんが教會を離れる？そんなことがあり得やうか？神が許したまふのだらうか？』

夫人は幾度もわれとわが心にこの疑問を繰りかへして悶えた。やがて夫人の許へも、潔子さんから手紙が來た。夫人はそれを讀んで泣かずにはゐられなかつた。耐へても耐へてゝも泪がとめどなく溢れて落ちたのであつた。

それには今までの夫人の厚情を、くりかへし繰りかへし感謝してあつた。そして宗教に對する自分の信條、自分の思想の變遷した經過などを委しく說いて、自分は如何なる苦惱にも打ち克つて教會を離れることが、自他のために最善最良の方法であると信じてさうするとの旨が書いてあつた。そして當分戀ひしい夫人にもお目にはかゝるまいと書いてあつた。

彼女の心の推移に全然交渉をもち得なかつた夫人には、彼女の然ういふ心持ちがよくは解らなかつた、けれども一圖にそれを惡るいと言ひ切つてしまふことゝ出來なかつた。夫人は唯悲しかつた

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

如何してこんな不幸を、神が自分の上に下したまふのであらうかとたゞそれのみを思ひ惑つた。

『何故彼女は哲學書などを讀んだのだらう？』

そのために彼女の信仰が在來の宗敎を離れたのだと思つた夫人は、さうなるに至らせた自分の無力が偏へに悲しまれた。

其後も夫人の周圍には常に幾人もの若い女が絶えず夫人を取りまいてゐた。來ては去り、去つてはまた來る多くのものがあつたけれども、夫人の心の中には彼女の殘していつた場所を、彼女に代つて占めるものとては一人もなかつた。

それからも夫人は幾度か潔子さんに手紙を書いた、が竟に一度も返事が來なかつた。夫人は彼女の苦しい心持ちを知ることは出來なかつた。今もなほ彼女が夫人に對する思慕の情に悶えてゐるとはすこしも知らなかつた。それでもう斷念して手紙も書かなくなつてから半年の餘も經つてゐた。

決して忘れてしまつたのではないけれど、此頃彼女を思ふ自分の心が著しく薄くなつてゐたことを夫人は大へん心苦しく思つた。

『自分はまだ彼女をとりかへすために全力をつくしてゐないではないか』

夫人の心は今烈しくそれを思つた、と自分の今までの冷淡な態度が酷く悔ひられた。他が酔はね

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ば自分も酔えないといつたやうな、自分のなまぬるい態度が恨めしかつた。然うした結果になつたといふのも、全ては自分の愛の力が足りなかつたからだと顧りみられた。而してもう一度彼女を自分のものとして、この胸に抱擁することが出來ないやうでは、自分たちが過去十七年の、若さも、力も、生命そのもの丶全てを献げて建設した事業を、まつたく根柢から破壞してしまふことに他ならない、それは自分たちの生涯を全く無意義な浪費だと裏書きするやうなものだと夫人は思つた。

夫人は今まで躊躇してゐた自分を、大へん愧かしいものに思つて自分を責めた。

『何故自分は迷つた羊が自分から歸へつて來るのを待つてゐたらう? 何故自分から探しに行つて見付かるまでたづね覓めなかつたのだらう?』

然う思つた夫人はもう一刻も猶豫しなかつた。直ぐ勢ひよく立ち上つて、帽を手にするとそのま丶小走りに外に出た。

蒼白い夫人の頰は紅を帶びて、眼は新らしい希望に輝いた新らしい力に充ちてゐた。

午近い七月の太陽が赫々と、焦げつくやうに全てのものを照りかへしてゐた。

『私が今なすべき第一のつとめはこれなのだ』

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

夫人はもう今日の日課のことを思はなかつた。

『全てはその後のことだ』

そゝられるやうに、夫人は電車の停留場へと急いだ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

私生兒の母

セルマ、ラガーールーフ
神近市譯

（一）

ある片田舍の裁判室で起つたことがある。判事席の中央には一人の老判事——無作法に荒彫された面貌を持つた、丈の高い頑丈なつくりの——が席について居る、もう數時間、彼は次々の訴訟を裁くに忙しかつたので、遂々嫌厭にも憂鬱にも似たあるものが彼を捕へたのであつた。彼を今苦しめて居るものは、その裁判室に漲つて居る暑氣と窮屈さであるか、或は人間の爭鬪癖や不人情や貪欲

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を證據だてるより外、どんな原因から生じるとも思はれぬこんなつまらない爭論を取り扱ふので、彼は不機嫌になつて終つたのか、それを知ることはむづかしい。

彼はその日審問される筈になつて居た終審の一ッを今審べ始めたところであつた。その事件は子供の養育に就て扶助を受くる爲の訴訟に關して居る。

この事件は既に最終高等民事裁判所で審べられたので、前法廷の始末書が丁度讀み上げられて居るところである。それで原告は貧しい農夫の娘で、被告はある既婚の男子であることは明らかである。

のみならず始末書によると、被告は原告がそれに依つて利益を得やうとの目的を持つのみで、不當にも無道理にも被告を訴へたのであると主張して居る。彼は原告が一時彼の家に雇はれて居たことは認めて居る、然し彼女が彼の家に止つて居た間、彼は彼女とは何等の密事を行つては居なかつたので彼女は彼からの扶助を請求すべき權利は持たぬ筈であつた。然し被告はその要求を固執するので、數人の證人が立會はされた後、被告は宣誓をして彼は何故法廷に依つて原告を扶助する樣に宣告さるべきではないかと云ふ理由を示す樣に命ぜられたのであつた。

双方の訴訟關係人は進み出で、判事席の前に並んで立つて居る。原告は大變若くて、死ぬほどひ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ごく劫かされて居る樣に見える。彼女は耻しさで泣いて居る。そしてどうしてそれを開くべきかもわからぬ樣に思はれる皺くちやなハンケチでもつて、やつと涙を拭ふのであつた。彼女は眞新しい立派な黒い着物をつけて居るが、それは相當なないりで法庭にでるに借りたのだとは思はずには居られないほど、彼女の身につかない。

被告はと云ふと、一目見た丈で有福な男と云ふことは見らるゝのである。彼は四十位で、太つぱらな勇氣のある外貌をもつて居る。

法官の前に立つて居る時に、彼は非常に好い態度を取つて居る。誰でも、彼がそこに立つことをよろこんで居ないことは見ることが出來るが、又彼は少しでもそれに關はつて居る樣には見えぬのである。

始末書が讀み上げられて終ふと、判事は被告に向いて彼が尙否定して宣誓をするつもりであるかを尋ねたのであつた。

これらの間に對して被告は迅速に簡單な是認を與へた。彼は胴衣のポケットに手を入れて、彼が宣誓の意味と重大とを了解し、それを行ふ資格があることを證明する牧師の摘要をとり出した。

この間中、原告は泣きつゞけて居た。彼女はわけもなく羞し相で、こりゝ性もなく床の上に眼を据

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

えて居た。これ迄彼女はまともに被告が見られるほどには眼を上げなかつたのであつた。

彼がその「イエス」を口から出した時に、彼女は飛び退いた。そして反駁して云ふべきことが有り相に、法官の方に一二歩よつた、でも途方にくれてそこに立つて居るのである。

そのうちに判事は牧師の書付を手にとつて、廷丁に目くばせした。と後者は山をなして居る記録の下にかくれて居る聖書を探しに近寄つて來て、それを被告の正面に置くのである。

原告は誰かゞ彼女の側を通るのを聞いて、不安になつた。彼女はやつとテーブルの上が見られる様に無理々々にその眼を上げた、それでどうして事務員が聖書を動かすかを了解したのであつた。

再度彼女は何か反駁を望むかの様に見えたが、再度自ら制した。彼が宣誓を行ふことが許されるなどゝ云ふことは有り得べきことではない。判事は必ず彼を妨ぐるに相違ない！

この判事は賢い人である、そして彼女の地方の人々は如何に考へ如何に感ずるかを知つて居る。彼は、恐らく何でも結婚關係を冒す事が起るや否や、人々はどんなに苛刻に振舞ふかを知つて居た。彼等は彼女が犯したものより惡い罪を知らないのであつた、若し眞實でなかつたら、どうして彼女は自身についてこの様なことを白狀するだらう。判事は彼女が自身の上に怖るべき侮蔑、そして侮蔑丈でなくあらゆる不幸を持ち來したことを知つて居るに相違ない。今迄も誰も彼女の奉公を需めな

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

かつた――誰も彼女に働いて貰はなかつた。彼女の兩親は彼等の家に彼女を置くことを忍び得なかつた、そして絕えず彼女を逐ひ出すと云つて居た。オー、判事は彼女が權利を持たなかつたら、既婚の男子に扶助を求めはしなかつたらうと云ふことを知つて居るに相違ない。

確に判事は彼女がこんな場合に僞はると云ふことを、彼女が既婚の男より他に告訴すべき人を持つて居さへすれば、こんな怖るべき不幸を自身に呼び起さうとは信ずることは出來なかつた。そして若し彼がこれを知つて居るなら、彼は宣誓をとめるに違ない。

彼女は判事が牧師の摘要を二度讀み終つたのを見た、そして彼が妨げ樣として居ると考へ始めた。

實に、判事は拔け目のない顏付を持つて居る。今彼はその一瞥を原告の上に投げかけた、そしてそれと共に彼の倦怠と嫌厭とは以前よりも著しくなつた。彼は彼女に對して好意を持たぬ樣に思はれる。原告は事實を云つて居るにしても、惡い女である、で判事は彼女には少しの同情も感ずることは出來ぬ。

時としてこの判事は善良な賢い助言者の樣に事件の間に入る、そして兩者の關係を丸つきりだいなしにならぬ樣にする。然し今日は彼は疲れてイラ〱として居る、そして只法定の順序を進ませ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

ることばかりを考へて居る。

彼は牧師の推薦狀を下に置いて、原告に彼が僞誓の歸因に就て注意深く考へたことを望むと云ふ意味で數語を告げた。被告はそれ迄の間示して居た靜な容子で彼の云ふのを聞いてから、慇懃に威嚴を失はずに答へた。

原告はこれを極度の恐怖のうちに聽いたのであつた。彼女は熱心な反抗の態度を示した、そして兩手をねぢつて居た。今彼女は法官に話したいのである。

彼女は羞恥と、彼女の發言を妨ぐる啜り泣と恐しく爭ふのである。その結果は彼女は一語も聞き取れる樣に云ひ出すことは出來ない。

そしたら宣誓は行はれることであらう。そして彼女はそれをやめて終はねばならぬ、誰も彼がその魂を誓ひ捨てるのを遮らぬのだらう。

これ迄、彼女はこれが出來得べきことゝは思はなかつた。けれ共今彼女はそれが目前にあることを――それが次の瞬間に起るであらうと云ふことを確實に捉へて居る。彼女が今迄感じたよりもずつと力强い恐怖が彼女を捕へた。彼女はすつかり正氣をなくして終つた。彼女はもう泣くことさへも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

せぬ、兩眼は硝子をはめられた樣になつた、それでは彼は自身に永遠の刑罰を持ち來たさうとするのか。

彼女は彼がその妻の爲に大膽に自身を僞誓に陷れ樣として居ることを認めるのである。然しこの事實が彼の家庭に風波を起すにしても、彼はその理由の爲に自分の魂の救濟を投げ棄てるべきではない。

世に僞誓ほど怖るべきはない。その罪には何か氣味わるき戰慄すべきものがある。それに向つては慈憐も宥恕もない。地獄の凡の門は僞誓者の名が擧げられた時に一齊に開く。

彼女が彼の顏に達するだけ眼をあげたなら、彼女はそれが神の怒で烙印されて永劫刑の印を押されたのを見て恐れたであらう。

彼女がそこに立つて、より深いより深い恐怖に進んだ時に、判事は被告に彼がどんな風にその指を聖書の上に置かねばならぬかを敎えた、そして判事は宣誓の形式を現出さうと法律書を開いた。

彼女は彼がその本の上に指を置くのを見ると一歩進み寄つた、そしてテーブルの上に手をのばして彼の手を押しやりた相なのが見えた。

けれ共彼女は尙ある微かな希望で支えられて居る。彼女は彼が今――この終りの瞬間に考を和げ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るであらうと考へて居る。

判事は法律書の中の所を探し出した、そして聲高くはつきりとその宣誓を讀み始めた。そして彼は被告が彼の言葉をつけるやうに句切をつけた。被告は全く繰り返へさうとした、然し彼はその文句を云ひそくなつた、そして判事はも一度初めから始めねばならなくなつた。

もう彼女は希望の面影を胸に懐くことは出來ぬ、彼女は彼が今僞つて誓はうと仕樣とすること――彼がこの世と來るべき世とで自身の上に神の憤を持ち來たさうとして居ることを知つて居る。彼女は絶望の中に自分の手を捩ぢて居る、そして彼女が彼を訴へたのであるから、凡は彼女の過失に歸する！ 然し彼女は仕事がなかつたのだ、彼女は餓えて凍え樣として居た、子供は死に近づいて居た。他に誰に彼女は彼がこんな呪ふべき罪を犯すことを進んで仕樣とは、考へることが出來なかつたことである。

判事は又宣誓を讀んだ。數分間のうちに事は濟んで終ふであらう。元に返へすことの出來ない――決して宥されることの出來ぬ、消し去られることの出來ぬ種類の事は濟されるであらう。

丁度被告が宣誓を繰り返し始めた時に、彼女は跳び出して、彼の伸ばした手を拂ひのけて、聖書をひつたくつた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遂々彼女に勇氣をあたへたのは、その戰慄すべき恐怖であつた。彼はその魂を誓ひ捨てゝはならぬ！

廷丁はすぐに彼女から聖書を取り返へして、規律に從う樣に仕樣と急いで出て來た。彼女は法廷に關した凡の事に限りのない恐怖を抱いて居る、そして實際に彼女が今した事は彼女を牢獄に下すことゝ信じて居る。然し彼女は聖書は放さない。「どんなことが有つても彼は宣誓をしてはならぬ」。宣誓を仕樣として居る彼も亦聖書を取らうと馳けよつた、けれども彼女はそれをも拒んだ。

「あなたは誓をたてゝはなりませぬ」

彼女は叫んだ。

「なりませぬ」

この起り事は云ふ迄もなく大變な驚愕を起した。法庭の人々は爭つて原告席に寄つて來る、陪審官は立ち上つた、書記はひつくりかへされぬ樣に手にインキ壺をもつて跳び上つた。

するど判事は高い怒つた調子で

「靜に」

とどなつた。と、凡の人がすつかり靜に立つた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「どうかしたのか、聖書をどう仕様と云ふのか」
判事は前と同じ様に氣むづかしい苛酷な調子で原告に尋ねる。
絶望から起る勇氣でその苦痛に聲を授けてから、彼女の心配は大きくなつた、それで
「彼は誓を立てゝはなりませぬ」
と答へることが出來た。
「靜に、そして本をもとのところにおかへしなさい」
と判事は命令した。
彼女は從はぬ、そして矢張り兩手でしかと書物を抱へて居る。そして
「彼は誓を立てることは出來ませぬ」
と怖ろしげに叫んだ。
「お前は訴訟にかたうとそんなに心を定めて居るのか」
と判事は鋭く尋ねた。
「私は訴訟を取り消したいのでございます」
彼女は高い金切聲で叫んだ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「私はあの人に無理に誓はせたくはございません」

「何をお前は云つて居るのか、お前は氣が狂つたのではないか」

と判事は尋ねた。

彼女は不意に息をつぐめた、そして自分を制し樣と試みた。彼女は自分がどんなに叫んだかを聞いたのであつた。今云ふべきことを云ふことが出來なかつたら、判事は彼女は氣が狂つたと考へるであらう。彼女は再び自分の聲を自由に仕樣ともがいた、そしてやつと思ひ通りにすることが出來た。彼女は判事の顏を眞直に見て靜に熱心に明白に云つた。

「私はこの訴訟を取り消したいのでございます。この人はあの子の父でございます、私は今でもこの人を愛して居ります。私は僞りの誓を立てさせ度くございません」

彼女は判事の顏を眞直に見てその机の前に眞直に手強い態度で立つて居る。彼は兩手をその同じ机の上に出したまゝ座つて、長い間彼女から眼をはなさなかつた。判事も彼女を見詰めて居た、と非常な變化が彼には起つて來た。それは彼の顏に見えて居た倦怠と不快とがすつかり消えて終つて、大きな荒彫の容貌が世にも美しい感動でもつて美しくなつたのであつた。「あゝ、わかつた!」と彼は考へる――「あゝ、わかつた! こんなのが我國民の勇氣だ。一番下賤な者にでもこれ丈の愛と敬

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

神の念がある以上は、わしは憂ふるには及ばぬ」
不意に判事は眼に涙が溢れるのを感じた、そして耻ちたかの樣に氣を鎭めて、周圍を慌しく見廻した。彼は書記も廷丁達も陪審判事の長い列も判事の机の前に聖書をしつかりと抱えて立つ彼女を見詰めて居るのを知つた。そして恰もその人達を魂の底から幸福にする何物か非常に美しい物を見たかの樣に、彼等の顏にある耀があるのを認めた。
その後で判事は傍聽人の方を眺め渡した、そしてそれらの人達が丸で何物よりも聞きたがつて居た物を聞いたかの樣に、慰安の急しい息遣をして居るのを見た。
終に判事は被告を眺めた、今度うなだれた頭をして床の上を見詰めて居るのは彼れである。
判事はも一度哀れな娘の方を見かへつた。
「お前の望む通にしてあげる」と彼は云つた、「目錄からは消しておく樣」――これは書記にであつた。
被告は何か異存を入れるらしい樣子を示した。
「ハハア、何ですか」
と判事は荒々しく云つた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

「何か異存がありますか」

被告の頭は段々と下つた、そして殆ど聞えぬ位に云つた。

「いゝえ、私もそれが一番いゝと思ふ丈です」

判事は、も一分時ほど座つて居た、そして重たい椅子を押しやつて立ち上り、机を廻つて原告に近よつた。

「有りがたう」

彼はさう云つて手を差出した。

彼女は既に聖書を下に置いて、皺くちやのハンケチで涙を拭いて立つて居た。

判事は彼女の手をとつて、それが貴人につける人の手でゞもある樣に振つて、も一度云つた。

「有り難う」(未完)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

セルマ・ラガールーフ女史に就いて

神近いち

前世紀の後半から今世紀にかけてスカンヂナビアほど飛躍されたところは有るまい。イプセンやビヨルンソンやストリンドベルヒなどは日本でも隨分ひろく讀まれて居る。然しその割には世界的名聲に於て前三者に何等遜色のないラガールフ女史に就て喧傳されるところはない樣である。

女史は瑞典の人、その故國に於て文學上のノベル賞金を得た最初の人である。著はすものは物語と小說丈であるがその名聲は大したもので、歐州各國では競ふてその著書を飜譯することイプセンやストリンドベルヒと變りはない。

始めロマンチシズムから近くナチユラリズム又はリアリズムの圏内に入つた人で、處女作は「ケスタ・ベルリング物語」と云つて雜誌 Idun の懸賞に應募したものであつた。その時の事情と云ふものが自叙體になつて公にされて居る。それによると女史は幼少から病弱で、他の子達の樣に戶外の運動や快活な遊戲を知らず、何時も戶内に在つて讀書や昔噺を聞いて生長した、そして往昔の Vermland—それが故鄕の名であつた——の傳說や物語の斷片を胸裏に畜へて來た。成人すると同時に作家として立ちたいと云ふ希望をいだく樣になつて、折にふれて手當りに書き綴るのをことゝした。然しそれで世に出られ樣とはどうしても自身に思はれない

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ので、廿二歳の時に初めて作家さしての位置を得る迄一定の職業を得やうさして教師になる學校に行つた。さ、もうそこでは研究さ筆記に沒頭して終つて又他を顧ることがなかつたが數年後ある文學史の講義のあさで、フト自分が蓄へて居た話の材料に自信を得てそれを完成しやうさ決心はつけたものゝ、新にふみ込んだ職業におはれて終つて、卅歳に近くなつても二章書いたばかりであつた。その後數年たつて三章ほご出來て居たのを Idum で懸賞の時にまさめて出したので、この成功は實に女史の生涯を劃して、いよ〳〵文學上の努力をつゞけることを決心させたものであるさ女史は云つて居る。然しこれは未だ物語の一部丈で全部完結して居なかつたので、それに腹案は彪大なものであつたし、教務の余暇の仕事さしては何時完成され様さも思へなかつたのを、Adlersparre 男爵夫人――文名を Esselde さ云つた作家――の後援で一年間凡の勞働から遠ざかつて出來上つたもので、女史自身は「それがあるべき樣にはごうしてもならなかつた」さ云つては居るが、それは女史の女らしい謙遜に過ぎない。これに依つて女史は世界的舞臺に立つたさ云つたさ云つてもいゝのである。「ケスタ、ベルリング物語」に亞いで「反基督の奇蹟」及び「見えざる鏈」など出たが、凡べて女史のロマンチックな内容を新しい寫實の型式で現はさうさする努力の結果であつた。それが近作の The Girl from the Marsh Craft ――これを私は「私生兒の母」さいふ題にした――になつてすつかりロマンチシズムを脫脚して、當初から心を惹かれて居たリアリズムの境地に入つたのであつた。

尙女史及び女史の作物のくわしい評論は鈴木氏が執筆下さることになつて居るから、こゝには只私が「私生兒の母」を譯するに當つて便宜上短い紹介をつけ加へておく。或は「私生兒の母」の樣に比較的長いものより、もつさ氣の利いた短い一號で完譯出來るものを選んだがいゝがさも考へたけれざ、私の手に入つた近作集のうちでは矢張りそれが女史の近い代表作さ思はれたから、初めに譯することゝした。

又女史の名の讀み方については、日本では Selma Lagerlöf をセルマ或はサルマ、ラゲルレフさ云つて居る、成る丈完全な讀み

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

方に仕度いと思つて、ベデッカの短い瑞典の文法を調べたら、e や i の前では g は y に發音し ö は佛語の eu に發音すると云ふのでセルマ、ラエルルツフと讀んで居たら、先達瑞典に旅行した人からの來信に、あちらではラガールーフと讀んで居るとのことであつた、瑞典の人を瑞典の人が瑞典で云つて居るのを聞いたのであるから、これより完全な發音はないと思へるから、さう讀むことにした。

尚、譯については、もとより經驗は多くなし、立派にすることは出來ぬと思つたけれど正確には仕度いと思つてとりかゝつた。ところが英譯はすつかり現在動詞を使つて居る、そして英語でよめばそれが少しも異樣には聞えぬのが日本語にすると私共が讀みなれない爲か、非常に讀み苦しくて遂々半分位は過去動詞を使ふて調和がされた積で居る。こんな場合にはどうすればいゝのか、原作に忠實なるべきか、讀み易くすべきか識者の批判を願ふ。

（三、七月十八日夜譯者）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

果物うりの若者のうたと白い鳩の死

淺井みつい

うつくしいすゞしい朝露が少女の泪のやうにうす弱くか
ゞやく野道を紅ばら色の頬をしたマーグルの彫刻のやう
な脊のたかい若者はうつくしいうたをしづかにうたつて
きつさあのなつかしいうつくしいイタリーの野道を今朝
もあるゐるでせう

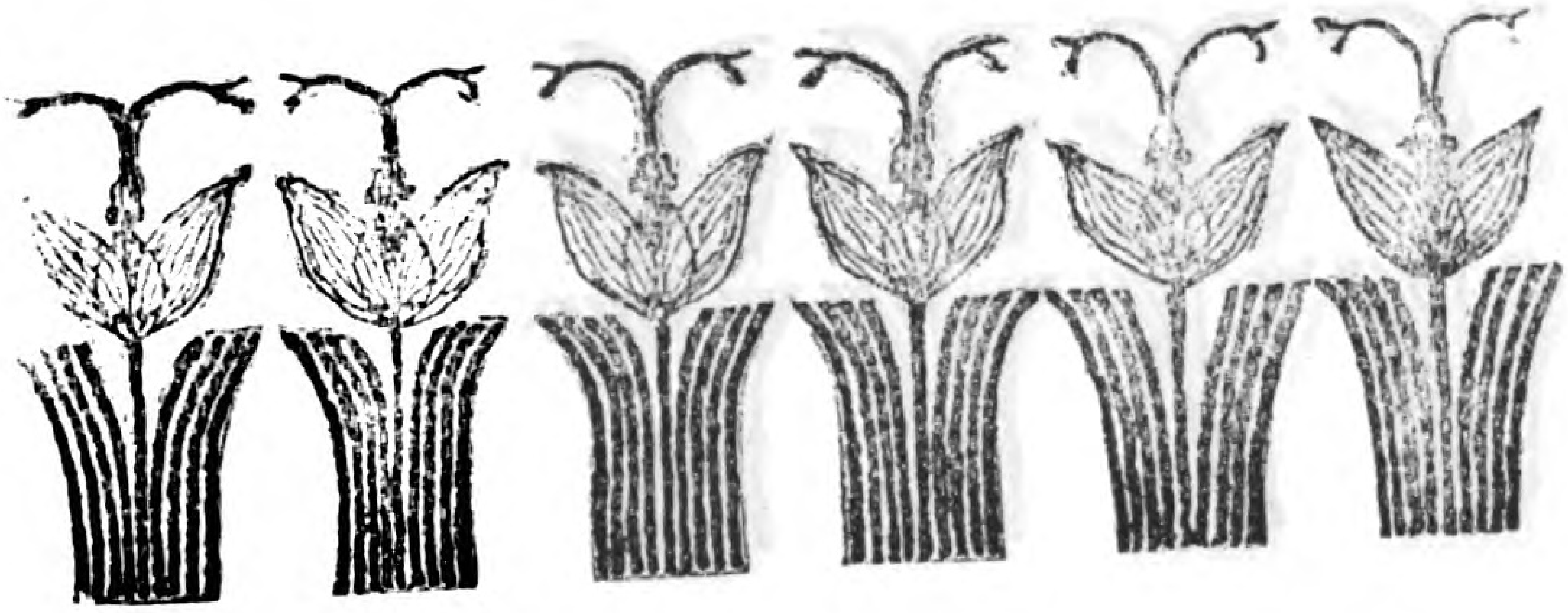
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わが小羊よおまえはなぜに
わたしの落した紙をたべたの
白ぱんのきれだと思つてか

うすあかい妙なかほりが
紙からしたであろう
あまいやさしい味が
きつとしたであろうよ
あゝ私とやさしい君は
紅くすの木の下で今夜は
なくであろうよ。

君よりの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



なつかしきうたかきし
紙であつたものを
わたしのよまぬさきに
あやまつておとしたのを
あゝおまえは
平氣でたべてしまつたの

おまえの淡紅色のむねの中に
今頃はきつと水色の花が
さいたであろう
ルビーの玉がかゞやいているであろうよ

小羊よおまえがわたしで

わたしがおまえであつて
そのかみをわたしがたべたのであつたなら
私はどんなにどんなに幸福な
幸福な小羊であろう
多くの多くの星か
ほゝえみをかわす時
うつくしき君は
やわらかき前髪に
コスモスの花をかざし
涼しき目を伏せて
わがためによきうたうたふ

ゆめのごとき夜のうつくしさ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

君のすがたのうつくしさ
あゝ君は君は
花なれば花なれば
やさしき弱きコスモスよ
鳥なれば鳥なれば、ばら色の鳥よ
わがいとしき君よ
なつかしき君よ
いつまでもやさしく
うつくしくおわせ
かわらすに下さいな。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

白い鳩の死

白い鳩よ
をん身はいづこに行きました
夏ばらの花のうす赤き
頬をしてわたしはなく
白百合のごときをん身のうじなに
水色のリボンを
むすむであけますする故
夜あけの霜がホロホロと
しづかに玉をつくる時
花菱草の花園の
うす黄な夢に

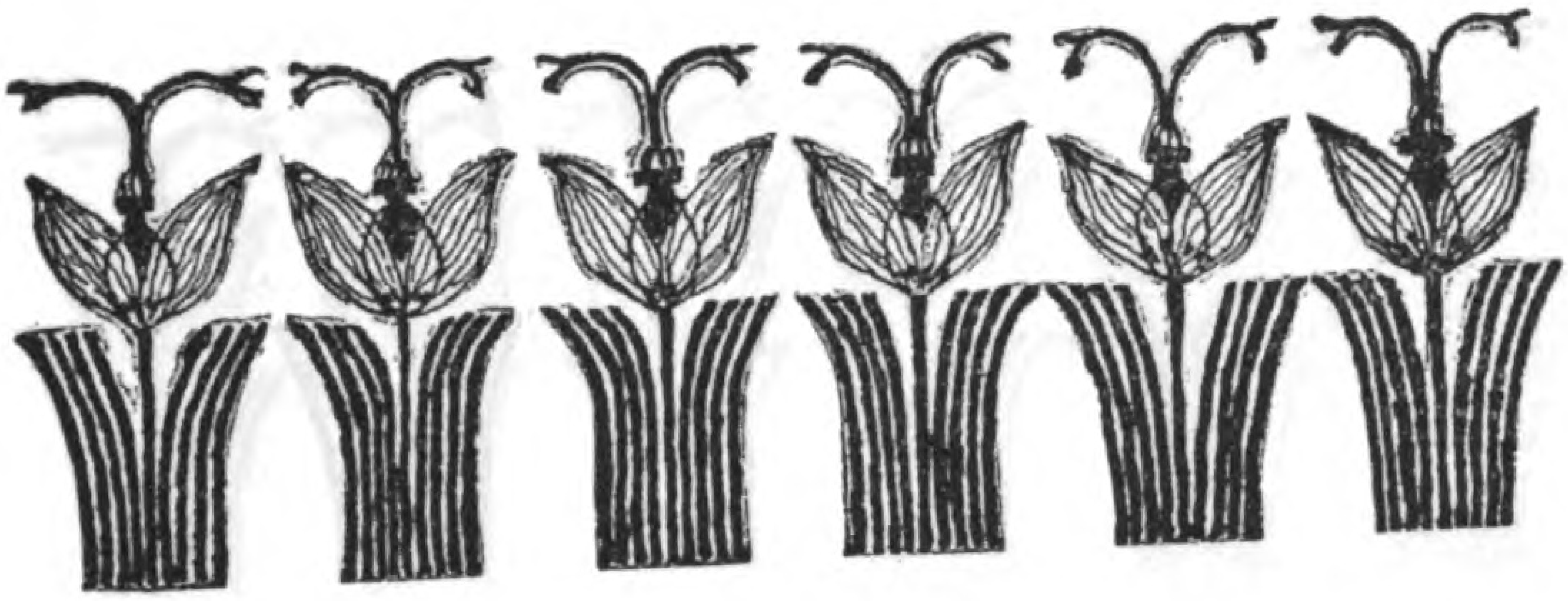
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生きて下さいな
花ぞのゝ紅ばらを
とじし瞳にかけましても
ルビーのたまはみえませぬ
白ばらの花を
白き胸につみかさねても
あかき血しほはかよいませぬ
大理石（マーブル）のやうな
ねむれる鳩よ
今朝ワスレナ草がかれました
心弱き少女はたゞ一人
かしの木のもとで
小羊のやうになきました

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あゝ白い窓のカーテンを
サラサラひいたのはたれ
みどりさん　みどりさん
ひどいわ　ひどいわ
何をそんなに
ほゝえむでいなさるの
悲しいわ
あたしの愛する白鳩が
死んだのですもの
みどりさんはおひどいわ
白い鳩は悲しみませう
白い鳩はあたしのやうに
お友達もなくたゞ一人でした

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



たつた一人でいつも
うつむいていましたわ
あんまりをとなしい
鳩でした故
こんな早く死んだのでせう
またの世には
いづこの國の少女と
生れるでせう
イタリーの水色の花さく
小さき島の
白いお城のうつくしき
プリンスさまの
愛のおん目にとまる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あなたは村の少女と
生れるでせうよ。

(あたしのはづかしい幼ない詩をどう
ぞどうぞおわらい下さらないでちよ
ーだいみなさまどうぞあたしほんさ
にはづかしいのですけれど。)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

編輯室より

同人

氣の利いた人は山にいつたりして、熱い東京には氣の利かない人ばかりが殘つてせつせと働いてゐるのかも知れない——蒸し暑い校正室に座つて面倒くさい仕事にけだるい頭腦をなやましてゐるとヤケな氣にもなる。

毎日いやな日がつゞく。强烈な七月末の太陽が赫々と燃えてちつとも雨をみない乾き切つた日がもう幾日も幾日もつゞいた揚句、おつかぶさるやうな薄黯い空の下に、埃にまみれた木の葉がうつたりとさも〳〵疲れたやうに息吐いてゐるのをみると耐らなく重苦しい想ひがする。日に〳〵幾度となく空をぼんやりと眺めやつて、ポツンと浮き出る雨雲ばかりを偏へに俟ちのぞんでゐた私たちに、昨日の午後はやう〳〵にして生々しいよろこびの色をよみがへらせてくれたけれど、それとても渇いた私たちを充分には滿足させないで消えていつてしまつた。少しばかりを與へられた私たちは、前にもましたあこがれの瞳をみはつて夕立をさきぶれる涼しい風のおとづれるのを待つてゐるのだ。

毎日氷のおかげで苦しい日を消してゆく人間はほんとにちつぽけな弱いものだと思ふ。

先月の校正の時には、籠のカナリヤが三羽の可愛い雛をかへして、二羽の親鳥が交り交りに食物を運んでいつては、まだ毛の生へ揃はない頭ばかり大きなひよこの、中にも目立つて大きな口をポッカリ明けて待つてゐるのを、さもいぢらし氣に養つてゐるのを何か不思議なもの〻やうに感心して見てゐたが、今日來てみるとどつちが親だか子だかわからないほど大きくなつてしまつて、盛んに飛んだり跳ねたり大活動をしてゐる、そして赤裸だつた背にはつや〳〵しい彩毛が生へて氣取つた風をしてゐる。親鳥からみると流石に若さの輝いてゐるのがはつきりと眼にみえてたのもしい。

私たちは一月の間にどれだけ大きくなつたらう？　さう思ふと變な氣がする。

九州に歸へつてゐる神近さんは、此頃頭腦をわるくして大へん困つてゐるといふお便りであつた。暑い盛りにわざ〳〵暑い九州になんか歸へるから惡るいんだなんて誰かゞ言つた。其人は何も知らないのだから仕方がない。それから尾竹さんは又大

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

阪に行つてしまつた。今日明日には歸へられるだらうとアテにはしてゐるのだけれど、隨分アテにはならぬ話らしい。

皆が勉強して九月號には好いものを書きたいと思つてゐる。そして好い雜誌をつくりたいと思つてゐる。此號に載る筈だつた尾竹さんの「人形買ふまでの戀」も次號まで待つていたゞきたい。（記）

新刊紹介

春のめざめ　野上臼川氏譯　牛込東亞堂發行　金一圓二十錢

フランク・ヴェデキントの有名なる作、性慾教育を題材としたものである。

やうやく生の秘密にめざめんとし、或ひはめざめたる少年少女が、その教育者や家庭の人々の謬つた思想、教育のために、素直に伸びて行かうとする強烈な若い力を阻まれて、その結果いかに悲しむべく怖るべき悲劇をかもすかを力強く描出したものである。

此書によつてはじめて眼を覺まされて、獨逸の學校の多くがセックスに關する生理學を課するやうになつたといふに視てもその價値を想ひみることが出來やう。

なほ卷末に詳しい註解と原著者の傳記とを附してある。譯筆の正確明快なるは言ふまでもない。

理想の良人　磯田扇三氏譯　京橋泰天堂發行　金八十錢

オスカー・ワイルド作四幕物の脚本である。安逸奢侈を貪り美を追ふて生きる貴族の生活を中心として、權謀術策に充ちた政界の人々を諷刺した皮肉もあり面白いものである。譯筆の如何にもたどたどしいのは惜しい。

牡丹刷毛　松井須磨子著　牛込新潮社發行　金七十錢

氏の小説小品、感想隨筆等と舞臺寫眞十數葉を集めしものなり。

寄贈雜誌

白樺・早稻田文學・帝國文學・新思潮・我等・生活と藝術・近代思想・六合雜誌・心の花・蛇の舌・青鞜・歌舞伎・文藝復興・反響・エゴ・ホト丶ギス・アラヽギ・假面・藝美・層雲・創造・音樂・水甕・詩歌・塔・自畫像・婦人文藝・其他

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

■本誌定價　一册金參拾錢（郵税一錢五厘）
■前金購讀料　（三册分）金九十錢　（六册分）一圓八十錢　（十二册分）金三圓六十錢、郵税は發行所に於て負擔す。
■廣告料　普通一頁　金拾五圓　特等　金貳拾圓

大正三年七月二十九日印刷納本
大正三年八月一日發行
（每月一回一日發行）

═══
禁轉載

編輯兼發行人　東京市日本橋區檜物町九番地　西村辰五郎
印刷人　東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地　佐藤保太郎

發行所　東京市日本橋區檜物町　電話本局一八七一番　東雲堂書店　振替東京五六一四番

文祥堂印行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鐘淵紡績株式會社五拾五回決算報告

貸借對照表（省略）

損益計算

一總收入金	參參、八貳六、七五〇・壹九六
一總支出金	參壹、六八四、九參四・七參五
差引	貳、壹四壹、八壹五・四六壹
內	
一東京本店增設織布工場創業費	壹八、五六五・七貳壹
一固定資產償却金	參〇〇、〇〇〇・〇〇〇
再差引	
一當期純益金	壹、八貳參、貳四九・七四〇
一前半期繰越金	壹、八四貳、貳五九・貳壹壹
計	參、六六五、五〇八・九五壹
內	
株主配當金 但年壹割貳步（舊株壹株ニ付金參圓 新株壹株ニ付金貳圓拾錢）ノ割	八九七、九九七・八〇〇
當期特別配當金 但年四步（舊株壹株ニ付金壹圓 新株壹株ニ付金七拾錢）ノ割	貳九九、參參貳・六〇〇
諸種積立金	壹五〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	壹〇〇、〇〇〇・〇〇〇
職工幸福增進資金	壹〇〇、〇〇〇・〇〇〇
役員賞與金	八〇、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	貳、〇參八、壹七八・五五壹

右報告候也

大正三年七月

東京府南葛飾郡隅田村

鐘淵紡績株式會社

新刊

新しき俳句集

發賣

自然の扉

萩原井泉水著

主張

無意義なる因襲を排して藝術としての俳句を作れ
此の小き詩形に依つて君等が刹那の感激を表現せよ
此の鋭き詩形に依つて君等が中心の生命を表現せよ
俳句は古來不易なる象徴の詩
俳句は日々に新なる印象の詩

俳壇の革命

四六判三百二十頁・定價金七十錢・送費金八錢

內容

俳話―一つの鍵、集末に
選句―春夏秋冬、約千首
習作―
悲報明易うせり　小鳥の如く　林檎の赤き國へ　若葉と我が影と
三日の月かなし　けふも書齋より　暮れ行く人々　行春の一夜
書齋を出で、　雨霽れし人々　御幡の下

文壇の暗示

層雲第一句集

發行所　東京市日本橋區檜物町九　(振替東京五六一四)　東雲堂書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學士 阿部次郎著

三太郎の日記

■再版發賣■

■綠色總和布裝幀■
■函入紙數六百頁■
■定價金壹圓■
■送費金八錢■

内容

斷片

三太郎の日記

一 痴者の歌
二 ヘルメノフの言葉
三 心の影
四 人生と抽象と
五 さま〴〵のおもひ
六 夢想の家
七 山上の思索
八 生と死と
九 三樣の對立
十 蚊帳
十一 別れの時
十二 影の人
十三 三五郎の詩
十四 内面的道德
十五 生存の疑惑
十六 個性、藝術、自然
十七 年少の諸友の前に
十八 沈潛のこゝろ
十九 人と天才と
二十 自己を語る

人生と文藝

一 描寫の題材と描寫の態度
二 内生活直寫の文學
三 再び内生活直寫の文學
四 文壇の社會問題
五 作家と批評家
六 作家と批評家（重ねて）
七 出鱈目

附錄

親友
狐火
痴人とその二つの影
■若きゴーホ
■ゴーホの藝術

著者が事物の實相を凝視し、自己の眞性を解剖し、實在の本質に沈潛する眞摯にして遜讓なる態度は何人に向つても、輕浮と淺薄と傲慢とを振り棄てさせずにはおかぬ。著者は實に謙遜なる個性の愛護者であり、勇敢なる眞性の熱求者である。理智の戲を拒否する誠實なる内省の體驗者である。

著者は實に喧噪なる外面道德の專權と虛妄とを排し、精神の皓潔、心情の純眞動機の正直を向ぶ内面道德の高唱者である。『三太郎の日記』は洵に、斯くの如き今の世類似の稀なる人格者が、その内生活を端的に披瀝したものである。その尊き思索の閃きは、各人の心に光と悅びとを與へずにはおかぬ。現代の最も卓越せる睿智を渴仰し最も深遠なる思想を瞻望し、最も崇高なる藝術を希求する人は必ずや、本書によつて、その渴仰と瞻望と希求との充足を感ずるであらう。（帝國文學批評摘載）

發行所 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四一番） 東雲堂書店

新刊

平塚明序
伊藤野枝譯

■婦人解放の眞意義は果して如何?■

婦人解放の悲劇

婦人を解放せよ、婦人よ自覺せよ、婦人よ、天賦の才能を發揮せよといふ叫びはただ漠然と聞へる。この時に當り歐米先進國の婦人はその所謂解放の第一歩を實現した。そしてその結果はどうであつたか。彼等は更にその第二歩の解放に入らざるべからざる窮境に陷入つた。本書、エンマ・ゴルドマン、エレン・ケイ二女史の論文四種を譯輯せるもの、最も健全にして理解ある兩性問題の解決である。既に我等に用なき因襲の羈絆を脱して女性本然の光輝ある生活に入らんとする勇氣ある女性、及び理解ある男性の一讀を切望す。

附錄

エルマ・ゴルドマン小傳
エレン・ケイ小傳

菊半裁二百七十頁頗美本
二女史肖像寫眞版挿入
定價金六十錢・送費六錢

■茲に健全なる兩性問題の解決あり■

發行所 東京市日本橋區檜物町九（振替貯金東京五六一四） 東雲堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

近刊豫告

現代佛蘭西詩集

リラの花

與謝野 寛譯
梅原良三郎畫

現代の佛蘭西詩人中、新進のロオメン、ワウケエル、ダウリヤツク、シマル、ボルセエ、トルバン、ワアド女史、ケネアン、トラポルト女史、バンヌロオ、マンダン、メリエ、ブロツシユ、テイボオル、ドレエム、アウグマアル、メルシエ、トツサン、ドロマア夫人、バサン、デスプラス、フレミエル、サントクロア、ドクトン、アラン、ビゼ、ブツテイ、マルテイネ、ヱシエル、ラヱエ、デイギヤツク、ボルドリイ、サウケ等數十氏の近作を主とし、ヱルレエヌ、ボドレエル、マウパツサン、サマン等の故人、ヱルアラン、レニエ、ノアイユ公爵夫人等の現代名家、及び伊太利詩人ダンヌンチヨ、マリネツテイ諸家の詩篇を此集に收む。是等は譯者が概ね巴里ラタン區の珈琲店クロツスリイ・ド・リラの一隅の卓に凭りつゝ讀みたるものなれば、記念として「リラの花」と題したり。

發行所 東京市日本橋區檜物町 (振替東京五六一四番) 東雲堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

日本唯一の俳優通信學校

⊙男女俳優志願者の獨學機關
⊙現代演劇研究者の羅針盤

第一年第四號
八月十日發行

演劇講義錄

目下入會金全免の特典あり

■五月より新學期を開始す 此際最も入學に便なり……

■修業年限僅かに一ヶ年 修業後は種々の特典あり……

■月謝一ヶ月金五十錢 入會金五十錢…(目下全免)

■講師は劇壇文壇專門大家 數十名執筆……

■講義は全部振りかな付平易 簡明にして何人にも解し得……

■科目は演劇初歩より懇切 丁寧に解説す……

■會員は新舊劇觀覽の割引其他種々の大特典あり。

規則書往復葉書にて御申越次第送呈す

學務顧問

都新聞記者 伊原青々園氏
文學士 高安月郊氏
文學博士 上田敏氏
公衆劇團舞臺監督 松居松葉氏
文學博士 醫學博士 森鷗外氏

講師

都新聞記者 伊原青々園氏
俳優 井上正夫氏
無名會俳優 東儀鐵笛氏
土肥春曙氏
劇作家 岡本綺堂氏
劇評家 岡鬼太郎氏
文學士 茅野蕭々氏
俳優 河合武雄氏
劇作家 吉井勇氏
文學士 高安月郊氏

文學士 文學博士 俳優 文學博士 文學士 劇評家 音樂家 文學士 文學博士 文學士 主幹

田村成義氏 成瀬無極氏 上田敏氏 楠山正雄氏 松居松葉氏 松本幸四郎氏 藤代禎輔氏 藤間勘右衞門氏 小宮豐隆氏 饗庭篁村氏 北村季晴氏 島文次郎氏 島村民藏氏 森鷗外氏 關根默庵氏 菅鏡造氏 中尾米次郎氏

(其他數氏)

東京市京橋區木挽町 玉木商會内 演劇研究會事務所 (編輯事務取扱)

東京市日本橋區數寄屋町九番地 鈴木書店 (規則書及入會申込取扱)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月一回發行

我等

定價一冊二十五錢

短歌 八月號 募集

雁（小說）……森林太郎
涕泣（歌）……原田琴子
歌……與謝野晶子
市にまじりて（歌）……三島葭子
馭者ヘンシェル（戯曲）……秦豊吉
水のあなたより……無名氏
アニゼ（詩）……堀口大學
薔薇の路（小說）……竹友藻風
別離（小說）……萬造寺齊
續眞實心經（歌）……吉井勇
伯爵と死（戯曲）……茅野蕭々

東京市本郷區駒込林町一九〇

我等發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

心の花

第十八巻　八月號　第八號

源氏物語畫巻に就て　瀧精一
伊太利の話　小林萬吾
ハウムスオルスの浮世繪　野口米次郎
寫生の歌　石榑千亦
畫題としての源實朝　佐佐木信綱
闇の精（飜譯）　松村峰子
雄吉の一家（小説）　鳥谷部陽太郎
新百人一首新釋　志田義秀
北遊記　森鷗外
ひこ（短歌）　西鄉春子
銀の針（短歌）　松本初子
口繪源氏物語繪巻

定價一部金二十錢・半年前金一圓・一年前金二圓・郵稅共

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一

電話本局五一七〇番　振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三巻第八號

假面

定價 廿五錢 郵税二錢

八月號

罅裂のふち(戯曲フロオリツキイ)……松田良四郎
接吻の五分間後(詩)……永瀬義郎
黎明(小説)……山川亮
躑躅(詩)……西條八十
喜悦は神に(詩)……日夏耿之介
奇蹟(小説ストリンドベルヒ)……矢口達
空あかり(歌)……青木小四郎
深刻なる生活(評論マアテルリンク)……吉江孤雁
表紙裏畫……永瀬義郎

■近代評傳叢書■

□加能作次郎氏執筆□長谷川潔氏装幀彫刻

第一 ストリンドベルヒ

■携帯用美本■定價金五拾錢■郵税金四錢

□瀬戸義直氏執筆□長谷川潔氏装幀彫刻

第二 ドストエーフスキイ

■携帯用美本■定價金五拾錢■郵税金四錢

■偉大なる文藝は唯生れて來たものではない夫等の根抵には特異なる作家の個性がある

■さうだ、文格の前に人格がある、即ち吾人は先づ作品の前に作家を知らねばならぬ、作家の生活を知らねばならぬ

■或は熾烈なる情熱、或は數奇なる運命或は奇異なる生理的特徴、或は殘忍なる理智の下に作者自身が如何に狂熱し苦悶し同感し絶叫したかを知ることは軈て安全に作品を鑑賞する、從て又最大の興味を感ずる所以ではあるまいか

■此の點に於て作家の傳記を知るといふことは最も肝要なる條件ではあるまい叢書を刊行する所以である

發兌 東京市神田錦町一丁目 振替東京四一二三番 中興館

■新思潮■

八月號

八月一日發行

■シング紹介……柳川隆之助
■庶民的詩歌とは何ぞや（イエツ）……山宮允
■ぢごくと兵士、兵士と小間使……秦豊吉
（戯曲、シユニツツラア）
■弱蟲の夫（戯曲）……草田杜太郎
■人と幸福（戯曲）……久米正雄
■誘惑（小説）……井出説太郎
■ハイヤシンス、ハルヴエを觀る……久米正雄
■復讐とSTILL……山本雄三
■死人の踊を評す……秦豊吉
■新梨園噂聞書……ふつこらいと
■豆南の旅宿より……山宮允

發行所　東京日本橋區本銀町三ノ二　振替口座東京一二〇五五番　啓成社

定價一部廿五錢　郵稅一錢五厘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

試みに八月號を一讀せよ

現代詩文

第二年第八號

八月號

■誌面擴張■本號より菊判百頁に擴大■

■內容充實■眞に詩壇の最高權威たり■

●詩話……三木露風

□生命(詩)……山宮充
□批評に就て……尾山篤二郎
□やみのあめ(歌)……嵯峨秋子
□幹(詩)……高辻秀宣
□窓を開け(詩)……阪本潮郎
□灯影(歌)……長瀬虎館
□白き繭(歌)……並樹秋人

■卓(カンヂンスキー)……灰野庄平
■アンダアセン逸話二三……蘆谷重常
■ヴエルレーヌ寸評(アナトール フランス)……柳澤健

□明暗の命(歌)……中村秋津
□垂乳根の慈母(歌)……篠田天水
□青草の風(歌)……谷元知安
□惱める影(歌)……飯島ふく子
□燃ゆる木立(歌)……吉村幸夫
□有象無象に與ふ……中川一政
□詩歌……其他數百氏

●詩論……服部嘉香

會友募集

本會の詩文添削は已に定評がある文壇的生活に入らんとする者に祝福多き詩の樓家「現代詩文」は自由に開放してある。今回誌面擴張を機とし、永契の同志を募る。詳細會則は郵券三錢を添へ現代詩文社宛て申込の事。

原稿用紙

現代詩文社特定の原稿紙、半紙判二十字詰二十行百枚金拾五錢、送料金八錢。同じく書簡箋半紙半截判一狀金拾四錢、送料金四錢。何れも罫線、紙質、印刷に最善の吟味を施し、好評嘖々である。註文は前金の事。

改正定價金貳拾五錢・送料一錢五厘

現代詩文社 東京代々木山谷一三〇 振替東京二六一二〇番

取次所 東京堂 北隆館

壹錢五厘切手十八枚送れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月一回 一日發行

音樂

第五卷 第八號

八月號要目

□樂壇時評……牛山充
■逝ける大ソプラーノ ノルディーカ……牛山充
□リリアン ノルディーカの思ひ出……牛山充
■音樂教授法（十二）……草川宣雄
□チャイコーフスキー（三）……長坂好子等
■本譜教授と樂典……古澤春雄
□ノルディーカ夫人の最後の旅……牛山充
■露西亞舞踏の墮落……滋野清武
□新進露西亞二作家……牛山充
■有馬みち（詩）……中川一政
■口繪（リリアン ノルディーカ夫人／ウラディミール レーディコフ）
□樂譜子守謠……（キュッケン作曲／吉丸一昌作歌）
□綠（詩）……長瀨虎朗
■太皷（詩）……高辻秀宜
□ひあふぎ（詩）……望月れい
■月の旅旅（詩）……坂本潮朗
□古井の花（詩）……內海泡沫
■九十九里の波に和して歌へる……柳澤健
□一心にあやせば（歌）……大熊信行
■きよきひびき（詩）……林古溪
□海內樂壇海樂壇……
■音樂通論……乙骨三郎
□歌劇物論『田舍の騎士』……牛山充

■發行所 東京音樂學校學友會 振替口座東京二〇六二番
■發賣所 神田表神保町 東京堂

■會友募集
本誌講讀料半ヶ年分前金一圓三十錢以上前納者は會友となり本會所催の音樂會及び講演會に隨意參聽するを得べし會友は又東京音樂學校所催春秋二季の大演奏會にも土曜日に於て入場の便宜を得べし。次回の土曜演奏會は九月二十六日の土曜日に開催す、曲目は九月號にて發表すべし。

■定價一部 二十五錢
郵稅 一錢五厘
半ヶ年前金稅共 一圓三十錢
一ヶ年前金稅共 二圓五十錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

八月一日發行

アララギ

八月號

定價二十錢

○火（短歌）……島木赤彥
○短歌三十首……古泉千樫
○凪の星（短歌）……中村憲吉
○曇り日の若楓（短歌）……土屋文明
○折々の歌（短歌）……平瀨泣崖
○盲目の蝿（短歌）……森園天涙
○諦念（短歌）……齋藤茂吉
○福岡より……長塚節
○歌評……赤彥 茂吉 千樫 憲吉
○臨海小景（短歌）……北原白秋
○山中秋景（短歌）……北原白秋
○鍼の如く（短歌）……長塚節
○滯歐雜誌（ブレーク）……石原純
○悪魔の聲……山宮允
○萬葉集短歌論講……赤彥 茂吉 千樫 憲吉
○一つ二つ（歌論）……長塚節
○良寛歌集私抄に就て……齋藤茂吉
○良寛和歌私抄……齋藤茂吉

短歌

蕨桐軒　齋藤柚雨　柿崎梧風　中原しづ
河野愼吾　並木秋人　竹尾忠吉　金原よしを
土田耕平　井澤蛇川　山中登　三村りえ
森山汀川　都會詩人　諸戸利彥　久保田ふじ
平沼ひさし　長田林平　篠田祥治　小蟹女
兩角七美雄　結城哀草果　秋山瑟二　唐澤うし

誌友募集

普通誌友卅錢　特別誌友五十錢

東京青山南町五丁目八十一番地青山腦病院齋藤茂吉方

アララギ發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

みづゑは本邦最古にして且つ唯一の水彩畫專門研究雜誌なり

□濱をうろつく人（水彩畫原色）……坂本繁次郎
□草の上（同）……石井柏亭
□ブルーヂの尼寺（同）……小川千甕
□シネラリヤ（同）……吉田豐
□風景（水彩畫寫眞版）……赤城泰舒
□其他水彩畫寫眞版

月刊美術雜誌

みづゑ

第百十四

八月三日發兌

一部金廿五錢

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸氏は一日も本誌を坐右に欠く可からず

□フインセント、ヴアン、ゴッホ論……中井宗太郎
□技巧……齋藤與里
□前途……海老名文雄
□ブルーヂの思出……小川千甕
□去年の夏……石井柏亭
□夏の慰樂……三宅克己
□庄内旅行……中川八郎
□塔……山崎紫紅
□綠蔭小話……藤田紫舟
□高野物語……佐竹士節
□大島の旅……赤城泰舒
□研究所たより

發行所　東京小石川關口駒井町三　振替口座東京六九六三番　春鳥會

■■■盛夏八月の

生活と藝術

第十二號
正價金十八錢
郵税金一錢

□Men's Dress……Marinetti
□暑い日に……仲田勝之助
□『人形の家』の草稿……和氣律次郎
□『藝者屋町』を讀んで伊庭君へ……杉村敏夫
□晝寢の暇……仲木貞一
□軟風に向ひて……大熊信行
□若い事務家の手帳……西村陽吉
□お稽古場の半日……安成くら子
□地球……鍋井克之
□虐げられたるものよ……加藤一夫
□私娼と兵卒……中原靑蕪
□あの男……荒川義英
□城崎温泉より……土岐哀果
□都市と田園……
□新刊……

發行所　東京市日本橋區檜物町九（振替貯金東京五六一四）　東雲堂

各女學校長ヨリ多大ノ御賞讚ヲ博シツヽアリ

特約希望の方は返信料添へ照會あれ

▶破れ靴下一足三錢より繕ふ◀

新案特許

くつ下つくろい器

本器は靴下の破れた所を繕ふばかりでなく、總てスコッチ毛織物類はメリヤスでもシャツでもヅボンでも其他何でも素人でもどんな不器用な方でも簡易に明らぬ様に繕ふことが出來ます至極重寶な經濟的な器でありますから家庭には一個は是非なくてならぬ器であります

定價 一個金三十錢 送料四錢

郵劵代用一割增（二錢又は三錢切手に限る）

發賣元
東京市京橋區銀座四丁目十二番地
ハンエイ社
電話京橋一七一四

▲雜貨店靴店及タバコ店に有り無き時は弊社へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大正三年二月二十七日第三種郵便物認可
大正三年八月一日發行（毎月一回一日發行）
番紅花第一卷第六號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY